

第 1 号議案

# 2024 年度事業報告書

自 2024 年 4 月 1 日

至 2025 年 3 月 31 日

一般社団法人 電子情報通信学会

# 目 次

## 事業報告

1. 概況	1
2. 共通事業	4
3. ソサイエティ及びグループ事業	6
4. 支部事業	10
5. 選挙	12

## 事業報告（附属明細書）

### I. 共通事業

1. 会議に関する事項	1
2. 出版に関する事項	2
3. 総合大会に関する事項	3
4. 選奨に関する事項	4
5. 会員に関する事項	10
6. 教育活動に関する事項	12
7. 国際活動に関する事項	13
8. 学会からの情報発信に関する事項	14
9. 規格調査会に関する事項	14
10. その他の事項	15

### II. ソサイエティ及びグループ事業

1. ソサイエティ及びグループ事業概要	16
2. ソサイエティ大会に関する事項	30
3. 国際会議に関する事項	31
4. 出版に関する事項	31
5. 選奨に関する事項	33
6. 研究会等に関する事項	40
7. ソサイエティ及びグループ会員に関する事項	43

### III. 支部事業

### IV. 2024年度役員及び代議員の構成

### V. 2025年度役員候補者及び代議員の選挙

# 2024 年度事業報告

## 1. 概況

昨今の社会情勢を振り返ると、今年度は COVID-19 の大混乱も過去のものとなり新たな生活様式を取り入れながら、徐々に経済社会活動を取り戻しつつある中、戦争の勃発、物価の高騰、世界各地で起こる異常気象等、我々を取り巻く社会情勢は厳しいものがある。このような状況において、アカデミックな本会の意義は益々問われており、学会というピュアな立ち位置で学術を磨き、そして諸々の社会課題を解決するイノベーションを興すことが期待されている。「変わらないもの」と「変わるもの」を考えながら、次世代に残す学会を議論し、限界打破のイノベーションにより、本会がコミュニケーションの夢とそれによって実現される豊かな未来社会に向けて挑戦し、革新的技術及びイノベーションを継続的に創出する学会として大きく飛躍することを目指し、以下の基本姿勢で活動を進めた。

1. 広汎な知が交流する場を作り、新たな学術領域をひらく
2. 社会課題の解決に貢献し、新たな社会のビジョンを作成する
3. 技術倫理の向上に努め、社会に向けて発信する

本会の事業は、学会全体事業（以下、共通事業という）、ソサイエティ及びグループ事業、支部事業の三つに大別されるが、それぞれ以下のような取り組みを行った。

### (1) 幅広い知の融合と人材の育成、及び、会員サービス・運営の質の向上

広汎な知が交流する場を作り、新たな学術領域をひらき、会員サービスのさらなる拡充を目指して、次のような施策を推進した。主な成果を以下に示す。

#### ① 広汎な知の交流

広汎な知が交流し、新たな学術領域をひらき、社会課題の解決や新たな社会のビジョンについて、議論や意見交換ができる機会作りを促進した。そのために、ウェビナーによる発信、研究会・大会等の魅力あるイベントを開催し、HPやメール、SNSを活用し幅広く案内、周知し、会員サービスの向上、人材育成、及び、新規会員の獲得を目指した。

#### ② ジュニア会員制度の充実

電子、情報通信分野に若い多感な時期より興味を持ってもらい将来のリーダー育成に貢献するため、ジュニア向けHPの充実、Lineによりコラムや時季に関する情報の配信（48回）、総合大会でポスターセッションの実施、ジュニア向けWebinarを1回実施した。

#### ③ プラチナクラブの充実

主に40歳以上の会員を対象に、学会を自己実現の場に使え、人生を通した研究者・技術者としての充実感を高めるための講演会、見学会、意見交換会等の場や、経験と知識を活かした後継者支援の機会を提供する。今年度は3回の見学会（東京大学、東京科学大学、KDDI総合研究所）を実施した。

#### ④ ウェビナーシリーズの充実とビデオアーカイブ拡充

下記のシリーズを定期的に配信した。さらに、それらに加え、会長就任挨拶、会長座談会、研究会、大会の招待講演等を収集、アーカイブ化し、ビデオコンテンツの充実に努めた。

(ア) **IEICE ICT Pioneer Webinar** シリーズ：本会がカバーする ICT に関する技術分野において、10～20 年以上にわたり活躍された、専門分野・領域の第一人者に、当該技術の現在、過去、未来を語って頂く本シリーズを継続した。今年度は 12 回実施し、毎回 100 名以上の視聴があった。またそれらをアーカイブ化し YouTube より配信している。

(イ) **Distinguished Lecturer (DL)** による英語講演：海外会員へのサービス向上、グローバル化の一環として、DL による英語講演の配信を 11 回実施し、youtube より配信している。

#### ⑤ 維持員サービスの充実

本会を支えて頂く維持員の皆様に対して、感謝の意を表するため「維持員交流会」を3月に開催した。学会紹介、学会事業紹介、名刺交換会を実施し、本会の事業状況をご理解頂くことに努めた。

#### ⑥ アソシエートメンバー制度の推進

学会の利用者を増やすことで、様々な分野との連携活動、会員をハブとする活動の場を拡げ、学会の利用者を増やすため、2023年度からアソシエートメンバー制度をスタートさせ、2年目である2024年度は国内569人、海外209名のメンバー登録があった。6～8通/月に学会の最新情報（研究会開催、論文特集号、大会案内）をメールでメンバーに送付した。

#### ⑦ IEICEアンバサダーの制度化の推進

会員に対して学会活動を積極的に情報提供を行うことを目的として、IEICEアンバサダー制度を開始し、国内5人、海外1人のアンバサダーを任命した。アンバサダーに学会公式SNSを通じて直接情報発信を行ってもらうことで、会員視点からの情報提供を強化し、学会活動への理解と関心を深め、学会の認知度を向上させた。

#### ⑧ 会員サービスサポート・運営体制の充実

学会業務のデジタル化の推進、最新ICTツールの活用により、学会業務の効率化を図った。シニア人材、学生アルバイトを活用したIEICEサポートチームにより、情報システムのクラウド化、各種オンラインイベントの支援を進めた。

### (2) 新たな時代に向けた学会の在り方

#### ① 会長声明

電子情報通信分野の大学や大学院の学生の就職状況は極めて良好であるが、就職活動は年々、早期化、過熱化しており、大学、大学院の教育に支障をきたす状況になっている。このような現状に警鐘を鳴らし、大学・大学院での学術研究を一層充実させるために、学生の学会活動を企業の人事を含めたメンバーに見える化し、大学・大学院生の教育機会を尊重した求人スタイルへの移行を目指すことを主旨とする会長声明を公表した。これに関わる具体的取り組みとして以下を実施した。

- ・ **Advanced Research Track (ART)**：顕著な研究業績をあげた学生員と、ハイレベルな研究人材を求める企業をマッチングさせる。学生員にポスター発表をしてもらい、それを参加企業が評価するイベントを2025年3月に学生23名、企業2社が参加の中で実施した。
- ・ 2025年3月の総合大会企画セッションにおいて、「新しい日本の理工系人材のキャリアパス」と題して、本会周辺領域の学会会長、理事らを招き、パネル討論を実施した。

## ② 情報通信エンジニアリングの検討

情報通信インフラは、現代の人々の生活を支え、将来の人々にも多大な恩恵をもたらす社会基盤・システムである。情報通信エンジニアリング分野の健全なる発展を図り、社会の発展に寄与していくため、情報通信インフラを総合的に運営することは学会に課せられた使命である。このような背景を踏まえ、今年度発足した情報通信エンジニアリング準備委員会において、部門の立ち上げに向け、規程類及び会費制度の整備を行った。また、具体的な活動として、2025年総合大会において、「進化する通信インフラ 情報通信エンジニアリングの現場と未来～若手技術者の挑戦～」というテーマで企画セッションを実施、2025年会誌特集号の執筆、テーマ別議論を実施した。

## ③ 財務戦略

会員数の減少傾向は一定の歯止めがかかりつつあるが、今後は、会員の年齢構成から、ボリュームゾーンの年代（50代）が定年に差し掛かり、会員数減少加速が見込まれる。これに伴い、論文誌の投稿件数減少、年会費収入の減少が見込まれ、将来的に学会財務の安定性・継続性が危惧される状況であり、学会の持続可能な運営に向け財務戦略アドホックより次のような提言が理事会に諮られた。

- ・ 会議の黒字化に向け、二種研・三種研・国際会議を対象として、「総収入」の一部を会議管理費として計上する予算計画書を策定し、会議管理費相当分をソサイエティ会計に、また、共通会計とソサイエティ会計のアンバランス抑制のため、会費収入を除くソサイエティ総収入の一部を共通会計に繰入れる仕組みを導入する。

## ④ 多言語出版サービス

海外学会が英語一択によるグローバル戦略を進める現状に対して、各国母国語選択は、多様性の観点で本会グローバル化の差異化要素になる。また、母国語は発信や理解が容易であり、近年のAIによる翻訳の積極的な利用は本学会の優先すべきことでもある。たとえば、各国語で執筆、プレゼンした内容が多言語に翻訳されることで、海外学会会員の相互利用につながり、本会への利用機会増加、自国にいながら自国の言語で本会に参加できる等、海外の研究者に新しい学会との関わり方を提供できる可能性がある。このような新しい学会の形を作っていくため、英文論文誌の多言語での出版サービスのトライアルを2024年度より実施した。

## ⑤ 企業イニシアティブ分科会

ICT分野で活躍する企業は、業種を超えたDX、社会の仕組みのDX等、社会課題の解決がビジネスの主戦場になっている。そのような企業の期待に応えるために、特定の専門領域の枠を超えた議論の場、機会の提供が必要と考え、4分科会体制（ビジネスインキュベーション分科会、AIが相互運用される社会システム検討分科会、カーボンニュートラルICT分科会、ライフスタイルデザイン分科会）で活動を実施した。平行して、ソサイエティ大会、総合大会の

大会企画、東京支部シンポジウムにおいて、これらの活動状況について報告を行った。

### (3) 論文誌の価値向上

英文論文誌のインパクトファクター向上に向け、非会員による論文投稿、学会 HP のトップページより主要論文の紹介、論文アクセス数上位の論文の周知等のこれまで実施してきた取り組みを継続している。オープンアクセスについても積極的に対応を進め、J-STAGE において次の 3 誌がオープンアクセスに対応した。(ED(2020 年 1 月より)、EA (2022 年 10 月より)、EC (2023 年 8 月より)) さらに ComEX が、2023 年 10 月より、EB 誌が、2024 年 2 月より、IEEE Xplore を利用してオープンアクセスに対応している。また、多言語翻訳サービスを英文論文誌に適用することで、海外の方が母国語で英文論文誌を参照することが出来るため、大幅なアクセス数の増加が期待でき、インパクトファクター向上につながると考え、2024 年 4 月より英文論文誌を多言語展開するためのトライアルを実施した。

## 2. 共通事業

### (1) 各種会議

2024 年 6 月 6 日の定時社員総会において、山中会長、植松次期会長を代表理事とする 2024 年度役員体制を発足させた。理事会 9 回開催をはじめ、理事会傘下の各種委員会等を開催し、学会の円滑な運営を行った。また、支部との連携強化を目的に、支部長が理事会にオブザーバーとして参加した。

### (2) 出版

本会の「実施事業」の柱である会誌発行事業については、2024 年度は、12 冊、合計 196,100 部（月平均 16,340 部）を発行配布した。読みやすく、親しみやすい会誌を目指して、企画を行い、特集・小特集の毎号化を実施した。

知識ベースアクセス件数は累計で 7,560,000 件となり広く利用されている。

出版事業として、大学シリーズの重版 2 点、レクチャーシリーズとして重版 1 点を発行した。

### (3) 総合大会

総合大会は、2025 年 3 月 24 日（月）から 28 日（金）にかけて、東京都市大学世田谷キャンパスで開催された。本年度もプログラム委員会を組織し、企画・準備を進め、大会の活性化と魅力向上を図った。具体的には、43 もの企画セッション、ランチョンセミナー、スポンサーセッション、インダストリアルセッション、オプションツアー、IEICE Expo 東京 2025（企業展示）などを実施し、参加者に多様な選択肢を提供した。また、大会イベントとして、24 日（月）GNW（グローバルネットワークワークショップ）と国際ショナルレセプションも開催した。25 日（火）には全ソサイエティ合同で若手会員に学会の魅力伝える Welcome Party、26 日（水）にはプレナリーセッションが開催され、山中直明会長による会長講演、梶田隆章先生と永妻忠夫先生による基調講演が行われた。さらに、プレナリーセッション内では学術奨励賞授賞式、教育功労賞授賞式、フェロー称号贈呈式が実施された。その後開

催された懇親会には 200 名以上の参加者が集まり、盛況となった。なお、8月の会長声明を受けて、企画セッション「新しい日本の理工系人材のキャリアパス」も実施された。参加者数は 7,654 名、公募講演数は 1,784 件であった。

#### (4) 選奨

第 86 回功績賞を 4 名に、第 62 回業績賞イ号を 3 件 5 名に、第 62 回業績賞ロ号を 3 件 9 名に、第 62 回業績賞ハ号は 1 件 2 名に贈呈することを決定した。

第 81 回論文賞を和英論文誌 8 誌から選んだ 12 編に、第 7 回最優秀論文賞をその中の最も優秀と認めた 1 編に贈呈することを決定した。

第 11 回末松安晴賞を 2 名に贈呈することを決定した。

第 87 回学術奨励賞を 46 名（基礎・境界/NOLTA ソサイエティ 8 名、通信ソサイエティ 25 名、エレクトロニクスソサイエティ 8 名、情報・システムソサイエティ 5 名）に対し贈呈した。

第 9 回教育優秀賞を 3 名に贈呈することを決定し、第 9 回教育功労賞を 7 名に贈呈した。

#### (5) 会員に関する事項

定款に基づき、名誉員に 4 名を推薦することとした。

規則に基づき、フェロー称号を 23 名に、シニア会員称号を 39 名に贈呈した。

会員数（名誉員・正員・学生員、ジュニア会員、維持員、購読会員）合計については、2024 年度末で 23,179 名となった。

#### (6) 教育関連活動

我が国の産業界における電気・電子系技術力の維持、向上を目的とし、日本工学会の ECE プログラムの認定を受けた「電気・電子系高度技術者育成プログラム」を実施した。2024 年度の受講者数は 40 名であった。

JABEE の学部認定審査については、2024 年度も定常的な活動を行った。JABEE 本体へ委員を派遣して JABEE の運営に協力するとともに、学部プログラムの審査を電気学会、情報処理学会と連携して実施した。

本会、電気学会、情報処理学会からなる電気電子・情報系 CPD 協議会については、情報交換を中心に実施した。また、日本工学会の CPD 協議会・CPD プログラム委員会には委員を派遣して継続的に議論に参画した。

電子情報通信分野の第一人者が入門者向けに、グローバルに話題となっている最新技術について分かりやすく講義する IEICE 先端セミナーを、2024 年度には新たに①6G に向けた 3GPP の無線アクセスの標準化動向、②次世代半導体の技術動向の 2 コースを制作した。なお、本セミナー参加者は設問に答えることでデジタルバッジを取得できる。

小中高校生を対象とした科学教室は、2024 年度は支部において実施した。

#### (7) 国際活動

国際委員会では、Distinguished Lecturer (DL) による英語 Webinar を継続的に開催し、リアルタイムのストリーミング配信とともに、コンテンツのアーカイブ化により、見逃し配信を可能とし、国内外のより多くの視聴者に届ける取り組みを進めている。

国際セクション代表者との意見交換の場である All Sections Meeting には、対面参加の 6 セクション代表に加え、国際委員会の委員などを招聘、今年度は 3 月 25 日（火）にハイブリッド形式で開催する。

さらに、日本国内で学ぶ留学生や若手研究者の学術コミュニティ形成を支援することを目的として、英語ポスターセッション「GlobalNet Workshop」を開催する。本ワークショップは、9 月のソサイエティ大会に続く形で、第 5 回目となる今回は、3 月 24 日（月）に総合大会のプレイベントとして都市大で実施、今回は 15 か国から 90 件の講演申込を受領した。

#### （8）規格調査会

規格調査会活動として、委員会議を 4 回、専門委員会及び小委員会を 39 回開催した。国際標準化に関して取り扱った IEC 文書は 65 件であった。

#### （9）外部機関との連携等

ICT分野では従来の範囲を超えた他分野との連携が重要となってきたおり、府省や他学会との連携活動を推進した。府省関連では、ソサイエティ大会企画セッションにおいて、「科学技術・イノベーション政策の動向」というテーマで、内閣府、総務省、文科省、経産省から講演を頂いた。2025年2月には、総務省国際戦略局幹部と会長を初めとする本会役員、支部長ら24名との第16回意見交換会を開催し、国の技術政策と学会の役割等について情報交換を行った。日本機械学会とは、日本機械学会2024年度年次大会先端技術フォーラムにて、連携企画セッションを実施、電気学会とは、2025年2月に役員懇談会を実施し、両会の問題意識、取組状況の共有、意見交換を行った。さらに、電気・情報関連学会連絡協議会活動を継続した。MCPCとの相互協力関係として、相互の会員に活動を周知するため、HP上のバナー交換を行った。

また、他団体等との連携については、関連学術団体等に対して226件の協賛・後援等を行った。

### 3. ソサイエティ及びグループ事業

#### （1）ソサイエティ及びグループ事業

2024 年度も、各ソサイエティ及びグループごとに、会員の研究成果の発表と議論の場を提供する事業を中心に、特色のある活動を推進した。

① 基礎・境界ソサイエティ（ESS）は、本会の全研究分野に対する基礎領域及び境界領域における研究活動を担うとともに、新領域の創造を推進するという重要な役割を果たしている。しかしながら、昨今の学会全体での会員の減少や、それに伴う若手会員への学会運営に関する負担増加の問題を考えると、研究面のみならず、ソサイエティ運営の在り方に関しても継続的な検証と改善が不可欠となっている。2024 年度は、新規会員獲得に向けた若手・ジュニア世代へのアウトリーチ活動、ならびにソサイエティ誌多言語化の取り組みなどを含めた国際活動への貢献を強化するとともに、研究会活動の活性化に向けた研究専門委員会のグループ化に関する取り組み、さらに持続可能な運営体制に向けた改革に取り組んだ。

② 通信ソサイエティ（CS）は、通信システム・通信ネットワークに関する基盤から応用技術、

およびその近傍領域を研究活動領域としている。これらの領域における学術の発展、産業の興隆並びに人材の育成を促進し、豊かなコミュニケーション社会の形成と地球環境の維持向上に貢献するべく活動を行っている。2024年度はコロナ終息後の新たな展開を目指した年度となった。通信ソサイエティの活動もハイブリッド型の活動から対面型の活動が増え、特別研専や分野横断型研専の新設、産学活性化に向けた取り組みの立ち上げなど、コロナ禍以前のアクティビティから更なる発展に向け活動を進めている状況である。

研究会活動においては、コロナ終息後の新たな展開を目指した研究会運営を行った。サイバーライフラインに関する分野横断型研究会(HCL)の発足、地域 ICT プラットフォームに関する特別研究専門委員会(AA-ITS)の発足、産学活性化課題検討 WG の実施など、分野横断的な研究会活動、新たな研究領域の開拓、産学活性化に向けた取り組みを進めた。また、通信ソサイエティのフラグシップ国際会議である ICETC2024 を 2024 年 11 月に北九州でオンサイト開催した。ICETC2024 では、韓国通信学会 (KICS) による特別セッションや、通ソ会長と KICS 会長のボードミーティングを開催し、通ソと KICS の国際間連携を深めた。また、各研専における海外での研究会開催の取り組みが再開されるなど、コロナ前に行われていたような国際化に向けた動きも活性化し始めている。

出版活動においては、英文論文誌 (EB) および ComEX の IEEE Xplore への掲載が開始され、ComEX にインパクトファクタが付与された。これらにより、EB 及び ComEX 両誌の国際的な知名度や発信力が高まり、投稿数の増加やインパクトファクタの向上が期待される。また、通信ソサイエティ論文誌の投稿数増加に向けた推薦論文制度の活用について、編集会議と研専運営会議が連携し、より多くの論文の推薦を目指した営みを積極的に推進している。

会員事業企画においては、ICETC2024 の運営やシスターソサイエティ協定の締結、メンバーリストや web ページでの情報発信を行った。通信ソサイエティの海外情報発信および海外会員の維持・増強を強化する施策として、紙媒体による情報提供に加えて、海外会員がアクセスしやすい通信ソサイエティポータルサイトを構築・公開し、海外会員が本会情報 (論文誌や国際会議等) へアクセスすることを容易とした。今後も、オンラインツールを活用した情報発信を国内外の会員に対して継続的に行うとともに、海外会員がアクセスしやすいポータルサイトの整備等、投稿機会の増加や通信ソサイエティの国際化に向けた活動も積極的に進めていく予定である。

- ③ エレクトロニクスソサイエティ (ES) は、電子情報通信システムを構成するエレクトロニクスやフォトニクスの材料、部品、デバイス、サブシステムに関する基礎から応用までを研究活動領域としている。この領域における我が国の産官学連携促進や科学技術の進歩への貢献、会員 (研究者) の研究成果発表や研究者間の議論の場の提供を目的としている。「企画会議」、「編集出版会議」、「研究技術会議」の 3 会議体制で上記活動を効率よく実施し、会員の満足度向上を目指している。平成 28 年度から研究技術会議内に立ち上げた 3 つの領域委員会 (電磁波基盤技術領域委員会、フォトニクス技術領域委員会、回路・デバイス・境界技術領域委員会) に国際会議の主催・共催・協賛や研究専門委員会活動にかかわる承認権限を委譲し、手続きを迅速化するとともに、各領域内で近接分野の研究専門委員会の合同・連携企画を推し進めている。さらに、領域間の共同企画や、研究専門委員会活動の

活性化に関する共通の課題は、領域連携会議にて議論を進めている。

2024年度、エレスプレナリーセッションでは研究分野の拡大や技術分野の活発化に繋がる研究者の「きづき」を導くことを意識した特別講演会を開催した。ソサイエティ大会のプレナリーセッションでは「改めて、IOWN とは何か？」と題し、研究者・技術者視点でIOWNの目指す方向性を俯瞰し、未来社会を具現化するための技術課題は何かを考え、研究者の新たなチャレンジを鼓舞することを目的として特別講演を開催した。また、総合大会のプレナリーセッションでは、「半導体産業の再興に向けて・魅力の醸成と人材育成の試み」と題し、日本における半導体産業の再興に向け、その半導体産業の魅力に再注目し、特に人材育成に向けた取り組みについて議論することを目的に特別講演を行った。いずれも、単なる技術の最新動向の報告ではなく、産業界、ビジネス観点の内容を含める事で社会実装に向け、研究開発方針策定の参考となる要素を含めた。さらにエレクトロニクスソサイエティ所属の研究者等が新たな研究課題を着想するきっかけ作りや、同技術分野の人材育成に関しての議論の場の提供に寄与した。また、学生員や若手会員が先輩研究者と自由に意見交換ができる場の構築を目的に全ソサイエティ共催の **Welcome Party** を開催し、エレスがオープニングの企画・司会を務めた。

また、組織自体のサステナビリティを担保、つまり将来にわたり魅力あるエレス活動を目的として、委員会等活動の効率化や将来を見越した活動に向けた施策を実行した。前年度より引き続き研専の在り方の議論を持ち掛け、例えば、複数の研専が研究会を同時開催するとともに、その会場にて当該研専の専門委員や執行部が各研専の独自性の維持もしくは運用効率化に向けた研専の統廃合などの将来的な流れを議論する機会を持ち込むような枠組みを伴う企画に対して、積極的に開催費用を支援する施策を設けた。さらに、「研究会の運営等に関する新しい規定や取組の説明と意見交換」の会合を開催し、研専の委員長や領域の代表等を含むエレスリーダーに対して、本会における財務改革の趣旨や課題の共通理解を得る機会を設けた。加えて、効率化の施策としては、これまでエレス独自のファイル共有サーバーや、アーカイブ公開サーバーを有していたが、金銭的成本だけでなく維持管理の稼働コストの低減を目的に、本部サーバーへの集約を推進・作業を完了した。今年度は5回の執行委員会も、ハイブリット会議と、完全オンライン会議でメリハリをつけるソサイエティの運営を行い、より次世代に繋げられるよう効率化を進めた。

- ④ 情報・システムソサイエティ (ISS) は、情報処理技術とコンピュータ・通信・人間を融合したシステム化技術に関する基礎から応用までの分野を研究領域としている。本ソサイエティの役割は、会員に研究発表と交流の場を提供することであり、ひいては重要な社会基盤である情報技術分野の持続的な発展と情報社会での様々な問題解決に貢献することにある。ISS が、同研究分野の活動の基盤としてメンバーの活動を支援・促進し、もって社会的役割を果たしていくために、2024年度も引き続き、論文誌、研究会、総合大会・FIT、ソサイエティ誌、及びこれらソサイエティ活動に関する広報の強化に重点を置いて活動を展開した。
- ⑤ NOLTA ソサイエティ (NLS) は、今年度は、研究会、大会、国際会議等は完全対面形式を原則とする開催に移行した。また、国際会議等の準備状況や方針の確認を各回の委員会

にて定期的に行った。その他、協賛や技術共催など、他学会への協力を積極的に推進するとともに、KICS とは MoU の調印式も行った。NOLTA ソサイエティ大会の会計の取り扱いについて見直しを行った。また、活性化事業予算を活用し、NOLTA ウェブサイトを刷新したり、NOLTA Journal のフライヤーを作成したりするなど、NOLTA の活動を広める取り組みを行った。

- ⑥ ヒューマンコミュニケーショングループ (HCG) は、人間中心の新しいヒューマン・コミュニケーションエンジニアリングに関する学際的研究の推進を目的として 1995 年度に発足し、様々な研究領域を取り込みながら学際的研究を推進している。工学研究者だけでなく、人文科学、社会科学系の研究者も多く参加しており、様々な観点から自由に開かれた議論を行う場を提供している。長年の活動により、関連分野の発表の場として認識されており、他分野の研究者にとっての電子情報通信学会の入り口的役割を果たしている。

2024 年度は、運営委員会をオンラインで開催したものの、各研究会や HCG シンポジウムでは対面のみでの開催も増え、改めて対面開催の良さを活かした企画・実施がなされた。論文誌での特集号の企画は従来通り継続され、学際研究の発表・議論の場を提供した。今年度は、昨年度に引き続き 2 度目となるが、HCG の紹介と他ソサイエティとの連携の場として、3 月に開催された総合大会において企画セッションを実施した。

## (2) ソサイエティ大会

- ・ソサイエティ大会を 2024 年 9 月 10 日(火)～13 日(金)の 4 日間、日本工業大学 埼玉キャンパスで開催した。参加者 2,328 名、公募講演数は 1,053 件であった。
- ・FIT2024 (第 23 回情報科学技術フォーラム) を情報・システムソサイエティ、ヒューマンコミュニケーショングループ及び情報処理学会が合同して、2024 年 9 月 4 日 (水) ～9 月 6 日 (金) に広島工業大学 五日市キャンパス (ハイブリッド開催) で開催した。参加者 2,256 名 (現地来場者 1,062 名)、講演件数は 545 件であった。

## (3) 国際会議

13 件の国際会議を開催した。

## (4) 論文誌等出版

- ・和・英論文誌 8 誌のオンラインジャーナルを以下のとおり公開した。
  - ◇ 和文誌：掲載総ページ数： 1,584 ページ (参考：前年 1,853 ページ)
  - ◇ 英文誌：掲載総ページ数： 4,722 ページ (参考：前年 5,996 ページ)
- ・ソサイエティごとの電子ジャーナルとして、NOLTA (NOLTA ソサイエティ：年 4 回)、ComEX (通信ソサイエティ：月 1 回)、ELEX (エレクトロニクスソサイエティ：月 2 回) をそれぞれ発行した。
- ・各ソサイエティ及びグループから、それぞれニューズレターやソサイエティ誌が出された。

## (5) 選奨

- ・基礎・境界ソサイエティ：功労賞 1 名、貢献賞 40 名
- ・NOLTA ソサイエティ：貢献賞 6 名

- ・基礎・境界ソサイエティ／NOLTA ソサイエティ：Fundamentals Review ベストオーサー賞 1 編
- ・通信ソサイエティ：ソサイエティ論文賞 11 編、マガジン賞 1 編
- ・エレクトロニクスソサイエティ：ソサイエティ賞 3 件、レター論文賞 該当なし、ELEX Best Paper Award 2 件、招待論文賞 1 件、エレクトロニクスソサイエティ学生奨励賞 総合大会 6 名、エレクトロニクスソサイエティ学生奨励賞 ソサイエティ大会 6 名
- ・情報・システムソサイエティ：ソサイエティ論文賞 該当なし、活動功労賞 8 名、査読功労賞 10 名、船井業績賞 1 件、船井ベストペーパー賞 3 編、FIT 論文賞 7 編、FIT ヤングリサーチャー賞 9 名
- ・ヒューマンコミュニケーショングループ：ヒューマンコミュニケーション賞 6 件、HCG シンポジウム賞 15 件

#### (6) 研究会

各ソサイエティ、グループで開催された第一種研究会の開催数と発表件数は下記のとおり。  
(ただし共催、連催等の場合は、それぞれで重複集計。)

・基礎・境界ソサイエティ／NOLTA ソサイエティ	103 回	2,284 件
・通信ソサイエティ	136 回	2,338 件
・エレクトロニクスソサイエティ	83 回	1,270 件
・情報・システムソサイエティ	110 回	1,816 件
・ヒューマンコミュニケーショングループ	21 回	364 件

#### (7) 会員数 (2024 年度末)

・基礎・境界ソサイエティ	4,181 名
・通信ソサイエティ	8,294 名
・エレクトロニクスソサイエティ	4,292 名
・情報・システムソサイエティ	8,131 名
・NOLTA ソサイエティ	389 名
・ヒューマンコミュニケーショングループ	809 名

## 4. 支部事業

国内 10 支部（北海道、東北、東京、信越、東海、北陸、関西、中国、四国、九州）は、各地域に密接した活動として、支部（連合）大会、各種講演会、シンポジウム、見学会、学生向け・小中高生向けのイベント、学生会活動、選奨等の事業を展開した。各支部の活動概要は以下のとおり。

#### (1) 北海道支部

- 一般事業：講演会 1 件。支部連合大会 1 回（北海道大学）。専門講習会 1 回、総務省と意見交換会。
- 教育事業：応用物理学会企画の小中高生向けイベントの共同主催。リフレッシュ理科教室

(北科大会場)、ロボットトライアスロン 2024 を後援

- 学生会事業：学生会主催講演会 3 件、学生会研究発表会（インターネットシンポジウム）1 回、学生ランチ活動として講演会開催。支部連合大会で学生交流会を企画。
- 選奨：学生奨励賞 13 名、学生会インターネットシンポジウム優秀発表賞 3 名、支部学生ランチ顧問表彰（発表賞）6 名、学生ランチ活動貢献賞 1 名、支部連合大会若手優秀論文発表賞 10 名

## (2) 東北支部

- 一般事業：講演会 16 件（ハイブリッド 1 件、対面 15 件）、学生と地域企業によるパネルディスカッション 2 件、支部連合大会 1 件、協賛・講演事業 3 件。
- 教育事業：小中高生向け事業 3 件開催。
- 学生会事業：東北大学学生ランチ活動。
- 選奨：学生優秀論文賞 2 名、学生優秀発表表彰 2 名、優秀学生表彰 22 名、感謝状贈呈（座長を務めた学生）11 名、功労感謝状 1 名

## (3) 東京支部

- 一般事業：シンポジウム 3 回を開催。また、見学会 3 回、地域イベント 1 回を実施。
- 教育事業：学校、企業、NPO と連携した共同主催の教育イベントを公募し 6 件を採択し、実施。
- 学生会事業：講演会 1 回、見学会 1 回を開催。学会誌 12 月号「学生会だより」の記事執筆。学生員の卒業研究論文及び修士論文の紹介、研究発表会（オンライン）を開催（発表件数 103 件、うちジュニア会員 16 件）。学生ランチの 4 校が子供科学実験教室、講演会、交流会を実施。
- 選奨：学生奨励賞対象者 9 名、ジュニア奨励賞 2 名、学生功労賞 3 名。

## (4) 信越支部

- 一般事業：支部大会 1 回、講演会 2 回（新潟地区 0 回、長岡地区 0 回、長野地区 2 回）。
- 学生会事業：研究交流会 3 回開催（新潟大・信州大学・公立諏訪東京理科大学）。
- 選奨：学生奨励賞 10 名、高専学生奨励賞 4 名、優秀論文発表賞 6 名、ベストプラクティス賞 3 研究室。

## (5) 東海支部

- 一般事業：講演会 2 回、見学会 1 回、専門講習会 1 回、女子学生向けイベント 1 回（オンライン）、支部連合大会 1 回。
- 学生会事業：講演会 3 回、学生研究発表会 2 回、卒業研究発表会。
- 選奨：学生研究奨励賞 23 名、卒業研究発表会表彰 7 名、学業成績優秀賞 31 名。

## (6) 北陸支部

- 一般事業：講演会 2 回。シンポジウム、講演会等の共催、協賛、後援を 3 件。支部連合大会 1 回。
- 学生会事業：未実施。

○選奨：優秀論文発表賞 20 名、優秀学生賞 11 名。

#### (7) 関西支部

○一般事業：講演会 1 回、講習会 4 回開催。

○教育事業：講演会 1 回。

○学生会事業：講演会 1 回、研究発表会 1 回開催。

○選奨：学生会支部長賞 奨励賞 8 名、優秀論文発表賞 4 名、学生会功労賞 12 名。

#### (8) 中国支部

○一般事業：講演会 17 回（主催・共同主催 4 回、共催等 13 回）、見学会 2 回（電気学会および中国・四国工学教育協会との共催）、専門講習会 1 回、シンポジウム等の後援 2 回、電気記念日行事共催、支部連合大会 1 回。

○教育事業：学生を対象にしたアイデア・作品のコンテストを主催

○学生会事業：学生向け講演会。学生自主活動としてフレッシュ IT あワード実行委員、支部ホームページの維持、管理、改訂。

○選奨：連合大会奨励賞 19 名、優秀卒業生表彰（高校・高専・短大）57 校 89 名、学生功労賞 9 名

#### (9) 四国支部

○一般事業：講演会 2 回、専門講習会 2 回、支部協賛・後援事業 2 回、支部連合大会 1 回。

○学生会事業：学生向け講演会 1 回開催。2 校の学生ランチが講演会、見学会、交流会等の活動を実施。

○選奨：電気学会・電子情報通信学会・情報処理学会四国支部奨励賞 53 名

#### (10) 九州支部

○一般事業：特別講演会 1 回（オンライン）、一般講演会 2 回開催。協賛・後援の講演会/シンポジウム 11 件。専門講習会 1 回開催（ハイブリッド）、アンテナ伝搬基礎講座 1 回開催（ハイブリッド）、支部連合大会 1 回、総合通信局連携企画 1 回。

○教育事業：子供の科学教室 2 回、ものづくり教室 1 回（有明高専と共催）。

○学生会事業：学生会講演会 1 回、学生ランチ交流会の実施。11 ブランチが講演会や交流会実施。

○選奨：連合大会講演奨励賞 5 名、学生会講演奨励賞 18 名、成績優秀賞 57 名、学術奨励賞 25 名

## 5. 選挙

2025 年 2 月 4 日～3 月 4 日に、Web 投票により 2025 年度役員候補者及び代議員の選挙を実施した。2025 年度代議員として 106 名が選ばれた。

以上

# 2024 年度事業報告（付属明細書）

## I. 共通事業

### 1. 会議に関する事項（定款 第 4、6、9 章）

#### 1. 1 2024 年定時社員総会

2024 年 6 月 6 日（木）午後 2 時から機械振興会館において 2024 年定時社員総会を開催した。代議員総数 108 名に対し、出席代議員数 95 名（委任状を含む）で、定款第 19 条に定める代議員総数の過半数に達した。森川会長を議長として以下議案を付議して、審議事項はいずれも原案どおり可決承認された。

- 第 1 号議案 2023 年度事業報告
- 第 2 号議案 2023 年度決算（審議事項）及び監査報告
- 第 3 号議案 公益目的支出計画実施報告及び監査報告
- 第 4 号議案 2024 年度事業計画
- 第 5 号議案 2024 年度収支予算
- 第 6 号議案 新理事・監事の選任（審議事項）

#### 1. 2 理事会

年度内に 9 回の理事会を開催した。

#### 1. 3 理事会傘下の委員会等の開催状況

- ・企画戦略室：7 回
- ・選奨委員会：1 回
- ・論文賞・学術奨励賞委員会：メール審議 4 回
- ・教育賞委員会：2 回
- ・シニア会員審査委員会：メール審議 1 回
- ・男女共同参画委員会：3 回
- ・アドホック会合：13 回
- ・大会委員会：4 回
- ・編集連絡会：4 回
- ・出版委員会：0 回、メール審議 1 回
- ・ハンドブック／知識ベース委員会：6 回
- ・財務委員会：4 回
- ・研究会連絡会：4 回
- ・教科「情報」の入試に関する検討 WG：0 回
- ・若手 WG からの提言に対する検討アドホック：0 回
- ・倫理委員会：メール審議 1 回
- ・功績賞・業績賞委員会：2 回
- ・末松安晴賞委員会：1 回
- ・フェローノミネーション委員会：1 回
- ・ア krediteーション委員会：メール審議 3 回
- ・サービス委員会：6 回 メール審議 9 回
- ・国際委員会：4 回、メール審議 11 回
- ・著作権管理委員会：3 回、メール審議 4 回
- ・会誌編集委員会：6 回
- ・教科書シリーズ特別委員会：0 回
- ・支部会議：2 回
- ・規格調査会委員会：4 回

#### 1. 4 その他の会議等

- ・名誉員・歴代会長を囲む懇談会：2024 年 10 月 16 日機械振興会館にて開催。

## 2. 出版に関する事項

### 2. 1 会誌の発行状況（定款 第4条 イ号）

全会員に共通の場として重要なメディアである会誌は、2024年4月から2025年3月まで12冊、合計196,100部（月平均16,340部）を発行配布し、読みやすく、親しみやすい会誌を目指して企画・編集を行い、特集・小特集の毎号化を実施した。

電子化の対応としては、前年度にリリースした会誌アプリ v5 に基づき、毎月順調に会誌記事を配信した。

2024年度の会誌記事の内容・件数及びページ数は次のとおりである。

種 類	件数	ページ数	種 類	件数	ページ数
4月小特集			総合報告	0	0
(AIチップに向けた不揮発性メモリ技術とその展望)	9	59	ジュニア会員のページ	8	43
5月特集			寄 書	0	0
(人とAIの協働)	14	82	回 想	0	0
6月小特集			学生/教養のページ	2	9
(博士の進路)	6	17	オピニオン	4	23
8月小特集			コラム	0	0
(Beyond 5G時代を支える光ネットワークの技術動向と展望)	8	56	ニュース解説	23	41
9月小特集			ニュースフラッシュ	0	0
(量子コンピュータにおける回路とシステム)	6	30	知識の森	24	66
10月小特集			ソサイエティのページ	3	8
(3Dキャプチャ技術の進化と展望)	5	24	会長のページ	1	1
11月特集			EiC 記事	7	22
(モビリティの最新技術と今後の展望)	12	76	情報社・今学会では	0	0
12月小特集			学生会だより	10	35
(実用化が迫る空間伝送方式ワイヤレス電力伝送システムの進展と展望)	8	50	予定目次	12	0
1月特別小特集			学会ニュース	0	0
(アートと人と情報通信技術——創造から垣間見る未来——)	7	37	慶 賀	0	0
2月電子情報通信学会・日本機械学会連携小特集			追 悼 抄	5	5
(機械と情報通信の双方から考えるサイバーフィジカル融合社会)	10	33	国際会議	17	7
2月小特集			図書紹介	8	4
(ICTによる農業のスマート化)	7	38	国内文献目次		3
3月小特集			図書寄贈一覧		
(ネットワークの数理モデル)	7	42	本会だより		17
講 演	1	7	編集室	12	12
編集長退任にあたって	0	0	役員等口絵		8
会長対談	2	12	総会・選奨		121
解 説	24	158	フェロー口絵		2
講 座	0	0	会誌総目次		11
			会 報		0
			会 告	12	88
			そ の 他	0	0
			計		1,247
			巻頭言		12
			目次		36
			合 計		1,295

\*その他：広告（カラー、前付等）51.5 ページ

## 2. 2 ハンドブック（定款 第4条 ト号）

知識ベースアクセス件数（累計）は、756万件で広く利用され続けている。2023年度以降は維持員向けサービスとして希望に応じてサイトにバナー広告を掲載している。

また、知識ベースの新たな試みとして、2023年4月号から会誌に「知識の森」欄を新設、記事の掲載を開始している。2024年度も引き続き、毎号2件、年間24件の記事を掲載した。併せて各ソサイエティ・グループを通じて各研究専門委員会からの提案を基に1年間分の内容を検討した。

## 2. 3 単行本（定款 第4条 ト号）

監査法人からの指導に従い適切な在庫整理を行った。

## 2. 4 教科書「電子情報通信学会大学シリーズ」（全59巻）（定款 第4条 ト号）

重版2点を発行した。（コロナ社委託出版）（昭和55年8月第1回配本以降既刊書目52点）

## 2. 5 教科書「電子情報通信レクチャーシリーズ」（全64巻）（定款 第4条 ト号）

大学院及び学部の学生を対象とし、併せて一般勉学者の参考に供するための教科書シリーズとして重版1点を発行した。（コロナ社委託出版）（2002年3月第1回配本以降通算40点）

## 3. 総合大会に関する事項（定款 第4条 ロ号）

下記の期日・会場において、全ソサイエティ及びグループによる総合大会を開催した。なお、企画セッションのみ、Zoom配信を行った。

期 日 2025年3月24日(月)～28日(金)  
 会 場 東京都市大学 世田谷キャンパス(東京)  
 参加者 7,654  
 懇親会 9号館1階 Canteen RARA

### (a) 企画セッション数

企画種別	大会 委員会	ソサイエティ					合 計	実数
		基礎・境界	NOLTA	通信	エレクトロクス	情報・システム		
大会委員会企画	8	—	—	—	—	—	8	8
ソサイエティ特別企画	—	1	0	2	2	0	5	5
パネルセッション	—	0	0	1	0	0	1	1
チュートリアルセッション	—	1	0	1	0	0	2	2
シンポジウムセッション	—	6* <sup>1</sup>	1	14* <sup>2</sup>	7* <sup>1</sup> * <sup>2</sup>	1	29	27
合 計	8	8* <sup>1</sup>	1	18* <sup>2</sup>	9* <sup>1</sup> * <sup>2</sup>	1	45	43

(2025年)

\*1 基礎・境界ソサイエティ、エレクトロニクスソサイエティの共催企画1件含む

\*2 通信ソサイエティ、エレクトロニクスソサイエティの共催企画2件含む

(b) 公募セッション講演数

	ソサイエティ					合計
	基礎・境界	NOLTA	通信	エレクトロニクス	情報・システム	
一般セッション	164	33	784	273	252	1506
シンポジウム セッション	0	0	10	12	7	29
ポスターセッション	0	0	15	0	0	15
ジュニア&学生 ポスターセッ ション	45	5	24	14	146	234
合計 [共催含む]	209	38	833	299	405	1784

4. 選奨に関する事項（定款 第4条 ホ号、へ号）

今年度の各選奨は所定の手続きによって選考が進められ、次のとおり受賞者を決定した。

4. 1 功績賞（第86回）

榎本 忠儀（中大）

高村 誠之（法政大）

橋本 修（青学大）

松尾 慎治（NTT）

以上4名

4. 2 業績賞（第62回）

【選奨規程第9条イ号】

（業績の50音順・敬称略）

業 績	貢 献 者 (所 属)
3次元集積フォトニクスと空間多チャンネル光ファイバに関する先駆的・独創的研究	國分 泰雄（ものづくり大）
ソフトウェア無線送受信機用 Si-RFIC の先駆的研究開発	末松 憲治（東北大）
フェイクメディアの拡散を防ぐ先駆的研究と社会実装	越前 功（NII） 山岸 順一（NII） 馬場口 登（福井工大）

【選奨規程第9条ロ号】

（業績の50音順・敬称略）

業 績	貢 献 者 (所 属)
H.266 Versatile Video Coding (VVC)の国際標準化と実用化研究の推進	河村 圭（KDDI 総合研究所） 海野 恭平（KDDI 総合研究所） 木谷 佳隆（KDDI 総合研究所）
快適なハンズフリー通話を可能とするパワー感応型非線形エコー抑圧技術の開発と商品化	宝珠山 治（京セラ） 杉山 昭彦（ダマス・カス） 宮原 良次（NEC プラットフォームズ）

小型省電力 OOLS (Optical Open Line System) 実用化	須田 祥生 (NTT) 菊池 清史 (NTTイノベーションデバイス) 岡本 聖司 (NTT)
---	--

【選奨規程第9条ハ号】

(業績の50音順・敬称略)

業 績	貢 献 者 (所 属)
非線形理論とその応用分野における教育・研究への貢献	引原 隆士 (京 大) 堀尾 喜彦 (東北大)

#### 4. 3 論文賞 (第81回)

(分冊別掲載年月順・敬称略)

A	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	Reducing T-Count in Quantum Circuits Using Alternate Forms of the Relative Phase Toffoli Gate David CLARINO, Shohei KURODA, 山下 茂 (立命館大) 2025年1月号 (EA)
A	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	Introduction to Quantum Deletion Error-Correcting Codes 萩原 学 (千葉大) 2025年3月号 (EA)
A	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	Double-Stack Erasure-Filled Channel and Level-By-Level Error Correction 内川 浩典 (キオクシア), 萩原 学 (千葉大) 2025年3月号 (EA)
B	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	LLC 共振制御を用いた電気推進電源によるホールスラスト作動実験 近藤 大将, 張 科寅, 渡邊 裕樹, 艸分 宏昌 (JAXA) 2024年3月号 (B)
B	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	水中音響通信の厳しい二重選択性伝搬環境に有効な差動 OFDM 藤田 太一, 橋本 宏一, 吉村 拓真, 久保 博嗣 (立命館大) 2024年3月号 (B)
B	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	Traffic Reduction for Speculative Video Transmission in Cloud Gaming Systems Takumasa ISHIOKA (阪大), Tatsuya FUKUI, Toshihito FUJIWARA, Satoshi NARIKAWA (NTT), 藤橋 卓也, 猿渡 俊介, 渡辺 尚 (阪大) 2024年5月号 (EB)
C	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	160 Gbaud 超級デジタルコヒーレント通信用超高速ドライバ集積 InP 変調器 尾崎 常祐, 小木曾義弘, 山崎 裕史, 橋詰 泰彰 (NTT), 長島 和哉 (古河電工), 石川 光映, 布谷 伸浩 (NTT) 2024年6月号 (C)
C	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	水蒸気を用いた ALD-Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> の欠陥低減と絶縁ゲート構造への応用 尾崎 史朗, 熊崎 祐介, 岡本 直哉, 中舎 安宏, 多木 俊裕, 原 直紀 (富士通) 2024年9月号 (C)
C	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	Millimeter-Wave Transceiver Utilizing On-Chip Butler Matrix for Simultaneous 5G Relay Communication and Wireless Power Transfer Keito YUASA, Michihiro IDE, Sena KATO, 岡田 健一, 白根 篤史 (東京科学大) 2024年10月号 (EC)
D	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	項目反応理論に基づく難易度調整可能な読解問題自動生成手法 富川 雄斗, 鈴木 彩香, 宇都 雅輝 (電通大) 2024年2月号 (D)
D	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	VAE を用いた視覚-運動変換モデルによる多指ロボットハンドでのコップの把持運動制御 松田 基, 片山 哲, 福村 直博 (豊橋技科大) 2024年2月号 (D)
D	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	Agreement Loss: 削減率に対して頑健な Data Pruning Metric 東 遼太, 和田 俊和 (和歌山大) 2024年4月号 (D)

((A)、(B)、(C)、(D) : 和文論文誌、(EA)、(EB)、(EC)、(ED) : 英文論文誌、所属は:掲載時)

以上 12 編

#### 4. 4 最優秀論文賞 (第7回)

(敬称略)

論文名	Introduction to Quantum Deletion Error-Correcting Codes
著者名	萩原 学 (千葉大)
掲載年月	2025年3月号 (EA)

以上1編

## 4. 5 末松安晴賞 (第11回)

(敬称略)

カテゴリ	受賞者 (所属)	研究・開発の題目
学術界貢献	劉 志 (電通大)	没入型映像のための処理・通信技術に関する学際的研究
産業界貢献	海野 恭平 (KDDI 総合研究所)	H.266/VVC と PCC に関わる研究・標準化・実用化

以上2名

## 4. 6 学術奨励賞 (第87回)

基礎・境界/NOLTA ソサイエティ: 8名

(50音順)

受賞者	所属 (発表時)	講演題目	大会別	講演番号
伊与田 友貴	名大	イメージセンサ可視光通信における CNN 型復調方式の実画像パラメータを考慮した性能向上	総大	A-9-07
加藤 海渡	中京大	離散力学系より得られる時系列データおよびパラメータを学習した Extreme learning machine に基づく分岐解析手法	総大	N-1-09
五井野 珠琉	東京電機大	2 マイクロホン任意指向性形成回路の設計方針	ソ大	A-1-03
杉山 悠一朗	名城大学	Wi-Fi RTT を用いたドローン屋内測位における疑似データを用いた機械学習モデルの検討	ソ大	A-16-03
砂井 啓希	北大	分散強化学習における事象駆動型通信の導入	総大	A-16-03
代 美月	東京都市大	PCA および MFTMA を用いた CNN におけるクラス分布次元の解析	ソ大	N-1-28
三木 悠矢	名城大	物体検出 DNN を用いたイメージセンサ可視光通信方式の実画像パラメータを考慮した性能評価	ソ大	A-9-11
吉田 しおん	東京理科大	リザー層の力学系に対する再帰定量化解析	ソ大	N-1-29

通信ソサイエティ: 25名

(50音順)

受賞者	所属 (発表時)	講演題目	大会別	講演番号
相浦 一樹	NTT	LLM を用いた ICT リソース制御アプリ自動生成の基礎評価	総大	B-14-07
青山 幸瑠	日本工大	異メディアを含む複数同時接続時におけるドローン飛行ハンドオーバー方式の提案	ソ大	B-11-11
池本 有輝	三菱電機	400MHz 帯・4G/5G アンテナ間の相互結合低減構造の試作評価	ソ大	B-1B-43

石川 力	ソフトバンク	HAPSと地上基地局の周波数共用に向けた干渉キャンセラと eICIC の統合システム	総大	B-5A-46
伊藤 雅秋	KDDI 総合研究所	V2X でマルチパネルを用いる gNB・UE の下りリンク性能評価	ソ大	B-5A-44
今田 丈雅	KDDI 総合研究所	ネットワーク障害時のトラヒックフローに対する影響のグラフニューラルネットワークを用いた事前予測	ソ大	B-16-05
小川 まな美	NTT	死活監視ネットワークにおける故障個所推定技術	総大	B-14-24
奥村 亮太	NTT	広帯域水中音響通信 NW におけるアクセス制御方式に関する一検討	ソ大	B-5B-17
加藤 堯彦	KDDI 総合研究所	IoT 端末の移動を考慮した 5G のシグナリング負荷解析	総大	B-7-11
		5GC における無線センシングのための端末位置管理手法	ソ大	B-7-06
北川 雄一	日立	炭素排出状況に基づいた連合学習クライアントデータ配置の提案	ソ大	B-15-24
相馬 敏樹	三菱電機	散乱相殺によりアンテナの RCS を低減するメタサーフェスの試作評価	ソ大	B-1B-57
玉木 雄三	三菱電機	非接触電圧観測における誘電緩和と補償回路の検討	総大	B-4-01
津上 諒平	NTT	多端末環境下での RDMA 通信制御方式の仮想化による評価	総大	B-6-62
		実センシングデータを用いた RDMA 通信制御技術の実機評価	ソ大	B-6-30
土田 輝	三菱電機	異種無線ネットワークにおける通信コストを考慮した負荷分散方式に関する一検討	ソ大	B-17-15
中村 遼	福岡大	基地局配置問題に対する投票機構を用いた解法の一提案	総大	B-11-05
西口 雅人	NTT	Segment Routing 網を対象とした VPN 通信の品質測定における測定経路可視化方式の検討	総大	B-6-17
		Segment Routing 網を対象としたリンク品質測定における効率的な測定経路導出方式の検討	ソ大	B-6-07
二村 真司	KDDI 総合研究所	WDM RoF ベースのモバイルフロントホールに基づく 4x4 分散 MIMO リアルタイム通信実証実験	総大	B-5B-24
		FDM/WDM RoF ベースのモバイルフロントホールを用いた 4x4 分散 MIMO 双方向リアルタイム通信実証実験	ソ大	B-5B-09

橋田 紘明	東北大	近傍/遠方界における Intelligent Reflecting Surface の反射特性	総大	B-5A-31
福田 展和	NTT	インテント競合解決におけるユーザー特性を考慮したリソース割り当て	総大	B-14-08
松野 佑亮	古河電工	標準被覆外径非結合型 19 コアマルチコアファイバ	総大	B-10A_B-13-19
巳波 春香	NTT	オールフォトニクス・ネットワークにおける全光波長帯変換を活用した信号監視手法の光信号対雑音比の監視精度の評価	総大	B-12-03
森本 涼太	NTT	API間の接続実績を用いたオーケストレーション APL 自動生成方式の提案	ソ大	B-14-14
山口 修平	三菱電機	異種信号収容フレームフォーマットにおける制御フレームの誤り訂正方式の検討	総大	B-10B-28
		Delta-minimum 近似を用いた Polar 符号の復号性能評価	ソ大	B-10B-10
山田 大樹	日立	電磁界解析と回帰モデルを用いたスループット推定手法の検討	ソ大	B-15-08
吉田 昂平	NEC	端末位置に応じた動的マルチビーム制御・周波数割当による非地上系ネットワークの大容量化	総大	B-17-06

エレクトロニクスソサイエティ：8名

(50音順)

受賞者	所属 (発表時)	講演題目	大会別	講演 番号
伊藤 穂乃花	NTT	光マトリクス無線ビームフォーミング技術の多ビーム特性評価	総大	C-14-16
羅 文輝 (Wenhui Luo)	横浜国大	確率的演算に基づく断熱超伝導ニューロン回路の開発	総大	C-8-08
岡田 竜馬	奈良先端大	微弱偏光イメージングシステムを用いたミリ波電界の高速撮像	総大	C-14-13
		観察対象波源の周波数に追従する高周波電界撮像システムの検討	ソ大	C-14-10
柴田 蓮	東芝	5G ミリ波通信システム用低損失 SIW-マイクロストリップ線路変換回路	総大	C-2B-19
淵辺 悠太	三菱電機	電荷再利用型トランジスタ制御機構を用いた GaN HEMT によるリーマンポンプ型 RF-DAC	総大	C-2A-19

古内 航紀	東北大	20GHz 帯ダイレクトデジタル RF 送信機の分散アンテナ適用に向けた光伝送距離に対する信号特性評価	ソ大	C-2C-05
盛山 隆聖	名工大	脳腫瘍患者 TMS 刺激による脳機能診断における頭部モデル構築手法の影響	ソ大	C-15-12
山下 晋平	三菱電機	テラヘルツ帯を用いた Beyond 5G 向けアンチパラレルダイオード型 100GHz 帯 GaN 3 連倍器	総大	C-2A-04
		$\Delta\Sigma$ 変調回路と N-path フィルタによるダイレクトデジタル RF 信号生成器	ソ大	C-2C-07

情報・システムソサイエティ：5名

(50音順)

受賞者	所属 (発表時)	講演題目	大会別	講演 番号
飯野 景	早大	画像認識向け深層画像圧縮における補助損失の導入	総大	D-12A-37
長田 凌	東工大	機械学習を用いたレンズレスカメラにおける三元シーンの再構成	総大	D-12B-09
菅家 遼平	芝浦工大	シードを用いる線状物体抽出法の改善	総大	D-12A-03
小磯 諒太	KDDI 総合 研究所	点光源統合に基づく CGH 計算のメモリ削減に関する一検討	総大	D-1-09
百南 匠人	東京農工大	渋滞解消問題を用いたイジングマシンの評価	総大	D-1-02

#### 4. 7 教育優秀賞 (第9回)

(50音順・敬称略)

氏名(所属)	教育関連成果のタイトル
新井 宏之 (横浜国立大)	電磁波工学およびアンテナ工学の啓発に対する貢献
木村 尚仁 (北海道科学大)	誰も取り残さない ICT・デジタル分野における社会教育活動の推進
三好 匠 (芝浦工大)	授業履修型留学を必修とする国際プログラムの設計と運用

計 3名

#### 4. 8 教育功労賞 (第9回)

(50音順・敬称略)

氏名(所属)	教育関連成果のタイトル
池内 裕章 (東芝)	コロナ禍における学生設計コンテスト実施に向けた貢献
石川 洋 (同朋大)	技術者教育認定活動における審査への貢献
岡本 英二 (名工大)	論文の書き方講座による若手の論文作成能力向上に対する貢献
重田 和弘 (香川高専)	四国支部専門講習会「Android 入門講座」の開催への貢献
西崎 博光 (山梨大)	若手研究者向け深層学習チュートリアルへの貢献
丸田 章博 (阪大)	光通信システム研究会サマースクールの講師および運営への貢献
雪田 和人 (愛知工大)	技術者教育認定活動における審査への貢献

計 7名

## 5. 会員に関する事項（定款 第3章）

### 5. 1 名誉員の推薦

定款の定めにより以下の4名を名誉員に推薦した。

大平 孝（豊橋技科大）

菊間 信良（名工大）

小山二三夫（東京科学大）

佐藤 亨（元京大）

### 5. 2 フェロー称号の贈呈

〔基礎・境界ソサイエティ：4名〕

贈呈者氏名	貢献内容
池田 誠	高性能暗号半導体集積システム実装に関する先駆的研究
長谷川幹雄	カオス・量子・光による先端的計算法の実応用に向けた先駆的研究
宝珠山 治	実環境用信号強調技術の研究開発
堀内 俊治	モバイル機器における音空間表現技術の研究開発

〔通信ソサイエティ：8名〕

贈呈者氏名	貢献内容
秋山 豊和	学会の電子化推進とインターネットアーキテクチャ分野の活性化
加保 貴奈	衛星及び地上無線装置の小型化と通信システムの高機能化の研究
川原 亮一	大規模ネットワークにおけるトラヒック制御・管理技術の研究
坂野 寿和	可搬型ローカル ICT システムの研究開発及び国際展開
末次 正	E 級スイッチング電力増幅器の解析と設計に関する研究
田島 公博	通信 EMC における非侵襲性計測及び対策技術の開発と国際標準化
田野 哲	無線通信における過負荷 MIMO 空間多重通信の研究
樋口 健一	移動通信システムの無線伝送技術に関する研究開発

〔エレクトロニクスソサイエティ：4名〕

贈呈者氏名	貢献内容
石崎 俊雄	携帯電話用マイクロ波デバイスと無線電力伝送に関する先駆的研究
尾辻 泰一	二次元プラズモンを用いたテラヘルツ機能素子に関する先駆的研究
辻 寧英	導波路型光デバイスのトポロジー最適設計法に関する先駆的研究
津田 裕之	導波路型光機能デバイスに関する先駆的研究

〔情報・システムソサイエティ：7名〕

贈呈者氏名	貢献内容
大西 淳	要求工学における先駆的研究と普及活動
小野 智弘	時空間データ解析技術の研究開発と商用基盤構築
栗林 稔	マルチメディアコンテンツに関するセキュリティ技術の研究
五味 秀仁	パスワードレス個人認証方式の国際標準化と商用システム開発
灘本 明代	データ工学・データベースコミュニティの発展及び活性化
藤戸 敏弘	計算困難な組合せ最適化問題に対する近似アルゴリズムの研究
増澤 利光	適応的分散システムのためのアルゴリズム設計技法に関する研究

### 5. 3 シニア会員称号の贈呈

[基礎・境界／NOLTA ソサイエティ：7名]

高橋 康宏 仲野 有登 栗原 淳 松田 哲直 青柳 学  
宮地 充子 庄野 和宏

[通信ソサイエティ：16名]

大関 武雄 リム 勇仁 吉田 智暁 義久 智樹 村上 友規  
長坂 正史 加藤 能史 張 成 木村 共孝 相馬 大樹  
宮坂 拓也 大槻 信也 今宿 亙 岡本 淳 藤井 勝巳  
中村 一城

[エレクトロニクスソサイエティ：9名]

寶迫 巖 鈴木 敬久 吉田 賢史 山口裕太郎 小松崎優治  
加屋野博幸 大寺 康夫 水柿 義直 岡部 寛

[情報・システムソサイエティ：7名]

山内 利宏 梶山 朋子 多屋 優人 中野有紀子 Wen-Huang Cheng  
林 章浩 飯尾 淳

### 5. 4 会員の現況

(1) 会員数は次のとおりである。

[ ]内はフェロー会員数

会員種別	名誉員	正員	学生員	ジュニア会員	購読会員	維持員	合計
2023年度末 会員数	100[80]	19,091[871]	3,366	487	285	157	23,486[951]
2024年度末 会員数	106[87]	18,459[865]	3,532	641	278	163	23,179[952]
前年度末との差	+6[+7]	-632[-6]	+166	+154	-7	+6	-307 [+1]

(注1) 名誉員の宮原秀夫氏は2024年7月12日、安田 浩氏は2024年7月25日、畚野信義氏は2024年12月25日に逝去した。

(注2) 年度末退会日を3月31日から4月1日に変更により、年度末退会は翌年度の退会数にカウントする。

(2) 各支部における年度末会員数は次のとおりである。

[ ]内はフェロー会員数

会員種別 支部	名誉員	正員	学生員	ジュニア 会員	購読 会員	維持員	合計
北海道	3【3】	352【13】	135	25	5	3	523【16】
東 北	10【6】	613【48】	117	61	11	1	813【54】

東 京	69 【56】	10,774 【559】	1499	381	135	120	12978 【615】
信 越	1 【1】	343 【9】	133	7	8	4	496 【10】
北 陸	0 【0】	341 【6】	109	12	7	0	469 【6】
東 海	5 【5】	1,193 【49】	313	18	29	14	1,572 【54】
関 西	14 【13】	2,289 【116】	503	67	31	16	2,920 【129】
中 国	【0】	635 【21】	192	26	10	1	864 【21】
四 国	【0】	292 【8】	92	9	3	2	398 【8】
九 州	2 【2】	918 【29】	318	35	12	2	1,287 【31】
海外在中	2 【1】	709 【7】	121	0	27	0	859 【8】
合 計	106 【87】	18,459 【865】	3,532	641	278	163	23,179 【952】

## 5. 5 学生事業に関する事項（定款 第4条 へ号）

### (1) 会誌「学生会だより」欄の掲載記事

各支部学生会・学生ランチの活動状況等を会誌「学生会だより」欄に掲載した。

### (2) 学生ランチについて

ホームページに学生ランチ設置校の活動紹介記事及び設置申込みから報告書作成までの資料、流れを掲載し、学生ランチ設置校の拡大を図った。

支部活動として実施するため、設置校の申請、報告を各所属支部を通じて受け付けた。

## 6. 教育活動に関する事項（定款 第4条 ロ号、ハ号、へ号）

教育関連サービス（生涯教育の意味の検討、活性化、内容のアップデート、CPDの啓発・利活用、電子情報通信分野へ子供への興味を持たせる教育の検討などを含む）に関しては、サービス委員会の所掌として以下のような活動を行った。

### 6. 1 学会主催の技術講座に関する事項

我が国の産業界における電気・電子系技術力の維持・向上を目的として、2020年度に「電気・電子系高度技術者育成プログラム」を開設した。このプログラムは、今後中核となる若手技術者に電気電子通信領域で必要となる高度な技術・知識を身につけて頂くことを目的としており、産業界・学界から最先端の研究・開発を進めておられる方々を講師としたスクーリング形式の教育プログラムである。なお、2024年度はデータサイエンスの講義を追加し、40名が受講した。

### 6. 2 技術者教育認定活動（日本技術者教育認定機構：JABEEの一員としての活動）

JABEEの学部認定審査については、2024年度も定常的な活動を行った。JABEE本体へ委員を派遣してJABEEの運営に協力するとともに、学部プログラムの審査を電気学会、情報処理学会と連携して実施した。

### 6. 3 技術者の継続的な教育・能力開発

CPD情報の管理については、電気学会・情報処理学会と連携した試行システムから、よりコスト効率のよいASP型システムへの切り替えを2015年10月に行って以来、2024年度も運用した。また、本会、電気学会、情報処理学会からなる電気電子・情報系CPD協議会については、情報交換やCPD制度の有用性訴求に関する連携を中心とした活動を行うこととし

E  
我が国においてCPDプログラムを中心的に行っている日本工学会のCPD協議会・CPDプログラム委員会に、委員を派遣して継続的に参画した。

### 6. 4 IEICE 先端セミナー

教育講座「IEICE 先端セミナー」を2023年度に新規に開講し、初年度は、「AI社会実装の最先端と技術動向」及び「量子コンピュータと量子情報通信入門」を実施した。2024年度は、「6Gに向けた3GPPの無線アクセスの標準化動向」及び「次世代半導体の技術動向」の2つのコースを新設し、延べ100名近い受講があった。

### 6. 5 小中高校生を対象とした科学教室

小中高校生を対象とした科学教室は、2024年度は支部において実施した。

## 7. 国際活動に関する事項（定款 第4条 へ号）

### 7. 1 国際セクションの活動

#### (1) 各セクションにおける講演会等の実施件数

セクション	件数	セクション	件数
バンコク	0	上海	0
北京	0	シンガポール	0
韓国（Communication）	0	台北	0
韓国（Electronics）	0	ヨーロッパ	1
韓国（Information）	0	インドネシア	1
ベトナム	0	マレーシア	0
インド	0		

合計2件

#### (2) 国際セクションが主催・共同主催した国際会議 なし

### 7. 2 国際委員会活動

国際委員会では、Distinguished Lecturer（DL）による英語 Webinar を継続的に開催し、リアルタイムのストリーミング配信とともに、コンテンツのアーカイブ化により、見逃し配信を可能とし、国内外のより多くの視聴者に届ける取り組みを進めている。

### 7. 3 All Sections Meeting

国際セクション代表者との意見交換の場である All Sections Meeting には、対面参加の6セ

クシオン代表に加え、国際委員会の委員などを招聘、今年度は3月25日（火）にハイブリッド形式で開催した。

## 7. 4 Global Net WorkShop

日本国内で学ぶ留学生や若手研究者の学術コミュニティ形成を支援することを目的として、英語ポスターセッション「GlobalNet Workshop」を開催する。本ワークショップは、9月のソサイエティ大会に続く形で、第5回目となる今回は、3月24日（月）に総合大会のプレイベントとして都市大で実施、今回は15か国から90件の講演申込を受領した。

## 8. 学会からの情報発信に関する事項（定款 第4条 口号、へ号）

### 8. 1 総合大会の場の活用

2025年3月の総合大会では、プレナリーセッション、Welcome Party、懇親会、「新しい日本の理工系人材のキャリアパス」をはじめとした43の企画セッション、ランチョンセミナー、スポンサーセッション、インダストリアルセッション、オプションツアー、IEICE Expo 東京 2025（企業展示）を実施した。

### 8. 2 IEICT ICT Pioneers シリーズ（Webinar）

ライブ Webinar への最初の取り組みとして、IEICE ICT Pioneers Series を2020年6月より開始した。毎回多数の聴講申込みがあり、諸事情によりライブ配信を聴講できなかった方からオンデマンド配信の希望も多いため、Webinar コンテンツをアーカイブし、本会ホームページから Web ブラウザで視聴可能としている。

## 9. 規格調査会に関する事項（定款 第4条 二号）

規格調査会会議を4回、専門委員会及び小委員会を39回開催した。国際標準化に関して取り扱ったIEC文書は65件であった。

委員会名		委員長名	委員数		開催数
規格調査会委員会		浅谷 耕一	20		4
専門委員会名		専門委員長名	専門(委)	小(委)	開催数
1	通信用伝送線及びマイクロ波受動部品	岸川 諒子	11	38	8
2	周波数制御・選択・検出デバイス	作田 幸憲	21	82	4
3	光ファイバ	大橋 正治	42	63	14
4	電子実装技術	高橋 満	18	0	4
5	無線通信用送信装置および受信装置	川西 哲	21	22	5
6	電子通信用語	—	0	0	0
7	電子通信記号	—	0	0	0
8	複雑システムの安全検討委員会	—	0	0	0
9	標準化教育検討委員会	中西 浩	15	10	4
合計			148	165	43

## 10. その他の事項

### 10.1 外部機関との連携に関する事項（定款 第4条 ロ号、へ号）

#### (1) 関連他学会との連携

電気・情報系関連5学会とは2004年に「電気・情報関連学会連絡協議会」を発足させ、協力してきている。2024年度も、2回の定例会議を開催し、各学会の会員数動向、財務問題、情報システムの課題を含め諸活動状況の報告に加え、会員増強の取り組み、公益目的支出計画の課題、大会活性化への取り組み等に関して情報交換・情報共有を行った。

電気学会については、企画戦略室を中心に意見交換を継続した。2025年2月に両会長をはじめとする電気学会8名、本会8名による役員懇談会を実施した。日本機械学会とは、日本機械学会2024年度年次大会先端技術フォーラムにて、連携企画セッションを実施した。

#### (2) 関連学術団体との連携

2024年度は、関連学術団体等に対する協力・連携活動として、226件の協賛・後援等を行った。

#### (3) 府省との連携

ソサイエティ大会企画セッションにおいて、「科学技術・イノベーション政策の動向」というテーマで、内閣府、デジタル庁、総務省、文科省、経産省から講演を頂いた。2025年2月には、総務省国際戦略局幹部と会長を初めとする本会役員ら24名で第16回意見交換会を開催し、国の技術政策と学会の役割等について情報交換を行った。

#### (4) モバイルコンピューティング推進コンソーシアム(MCPC)との相互協力

MCPCとの相互協力関係として、相互の会員に活動を周知するため、HP上のバナー交換を行った。

## Ⅱ. ソサイエティ及びグループ事業

### 1. ソサイエティ及びグループ事業概要

2024年度も、各ソサイエティ及びグループごとに特色のある企画等を実施し、会員の研究成果の発表と議論の場を提供する事業を中心に活動した。

#### 1. 1 基礎・境界ソサイエティ

基礎・境界ソサイエティは、本会の全研究分野に対する基礎領域及び境界領域における研究活動を担うとともに、新領域の創造を推進するという重要な役割を果たしている。しかしながら、昨今の学会全体での会員の減少や、それに伴う若手会員への学会運営に関する負担増加の問題を考えると、研究面のみならず、ソサイエティ運営の在り方に関しても継続的な検証と改善が不可欠となっている。2024年度は、新規会員獲得に向けた若手・ジュニア世代へのアウトリーチ活動、ならびにソサイエティ誌多言語化の取り組みなどを含めた国際活動への貢献を強化するとともに、研究会活動の活性化に向けた研究専門委員会のグループ化に関する取り組み、さらに持続可能な運営体制に向けた改革に取り組んだ。

##### (1) 研究会活動の活性化

###### (1-1) サブソサイエティの新設

基礎・境界ソサイエティにはこれまで3つのサブソサイエティがあり7研究専門委員会がその3つのサブソサイエティに属していた。一方、サブソサイエティに属していない研究専門委員会が12あり、必ずしも基礎・境界ソサイエティ内においてサブソサイエティ制が浸透しているとは言えない状況にあった。サブソサイエティ制度は新しいソサイエティの設立をサポートするために設けられた制度であったが、2015年度にNOLTAがサブソサイエティからソサイエティとなり独立して以降、サブソサイエティのソサイエティ化に向けた具体的な動きはなかった。他方、研究会活動の活性化のためには、研究専門委員会の枠を超えた分野横断型の活動を促進していくことが必要不可欠である。そのためにも、複数の研究専門委員会がグループとして連携して活動することを促進するための仕組みが必要である。

以上のような背景を踏まえ、2024年度は前年度に引き続き、サブソサイエティ制度の目的や在り方の改革、あるいは、同制度とは別に研究専門委員会の連携活動を推進するためのグループ化制度に関する議論を進めた。具体的には、サブソサイエティの新設・統廃合に関する申請手続き・審議の進め方の詳細を「サブソサイエティ新設・統廃合の手続きに関する覚書」として取りまとめた。

実際2024年度には、本ソサイエティ内の3つのサブソサイエティのうちの1つである「システムと信号処理サブソサイエティ」を廃止するとともに「信号処理とその応用サブソサイエティ」および「システムデザイン技術サブソサイエティ」の2つを新設する申請がなされ、新たに定められた規程に則して審議した結果、いずれも申請が承認された。この結果、次年度から本ソサイエティは、4つのサブソサイエティおよびサブソサイエティに属していない研究会によって構成・運営されることになった。

###### (1-2) 大会企画充実化に向けた取り組み

総合大会・ソサイエティ大会における発表・参加を増加させ、そしてそれを研究会活動の活性化につなげていくことを目指し、大会における企画セッションの充実化を図るための取り組みを実施した。そのために、まず過去の大会企画を整理してこれまでの企画提案実績を検証し、企画提案実績の「見える化」を進めた。この取り組みにより、ソサイエティ内の研究専門委員会に対して、実績の手薄な分野について積極的に企画提案を検討するよう促すとともに、実績のある分野については最近の動向を織り込みながら継続的な企画実施を強化するよう促した。さらに、上述の研究会のグループ化と関連して、複数の研究専門委員会による合同企画の実施を検討するよう、サブソ・研専会議等で呼びかけを行った。

##### (2) 若手世代・ジュニア世代からの魅力を高める活動

基礎・境界ソサイエティがカバーする研究領域に新規参入する若手研究者を増やすことは必要不可欠である。2024年度もこれまでに引き続き、研究会や総合大会・ソサイエティ大会において学生・若手研究者向けの企画を実施するようサブソ・研専会議で呼びかけるなど、若手世代を惹きつける企画実施に向け検討を行った。

また、学生員・ジュニア会員を増やすこと、そして、学生員・ジュニア会員から正員への昇格者を増やすことは学会全体としても重要な課題である。この点に関しては、ジュニア会員運営委員会・若手会

員活性化ワーキンググループと連携し、学会全体でのジュニア会員・若手会員向けの取り組みについて基礎・境界ソサイエティからの貢献の方向性を模索した。

### (3) 国際活動への貢献

#### (3-1) フラグシップ国際会議の主催を決定

本ソサイエティのフラグシップカンファレンスとなる国際会議を開催することを決定した。2026年度に国内開催することを目指し、開催に向けた取り組みを開始した。次年度以降、開催に向けた具体的な活動を推進していく。

#### (3-2) 国際活動へのその他の貢献

海外向けの情報発信を充実化させる取り組みとして、Distinguished Lecturer 拡充の取り組みを進めた。2023年度のDistinguished Lecturer リストには基礎・境界ソサイエティ分野の講師として6名が掲載されているものの、講師の専門分野に偏りがあり、基礎・境界ソサイエティの領域を広くカバーしているとは言い難い状況であった。2024年度は、基礎・境界ソサイエティの研究専門委員会の協力を得ながら積極的に講師募集を行い、Distinguished Lecturer リスト拡充に向けた取り組みを行った。

また、基礎・境界ソサイエティでは、国外会員へのサービスの一つとしてソサイエティのアクティビティを毎月メールによって情報発信を行っている。2024年度も昨年度まで同様にこの活動を継続したほか、これまでに実施してきた国際的なプレゼンス向上に向けた取り組みの継続についても検討を行った。

### (4) 持続可能な運営体制に向けた活動

#### (4-1) 事務手続きのDX化検討とウェブページ刷新

現在、会員減少による若手会員への負担増加の問題が顕在化しており、この問題への対応が喫緊の課題となっている。この問題への対応として、運営のDX化、グループによる事務対応の検討、各種会議の在り方や編集体制を検討した。ソサイエティや研究専門委員会運営のDX化については、各種申請手続きのシステム化や、広報活動におけるSNSツールの活用が考えられる。手続きのシステム化については、指定の様式にて書類を作成しメールで担当幹事へ提出するやり方からWebフォームへの入力に切り替えることで、メール送受信時のトラブルの回避や、申請データ管理の容易化が期待できる。

このような取り組みの実現に向け、2024年度は、ソサイエティ活性化事業としてソサイエティウェブページを刷新した。次年度の活性化事業で事務手続きのシステム化に取り組む予定である。

#### (4-2) 運営体制の検証と拡大運営委員会の実施

組織運営体制については、基礎・境界ソサイエティでは2019年度に改革を行い、ソサイエティ全体の議論を行う運営委員会と、サブソサイエティ・研究専門委員会に関する議論を行うサブソ・研専会議とを設置した。これは、議題の対象に応じたそれぞれの会議でより深い議論を行うための改革であった。しかしながら、両会議で一部議論の重複が生じるといった問題が顕在化している。他方、COVID-19の影響でオンライン会議が一般化するなど、社会的にも会議の在り方が変わってきている。例えば、以前は大人数が一堂に会して会議を実施することは会場手配等で困難が生じたが、オンライン会議であれば会場の問題は回避できる。これらの点を踏まえ、運営委員会とサブソ・研専会議とに分割したことによる問題点について検証し、拡大運営委員会あるいは運営委員会とサブソ・研専会議との合同会議を実施するなどといったソサイエティ内の意思決定フローについて再度確認するとともに、効果的な対面・オンライン会議のあり方についての検討が必要とされていた。

このような背景を踏まえ、2024年度は、2019年以来5年ぶりに拡大運営委員会を開催した。具体的には、2024年12月に2024年度第4回E S S運営委員会および第3回E S Sサブソ・研専会議との合同会議として、E S S拡大運営委員会を開催した。通常別々に行われる会議を合同で実施したことにより、同一の議題を一度に審議するなどといった運営の省力化が可能であった。次年度以降は、今年度の合同会議の効果を検証するとともに、より効果的な会議運営の実現に向けた検討を継続する予定である。

### (5) 編集関係の活動

本ソサイエティではこれまでに、和英論文誌の編集体制においては、論文誌編集委員長および編集幹事が和英論文誌の両方をハンドリングする体制に変更することにより、完全な一体編集体制へと移行した。編集体制の変更のほかにも、2022年10月号からの英文論文誌オープンアクセス化され、2024年

1月号からは和文論文誌の隔月化させるといった、論文誌発行に関する改革を継続的に実施してきた。とくに英文論文誌については、編集作業の効率化や上質の招待論文の掲載など、種々の施策を推し進めることで、コンテンツの質の向上とともに論文誌の知名度を上げ、インパクトファクターなどの指標の向上を図ってきた。

2024年度は、これらの取り組みに関してその影響を検証するとともに、新たな取り組みの検討を行った。具体的には、2014年10月よりNOLTAソサイエティとの共同機関誌として発行しているFundamental Reviewについて、そのHTML化に向けた検討を開始した。

## 1. 2 通信ソサイエティ

通信ソサイエティは、通信システム・通信ネットワークに関する基盤から応用技術、およびその近傍領域を研究活動領域としている。これらの領域における学術の発展、産業の興隆並びに人材の育成を促進し、豊かなコミュニケーション社会の形成と地球環境の維持向上に貢献するべく活動を行っている。2024年度はコロナ終息後の新たな展開を目指した年度となった。通信ソサイエティの活動もハイブリッド型の活動から対面型の活動が増え、特別研専や分野横断型研専の新設、産学活性化に向けた取り組みの立ち上げなど、コロナ禍以前のアクティビティから更なる発展に向け活動を進めている状況である。

研究会活動においては、コロナ終息後の新たな展開を目指した研究会運営を行った。サイバーライフラインに関する分野横断型研究会(HCL)の発足、地域ICTプラットフォームに関する特別研究専門委員会(AA-ITS)の発足、産学活性化課題検討WGの実施など、分野横断的な研究会活動、新たな研究領域の開拓、産学活性化に向けた取り組みを進めた。また、通信ソサイエティのフラグシップ国際会議であるICETC2024を2024年11月に北九州でオンサイト開催した。ICETC2024では、韓国通信学会(KICS)による特別セッションや、通ソ会長とKICS会長のボードミーティングを開催し、通ソとKICSの国際間連携を深めた。また、各研専における海外での研究会開催の取り組みが再開されるなど、コロナ前に行われていたような国際化に向けた動きも活性化し始めている。

出版活動においては、英文論文誌(EB)およびComEXのIEEE Xploreへの掲載が開始され、ComEXにインパクトファクタが付与された。これらにより、EB及びComEX両誌の国際的な知名度や発信力が高まり、投稿数の増加やインパクトファクタの向上が期待される。また、通信ソサイエティ論文誌の投稿数増加に向けた推薦論文制度の活用について、編集会議と研専運営会議が連携し、より多くの論文の推薦を目指した営みを積極的に推進している。

会員事業企画においては、ICETC2024の運営やシスターソサイエティ協定の締結、メーリングリストやwebページでの情報発信を行った。通信ソサイエティの海外情報発信および海外会員の維持・増強を強化する施策として、紙媒体による情報提供に加えて、海外会員がアクセスしやすい通信ソサイエティポータルサイトを構築・公開し、海外会員が本会情報(論文誌や国際会議等)へアクセスすることを容易とした。今後も、オンラインツールを活用した情報発信を国内外の会員に対して継続的に行うとともに、海外会員がアクセスしやすいポータルサイトの整備等、投稿機会の増加や通信ソサイエティの国際化に向けた活動も積極的に進めていく予定である。

以下、今年度の活動の詳細を記す。

### (1) 財務管理

通信ソサイエティの2024年度の収入は2億2,789万円、支出は2億3,496万円であり、707万円の赤字の見込みである。2023年度との比較では、収入、支出いずれも増加しているが、収支は、2023年度の420万円の黒字に対して1,127万円の減収となる。

以下、各事業の2024年度の収支見込みの概要を述べる。通ソの主な収入源としては、受取会費、出版活動、研究会や国際会議、等の事業が挙げられる。その内訳は受取会費が2,360万円、出版活動が4,450万円、研究会事業が9,900万円、国際会議事業が6,000万円である。受取会費に関しては、会員数の減少により年々予算案が削減されている。出版活動に関しては、和英論文誌の収入が最も多く3,000万円の収入に対して支出が1,400万円であり1,600万円の黒字であった。

研究会等の事業に関しては、全国大会(総合大会/ソサイエティ大会)の収入4,200万円に対して支出が2,900万円であり1,300万の黒字、研究会(技術研究報告/研専活動)の収入は5,700万円に対して支出が3,200万円であり2,500万円の黒字であった。

2025年度予算案は、収入が3億1,719万円、支出は2億9,783万円で1,936万円の黒字を見込んで

いる。2024年度との差異として国際会議の費用が更に多く計上されており、2024年度の実績見込み6,000万円に対して2025年度は1億3,200万円の収入が見込まれている。2023年度との比較では2024年度も大幅に増加しているが、2025年度はその流れが更に拡大される。その他の項目については2024年度実績見込みと比較して、受取会費は5.6%増、和英論文誌は10.6%増、ComEXは20%増に対して、総合大会は15%減、ソサイエティ大会は22%減を見込んでいる。

今後の課題として、予算の進捗率の計上方法の見直しと通ソ活性化資金の認知度向上を挙げる。今期は3Q末時点でも全体の予算進捗率が50%に満たない状況であったが、その理由は国際会議予算の全体に占める割合が極めて大きく、かつその執行時期が遅いためである。適切な予算管理のためには、一部の事業に影響されることなく、全体の進捗度の妥当性を表現する手段が望まれる。また今期は通ソ活性化資金の活用提案が少なく、本来研専活性化資金から賄われるべき予算の補填に使われるのみであった。通ソ全体の活性化に繋がる本来の目的に沿った活用提案を促す施策が望まれる。

## (2) 研究専門委員会

2024年度の研究専門委員会による研究会活動は、コロナ終息後の新たな展開を目指した研究会運営を行った年度となった。分野横断的な研究会の活動や産学活性化に向けた取り組みなど、新たな研究会運営もみられるようになった。また、海外での研究会開催の取り組みが再開されるなど、コロナ前に行われていたような国際化に向けた動きも活性化し始めている。さらに、AA-ITS特別研専が発足したように、新たな研究分野の開拓も進められている。一方で、研究会運営を支える幹事団の負荷低減が急務になっている。そこで、通信ソサイエティでは幹事団の負荷低減や若手研究者へのインセンティブとして、これまでトライアルとして行ってきた「幹事・幹事補佐研究会年間登録費免除」、「研究会参加費免除」などの施策について、内容を見直し本運用へ移行することを決定した。加えて、若手研究者へのモチベーション向上を目指した通信ソサイエティ若手研究奨励賞を始めるなど、研究会の活性化に向けた取り組みも実施している。通信ソサイエティのフラグシップ国際会議ICETCにおいて、研究専門委員会でも当該分野の専門性を活かした招待講演への貢献など、その成功に寄与している。以上のように、2024年度は研究会活動の新しい展開に向けた様々な取り組みを行った年度であったと考える。

### (2-1) 新型コロナウイルス終息後の新たな発展を目指した研究会運営

#### 1. 分野横断的な研究会の活性化

通信ソサイエティでは、研専間の連携による研究活動の活性化に取り組んでいる。例えば、第二種研究会等のイベント企画に通信ソサイエティの名称を付与し、広い研究分野からの参加を促している。例えば、国際ワークショップAsian Wireless Power Transfer Workshop (AWPT) 2024やネットワークシステム研究会と情報ネットワーク研究会の合同ワークショップが本制度を利用し開催された。

また、第三種研究会である革新的無線通信技術に関する横断型研究会 (Multiple Innovative Kenkyu-kai Association for wireless communications; MIKA)、超知性ネットワークングに関する分野横断型研究会 (Cross-Field Research Association of Super-Intelligent Networking; RISING)、サイバーライフラインに関する分野横断型研究会 (Cross-Field Research Association of Human-centered Cyber Lifeline) が、合計9回の研究会・講演会 (発表・講演数合計269件、参加者延べ620名) を実施し、分野横断的なテーマについて、活発な討議を行った。

さらに、通信ソサイエティがカバーする全研究分野を対象とした通信ソサイエティフラグシップ国際会議ICETC2024を北九州国際会議場にて対面開催し、参加登録者207名、現地参加者206名となった。各研専から25名がテクニカルアドバイザーとして運営に貢献、研専による招待講演13件を推薦し、会議の成功に貢献した。

#### 2. 産学活性化に向けた取り組み

学生の就職活動に対する山中会長の提言や中尾通ソ会長の「普段の私を見て」戦略を踏まえ、産学活性化課題検討WGを立ち上げて議論を行い、その結果を報告した。報告書では、学会が科学技術の促進に寄与するだけでなく効果的な人材発掘の場としても貢献することを目指し、その課題分析と提案を行った。本提案においては、学会において学生と企業との積極的な交流を促進する場を設け、研専等活動において学生と企業が普段から交流を深めて就職活動につなげていくことのためのいくつかの案を提示した。今後は、本提案に基づいて具体的な施策を行う組織体について議論し、2025年度内のイベント企画や予算措置について検討を行っていく予定である。

### 3. 国際交流イベントの取り組み

新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが5類感染症へ移行し、国際交流イベントが復活した昨年度に引き続き、2024年度も国際交流イベントを継続して開催している。アンテナ・伝播研究専門委員会（A・P研）では、国際会議 AWAP2023 (Asian Workshop on Antennas and Propagation 2024) を2024年6月25日から28日わたり、タイ・チェンマイで開催、国際会議 MJWRT 2024 (Malaysia-Japan Workshop on Radio Technology) を2024年8月26日から28日までマレーシア・ペナンで開催した。また、環境電磁工学研究専門委員会（EMCJ研）では、タイ・バンコクで2024年11月14日に Technical Seminar を開催している。さらに、無線電力伝送研究専門委員会（WPT研）においても、国際会議 AWPT2024（2024 Asian Wireless Power Transfer Workshop）を2024年12月5日から7日にかけて台湾・台中で開催した。いずれも盛況に開催された。

#### (2-2) 研究専門委員会の変更

2024年度は、通信ソサイエティの基幹分野を担う20の研究専門委員会と新規分野を担う5つの特別研究専門委員会で研究活動を開始、さらに、2024年10月より、研専運営会議の審議を経て、車載ICTとAD/ADAS-ITSインフラを核とする地域ICTプラットフォームに関する特別研究専門委員会(AA-ITS特別研専)も活動を開始し、いずれも活発な研究会活動を行った。

2024年度で設置期間が満了となる(1情報指向ネットワーク技術特別研究専門委員会(ICN特別研専)、デジタルサービス・プラットフォーム技術特別研究専門委員会(DPF特別研専)、それぞれの特別研究専門委員会から延長申請があり、研専運営会議での審議の結果、これらは全て承認された。期間は2025年4月1日~2027年3月31日である。

#### (2-3) 活性化資金関係

研究会活動の活性化と会員増強を図るための研専運営活性化資金に対して、下記の7件の企画の応募につき研専運営会議での審査を経て採択された。

1. 分野横断研究を加速するCQ基礎セミナーの開催(CQ研専)
2. 国際的研究コミュニティを持続・発展させるためのワークショップIA2024の開催(IA研専)
3. EMC実例集として持続的に発展可能なEMC設計コンテスト(EMCJ研専)
4. Web上のインタラクティブな発表機能実装の試みとホームページ改修(SeMI研専)
5. 異分野参加者倍増に向けた研究会のブランディング戦略の確立(CQ研専)
6. 無線電力伝送コンテスト(WPT研専)
7. SeMI Vietnam Workshopの開催費用補助(SeMI研専)

これら活動については計画通りに実施し、実施後に研専運営会議内での紹介と報告を行い、その効果の確認や施策の水平展開を図っている。

#### (2-4) 研究会開催実績

2024年度は12月までに、第一種研究会を99回(講演数合計1,479件)実施した。研専、特別研専併せて57回の第二種研究会を実施し、技術の普及や新たな技術に対する展開を図った。なお、第一種研究会の99回のうち、ハイブリッド開催は71回であった。

#### (2-5) 大会活動実績

2024年ソサイエティ大会(日本工業大学)では、一般セッション20分野/公募シンポジウム4課題合わせて講演数651件と企画セッション18課題を実施した。2025年総合大会(東京都市大学)では、一般セッション20分野/公募シンポジウム3課題合わせて講演数820件と企画セッション18課題を実施した。総合大会のWelcome Partyは全ソサイエティ合同で対面にて実施した。研専紹介は、若手会員・学生員がIEICEの重要な構成組織である研究専門委員会を身近に感じていただけるよう、パネル展示の形態で実施した。通ソとしては、7研専が研専紹介に参加し、若手会員や他研専の方々との交流が行われた。研専紹介の他に、ジュニア&学生ポスターセッション表彰式が行われ盛況だった。

#### (2-6) 研究会連絡会

研究会連絡会は、研究会に関する課題についてソサイエティ・グループ横断で情報共有し意見交換

する場であり、通信ソサイエティからも継続的に参画している。本年度も、他ソサイエティ・グループと研究会運営に関する諸課題について議論を行った。通信ソサイエティからは、これまでトライアルを行っていた研専幹事団の年間登録費免除、研究会発表参加費免除の本運用についての情報を提供した。

### (3) 出版活動

EBは2024年2月以降、ComEXは2023年10月以降、IEEE Xploreへの掲載が開始された。また、2023年6月よりComEXにインパクトファクタが付与された。これらにより、EB及びComEX両誌の国際的な知名度や発信力が高まり、投稿数の増加やインパクトファクタの向上が期待される。IEEE Xploreへの掲載に伴いIEEEに支出する掲載料を賄うため論文誌の掲載料を値上げしたが、2024年度の年間の投稿数は、掲載料の値上げ前と比較して僅かな減少に留まっており、IEEE Xplore掲載による一定の効果が確認できた。2009年3月から総合大会/ソサイエティ大会で継続的に開催している「論文の書き方講座」は、毎回聴講者から好評を博しており、2024年度においても、多数の参加があった。また、英文論文誌をはじめとする通信ソサイエティ論文誌の投稿数増加に向けて、各種施策を実施した。通信ソサイエティが主催の国際会議ICETC 2024では、編集会議から推薦した12件の招待講演が実施された。推薦論文制度に関しては、より多くの論文の推薦を目指し、研専運営会議と連携して、2023年度からスタートした掲載料補助のトライアルを継続した。

### (4) 本部論文賞候補、および、通信ソサイエティ論文賞

2023年10月から2024年9月までの間に通信ソサイエティの論文誌に早期公開された論文の中から、本部論文賞候補3編を選定した。これら3編の中で最も支持を集めた論文を最優秀論文賞候補とした。また、通信ソサイエティ論文賞として、同期間に和英論文誌、和文マガジンおよびComEXに掲載された論文の中から、優秀論文賞3編、チュートリアル論文賞1編、Best Paper Award 2編、Best Tutorial Paper Award 3編、ComEX Best Letter Award 1編、和文マガジン論文賞1編の計11編を選定した。また、通信ソサイエティマガジン賞を1編選定した。選定された12編の著者に対しては、2025年5月の通信ソサイエティ活動キックオフにて表彰が行われる予定である。

### (5) 国際会議

#### (5-1) 通信ソサイエティフラグシップ国際会議ICETC2024

2024年11月25日～11月27日の3日間、電子情報通信学会ソサイエティ主催によるフラグシップ国際会議 IEICE-CS International Conference on Emerging Technologies for Communications (ICETC 2024) を北九州国際会議場（福岡県北九州市）にて対面開催した。通信ソサイエティがカバーする全研究分野を対象とした国際会議であり、通信ソサイエティ執行委員会、研専運営会議、研究専門委員会、編集会議等の通信ソサイエティを運営する会議体が連携・協同し準備・実施した。

参加登録者207名、Keynote 6件、Invited/Specialセッション25件、KICS特別セッション3件、一般投稿からのOralセッション13件、Poster Presentationセッション101件の発表があった。優れた論文・優れたプレゼンテーション・活発な投稿に対して、Best Paper Award for Oral Session 3件、Best Paper Award for Poster Session 3件、Student Presentation Award 14件、Outstanding Contribution Award 4件を授与した。

Oralセッション、Poster Presentationセッションの全原稿はIEICE Proceeding Series上でオープンアクセスとして公開した。

#### (5-2) ICETC2024以外の国際会議

2024年度においては、通信ソサイエティ（研究専門委員会を含む）が主催・共同主催の国際会議1件が開催された。その他、9件の国際会議に対し技術協催、2件の国際会議に対し協賛を行った。この結果、通信ソサイエティが関与した国際会議は2023年度14件に対し12件であった。主催・共同主催の国際会議数は2022年度3件、2023年度は2件に対して、2024年度は1件であり例年より若干少ない開催件数となった。なお、2025年度は2024年度末の時点で主催・共同主催4件を含む計6件の国際会議への関与が予定されている。

主催・共同主催・技術協催向けの国際活動資金の活用実績は17万円、余剰金は63万円である。国際会議の開催準備費用補助を目的とした主催・共同主催団体向けの資金貸与制度については、活用実績無しであった。

#### (6) 国際活動（シスターソサイエティ協定について）

通信ソサイエティの海外情報発信および海外会員の維持・増強を強化する施策として国際発信 WG を立ち上げ、2023 年度は海外会員への直接的なリーチ策として ICETC2024 とリンクした絵葉書の作製・郵送を通し、会議開催を発信した。2024 年度は本会論文誌や本会主催の国際会議、通信関連の Web 展示などのコンテンツへアクセス可能なサイトを構築・公開を行った。ワンサイトかつモバイルフレンドリーなポータルサイトにすることで海外会員が本会情報（論文誌や国際会議等）へのアクセスが容易となり、投稿機会増加を期待できる。今後は、会員事業企画・運営会議にて絵葉書作成・郵送の定着化及びコンテンツ拡充を実施する予定である。

また、通信ソサイエティと連携しているシスターソサイエティ（従来 6 ソサイエティ）のうち、3 ソサイエティについて連携協定のリニューアルを進めるとともに、新たに 1 ソサイエティについて連携協定を締結すべく準備を行っている。

#### (7) ホームページ・会員サービス

ホームページについては、昨年度と比較して各情報のページへの安定的なアクセス数を獲得している。CS アーカイブスサービスでは、2025 年 3 月末に開催される総合大会における通信ソサイエティ企画セッションの講演資料の一部を閲覧できるサービスを実施する予定である。E メールニュースでは、研専企画や国際会議、出版物目次などを含め、2024 年度は合計 74 件（2023 年度は 28 件）とコロナ禍からの回復に伴うイベント活発化に伴い、約二倍ほどの配信を行っている。新型コロナウイルス感染症の未曾有の経験を経て、まったく開催できなかった対面のイベントが増えつつある。しかしながら今後も、その利便性の高さからオンラインツールを活用した情報配信が活発化していくことが予想され、サービス向上や利用者拡大の検討を行っていく所存である。

#### (8) 通信ソサイエティ Welcome Party

Welcome party は、学生会員や若手会員の方々が、諸先輩方と自由にコミュニケーションできる場の提供を目的として 2008 年から始まり、2024 年度が 16 回目となる。2017 年度からは全ソサイエティ合同での開催と規模を拡大してきたが、2019 年度は新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため中止を余儀なくされた。2020 年度は緊急事態の状況下であっても会員同士の交流の場が失われてしまわないよう、通ソ単独にてオンラインによる開催、2021 年度は通ソが主導し、全ソサイエティ合同でのオンライン開催を行った。2022 年度は対面開催を基本方針に 2017 年度のものを踏襲しながら実施した。2023 年度は 2022 年度に引き続き対面開催だが懇親会との合同開催という形となった。2024 年度は Welcome Party 単独開催に戻り、通ソが主導し全ソサイエティ合同で対面開催した。主たる企画として、ジュニア&学生ポスターセッションの表彰式、各研専からのポスター展示（17 研専参加）、ショートプレゼン（12 研専参加）を実施した。学生はじめ多くの学会参加者が参加し、参加者及び各研専に対してアンケートを実施した。アンケート結果を踏まえ、welcome party の意義を改めて見直し、今後の学生会員や若手会員の学会活動参加推進のための施策を検討していく予定である。

#### (9) 通信ソサイエティ表彰

ソサイエティ大会期間中の 9 月 10 日に、特別講演および表彰式を開催した。功労顕彰状（16 名）、活動功労賞（120 名）の贈呈式を行うとともに、会長企画特別講演として、日本電気株式会社 執行役 Corporate EVP 兼 CTO の西原 基夫様による招待講演「未来パラダイム：AI、コンピューティング、通信の共進化と社会の革新」を実施した。また、通信ソサイエティ論文賞・マガジン賞授賞式を、5 月 17 日に開催し、論文賞（10 件）、マガジン賞（2 件）の贈呈を実施した。

#### (10) 規程類の改定について

通信ソサイエティ運営規程、及び、通信ソサイエティ会員事業企画・運営会議規程において、会員事業企画幹事の定員を増加し、通ソ国際会議の運営体制の強化を行った。

### 1. 3 エレクトロニクスソサイエティ

エレクトロニクスソサイエティ（以下、エレソと略す）は、電子情報通信システムを構成するエレクトロニクスやフォトニクスの材料、部品、デバイス、サブシステムに関する基礎から応用までを研究活動領域としている。この領域における我が国の産官学連携促進や科学技術の進歩への貢献、会員（研究

者)の研究成果発表や研究者間の議論の場の提供を目的としている。「企画会議」、「編集出版会議」、「研究技術会議」の3会議体制で上記活動を効率よく実施し、会員の満足度向上を目指している。平成28年度から研究技術会議内に立ち上げた3つの領域委員会(電磁波基盤技術領域委員会、フォトンクス技術領域委員会、回路・デバイス・境界技術領域委員会)に国際会議の主催・共催・協賛や研究専門委員会活動にかかわる承認権限を委譲し、手続きを迅速化するとともに、各領域内で近接分野の研究専門委員会の合同・連携企画を推し進めている。さらに、領域間の共同企画や、研究専門委員会活動の活性化に関する共通の課題は、領域連携会議にて議論を進めている。

2024年度、エレソプレナリーセッションでは研究分野の拡大や技術分野の活発化に繋がる研究者の「きづき」を導くことを意識した特別講演会を開催した。ソサイエティ大会のプレナリーセッションでは「改めて、IOWNとは何か?」と題し、研究者・技術者視点でIOWNの目指す方向性を俯瞰し、未来社会を具現化するための技術課題は何かを考え、研究者の新たなチャレンジを鼓舞することを目的として特別講演を開催した。また、総合大会のプレナリーセッションでは、「半導体産業の再興に向けて・魅力の醸成と人材育成の試み」と題し、日本における半導体産業の再興に向け、その半導体産業の魅力に再注目し、特に人材育成に向けた取り組みについて議論することを目的に特別講演を行った。いずれも、単なる技術の最新動向の報告ではなく、産業界、ビジネス観点の内容を含める事で社会実装に向け、研究開発方針策定の参考となる要素を含めた。さらにエレクトロニクスソサイエティ所属の研究者等が新たな研究課題を着想するきっかけ作りや、同技術分野の人材育成に関しての議論の場の提供に寄与した。また、学生員や若手会員が先輩研究者と自由に意見交換ができる場の構築を目的に全ソサイエティ共催のWelcome Partyを開催し、エレソがオープニングの企画・司会を務めた。

また、組織自体のサステナビリティを担保、つまり将来にわたり魅力あるエレソ活動を目的として、委員会等活動の効率化や将来を見越した活動に向けた施策を実行した。前年度より引き続き研専の在り方の議論を持ち掛け、例えば、複数の研専が研究会を同時開催するとともに、その会場にて当該研専の専門委員や執行部が各研専の独自性の維持もしくは運用効率化に向けた研専の統廃合などの将来的な流れを議論する機会を持ち込むような枠組みを伴う企画に対して、積極的に開催費用を支援する施策を設けた。さらに、「研究会の運営等に関する新しい規定や取組の説明と意見交換」の会合を開催し、研専の委員長や領域の代表等を含むエレソリーダーに対して、本会における財務改革の趣旨や課題の共通理解を得る機会を設けた。加えて、効率化の施策としては、これまでエレソ独自のファイル共有サーバーや、アーカイブ公開サーバーを有していたが、金銭的成本だけでなく維持管理の稼働コストの低減を目的に、本部サーバーへの集約を推進・作業を完了した。今年度は5回の執行委員会も、ハイブリッド会議と、完全オンライン会議でメリハリをつけるソサイエティの運営を行い、より次世代に繋げられるよう効率化を進めた。

以下、本年度のソサイエティの主な活動を3つの会議ごとに記す。

(1) 企画会議：例年通りエレソ全体の財務立案と把握、企画の取りまとめと発信、会員サービスの充実、対外広報などを担当した。

(1-1) 予算：今年度に引き続き次年度も「エレクトロニクスソサイエティ独自の事業費」に関する予算を確保し、会員活性化・増加施策の強化を図った。2024年度については、国際会議の収益が現時点で計上されていない点と実施事業調整等を反映して、予算案段階では約923万円の赤字であった。10月末時点での執行状況は、2022年度と比較して収支ともに増加傾向にあり2024年度決算見込みとして赤字額が増加する見込みである。2024年度から2025年度にかけて、当初予定に無かった会員管理システムの更改を行うことになったこと等が要因である。2025年度については、国際会議の収益増加と基盤システム等保守費の増加を反映して約493万円の赤字を見込んだ予算案を策定した。会員減少による収益減少傾向が続いており、引き続き「エレクトロニクスソサイエティ独自の事業費」の有効活用を図るとともに、財務の安定を図る必要がある。

(1-2) 顕彰：エレクトロニクスソサイエティ活動功労表彰として30名の表彰を行った。例年通り、令和6年度(第28回)エレクトロニクスソサイエティ賞の選考を実施し、3分野において表彰を行う予定である。また、2024年度エレソフェロー推薦候補者を4名、2024年度シニア会員候補者を9名選定した。2024年ソサイエティ大会での発表に基づき6名の優秀な学生を選考し、2025年総合大会(ハイブリッド開催)においてエレソ学生奨励賞を授与した。

(1-3) 広報：エレス Newsletter は年 4 回発行した。各号において、各領域委員会の活動紹介、各賞受賞者、技術解説の寄稿などを編集し、記事内容の充実を図った。

(2) 編集出版会議：例年通り出版戦略、編集出版関係財務の立案と把握、著作権管理方法、3 論文誌発行を担当した。エレス各論文誌の存在感が一層高まるよう、以下の施策を進めた。

(2-1) 和文誌：総合大会、ソサイエティ大会で発表のあった注目研究をピックアップし、招待論文の依頼・掲載を継続して進め、論文誌の魅力増大を図った。これは多くを占める本会の日本人会員（特に学生や若手研究者）に対し、母国語による効率的な教育・知識普及、最新技術動向の把握の効果が望めるためである。また、論文誌活性化の一環として、学生を対象とした「学生論文特集」、それぞれの分野の第一人者の研究者に執筆を依頼した「エレクトロニクス分野におけるシミュレーション技術の進展論文特集」「マイクロ波ミリ波論文特集」を企画し、それぞれ、J107-C No.4、J107-C No.5、J108-C No.1 に掲載した。また、論文投稿増加施策として、2023 年 4 月から実施中の技術研究報告様式での和文誌投稿を受け入れ、研究会技報と和文誌の同時投稿による論文掲載料の割引を継続した。さらなる増加施策として、2025 年 5 月以降に和文誌 C に投稿するペーパー・ショートノートについて、2025 年 9 月開催のソサイエティ大会以降の学術講演会と同内容での投稿に対して論文掲載料の割引を行う予定である。

(2-2) 英文誌：引き続き投稿件数の増加を図るため、投稿ウェブサイトで投稿促進を行うと共に、各国際会議と連携して、論文誌としての注目度の向上が期待される特集号を中核とする方針の下、編集活動を進めた。投稿数、閲覧数の増加、および論文誌のステータス、インパクトファクタ向上を目的に、引用論文数の下限設定や、JSTAGE におけるオープンアクセス化などを実施した。各施策の効果は、インパクトファクタなどの数値に反映されるのに一定の時間がかかるものと考えられるため、効果検証を行うために敢えて新規の施策は行わず、特集号を中核とした施策を着実に推進・実施した。

(2-3) ELEX：全面オープンアクセスという特長を堅持し、発刊以来、速報性の維持・向上につとめてきた。近年はインパクトファクタの向上を目指して編集体制の強化や最低引用論文数の厳格化など様々な施策を実施してきている。今年度も引き続き、インパクトファクタのさらなる向上を目指して、国際的な認知向上に向けた海外査読員への積極査読依頼、著名な研究者によるレビュー論文の増加施策などを検討、実施した。CC マークの付与に際してテンプレート改訂を実施した。加えて、Gold OA 化（Open Access）、DOAJ（Directory of Open Access Journals）への ELEX 誌の採録に向けた取り組みを進めている。

(3) 研究技術会議：今年度も 3 つの技術領域委員会と領域連携会議が協力して、研究専門委員会（研専）の活性化策立案、新規/特別研専の設立/継続審議、研専財務掌握、全国大会統括、国際会議支援、対外活動支援を実施した。具体的な施策の一つとして、回路・デバイス・境界技術領域にて、韓国における半導体分野の学会 Institute of Semiconductor Engineering (ISE) とのシスターソサイエティ締結を完了（先方学会の年次会合：2024.7.15 釜山にて両会長により署名）し、Korea Electronics Section の代表委員を確定するとともに、今後の活動計画の策定を継続した。

(3) 研究技術会議：今年度も 3 つの技術領域委員会と領域連携会議が協力して、研究専門委員会（研専）の活性化策立案、新規/特別研専の設立/継続審議、研専財務掌握、全国大会統括、国際会議支援、対外活動支援を実施した。昨年度に引き続き、回路・デバイス・境界技術領域にて、韓国における半導体分野の学会とのシスターソサイエティ締結および Korea Electronics Section における活動計画の策定を実施した。

(3-1) 研究専門委員会等の活動：15 の研究専門委員会、5 の特別研究専門委員会、6 の国際会議国内委員会が、各種の研究会や全国大会セッションの企画運営、国際会議などの研究学術活動を行った。

(3-2) 国際会議：2024 年 4 月から 2025 年 3 月にかけて、エレス協催・協賛・後援として 7 個の国際会議（International Conference on Electromagnetics in Advanced Applications and IEEE-APS Topical Conference on Antennas and Propagation in Wireless Communications (ICEAA-IEEE APWC 2024), IEEE Symposium on Low-Power and High-Speed Chips and Systems (COOL Chips 27), 2024 Asia-Pacific Workshop on Advanced Semiconductor Devices (AWAD2024), 29th Microoptics Conference (MOC2024), International Topical Meeting on Microwave Photonics

(MWP2024), Asia-Pacific Microwave Conference (APMC 2024) を開催した。

(3-3) 2024 年 (令和 6 年) ソサイエティ大会では一般講演 213 件に加えて、シンポジウム講演 0 件、ソサイエティ特別企画 1 セッション、依頼シンポジウム 6 セッション (共催 1 セッション含む) を実施した。2025 年 (令和 7 年) 総合大会は一般講演 273 件に加えて、シンポジウム講演 12 件、ソサイエティ特別企画 2 セッション、チュートリアル 0 セッション、依頼シンポジウム 7 セッション (共催 3 セッション含む) を実施した。

(3-4) リーダーズ・ミーティング (研専幹事意見交換会) を 2024 年 8 月に開催し、研究専門委員会運営に関わる幹事、幹事補佐及び運営委員を対象に、各会議から研専への施策や依頼事項の説明及び質疑を行い、研専運営に関する手続き、情報等に関する理解を深めた。昨年度に引き続き、説明を簡素化しながらも重要な手続きを把握できるように資料構成を工夫した。今後、本議論を参考にして施策を検討していく。

## 1. 4 情報・システムソサイエティ

情報・システムソサイエティ (以下、ISS と略す) は、情報処理技術とコンピュータ・通信・人間を融合したシステム化技術に関する基礎から応用までの分野を研究領域としている。本ソサイエティの役割は、会員に研究発表と交流の場を提供することであり、ひいては重要な社会基盤である情報技術分野の持続的な発展と情報社会での様々な問題解決に貢献することにある。ISS が、同研究分野の活動の基盤としてメンバーの活動を支援・促進し、もって社会的役割を果たしていくために、2024 年度も引き続き、論文誌、研究会、総合大会・FIT、ソサイエティ誌、及びこれらソサイエティ活動に関する広報の強化に重点を置いて活動を展開した。

### (1) 運営委員会の体制

会員数増強、会員サービス向上、ダイバーシティ向上等の課題は、本会全体にまつわる重要な課題であると同時に、ISS 内でも集中的な検討が必要な喫緊の課題である。ISS では、こうした中長期的な課題を検討するため、2022 年度から ISS 未来企画委員会を設けた。2024 年度も、前年度までの体制で運営した。

### (2) 論文誌 (和文論文誌・英文論文誌)

#### (2-1) 和文誌

投稿数の確保の対策として継続的な特集号の企画を行っており、2024 年度は 5 件の特集号を発行した。例年、和文誌編集委員会が特集編集委員会となって企画している「学生論文特集」については、2024 年度も編集作業を進め、2025 年 4 月に 7 件の論文を掲載予定である (投稿数 37 件)。現在、和文論文誌 D への投稿件数は減少傾向にあり、さらに特集号の企画提案数も昨年と比較して減少している。そのため、2024 年度は編集委員が関連する研究専門委員会に特集号の企画提案を依頼する試みを行っている。臨時査読委員の査読の質の記録と、査読の質が高い委員を常任査読委員として推薦するプロセスも継続して実施しており、開始時から常任査読委員が 115 名に増加 (2023 年度中に 1 名増加) した。一方で、判定報告書の質すなわち査読の質を維持するための幹事団による全数チェックや、編集委員の編集能力向上のための委員会への出席率改善策などは継続実施できている。また、編集作業への SNS の利用についても検討を行っている。現在はメールベースで判定報告書案に関する審議や幹事団によるチェックを行っているため、メールの見落としやスパムフィルタの誤検出による不達のため著者通知に時間を要することがあった。そこでこれらの作業に Slack を導入することで、見落としや不達を防ぐとともに、作業の効率化を進めている。2023 年度のルール制定および試行を経て、2024 年度からは Slack によるチェック作業を本格的に導入することができた。

#### (2-2) 英文誌

英文誌では他分冊と同様に J-STAGE に早期公開版を掲載することにした。これにより引用件数の増加が期待される。また Web of Science の IF は、0.5 (2017)、0.576 (2018)、0.449 (2019)、0.559 (2020)、0.695 (2021)、0.72 (2022)、0.72 (2022)、0.59 (2023) と増加しており、投稿数の増加にも繋がると考えられる。また特集号については、9 件が発行され、ほぼ例年どおりの発行件数となった。投稿数の多い特集号は、“Data Engineering and Information Management” (投稿数 18 件、内 Letter 1 件、採録数 7 件、内 Letter 0 件)、“Information and Communication Technology to Support

Hyperconnectivity”（投稿数 16 件、内 Letter 0 件、採録数 10 件、内 Letter 0 件）などであった。さらに、投稿者へのサービス改善の 1 つとして、査読日数の削減を目指しており、査読委員の割り当てが遅れ気味の編集委員に対し、週一回の自動メールとは別に担当幹事から直接催促メールを出している。これに返信して作業を急ぐ編集委員も多く、平均査読期間の短縮が期待される。

#### (2-3) ISS シンポジウム・論文誌同時査読制度

ISS あるいは ISS に属する研究専門委員会が主催あるいは共催するシンポジウム、ワークショップ、国際会議（以下、シンポジウムと総称する）において、査読付き論文を募集する場合がある。この論文を論文誌論文として同時査読し、採択された場合には論文誌に掲載する制度を整備した。シンポジウムの査読と論文誌論文としての同時査読により論文誌に掲載できる選択肢を著者に示すことにより、シンポジウムの査読付き論文を通じて論文誌論文への投稿が促されることを期待した制度である。

2025 年 7 月に PRMU 研究専門委員会の共催により開催される MIRU2025、PRMU 研専が母体となり開催される国際会議 MVA2025 においてこの制度を適用した。

#### (3) 研究会

2024 年度は、1 つの特別研究専門委員会が継続を廃止した一方、1 つの特別研究専門委員会が来年度から常設研究専門委員会となったことから、24 の研究専門委員会と、2 つの特別研究専門委員会となり、活発な活動を行った。第一種研究会開催総数は 111 回（前年比 98.2%）、発表総件数は 1,642 件（確定前の速報値、前年比 89.8%）であった。外部資金受け入れは計 2 件（20 万円）（前年比 200%）を承認・実施した。

前年度に引き続き、ハイブリッド研究会開催の負担軽減策の 1 つとして、前年度整備したハイブリッド開催に係る配信機材について貸出しを実施した。今後、ハイブリッド開催の継続について研究専門委員会の意向を最大限尊重しつつ、ソサイエティとして可能なサポートを行っていく。

#### (4) 大会・FIT

##### (4-1) FIT2024（情報科学技術フォーラム）

ソサイエティ大会（ISS/HCG）と情報処理学会（IPSJ）の秋の全国大会を統合した FIT2024 を、2024 年 9 月 4 日～6 日の 3 日間でハイブリッド開催した。参加者数は 2,331 名（前年 2,256 名）であった。現地来場者は 1,053 名となっており、ハイブリッド開催に対する一定の需要が窺えた。選奨論文 100 件、一般論文 502 件、の計 602 件（前年 567 件）の研究発表が行われたほか、トップコンファレンスセッションの 15 セッションを含め、計 27 件の企画セッションが実施された。FIT の参加者の他、研究会のみとして 149 名の参加者があった。学術賞表彰式も開催し、FIT2024 船井業績賞（1 件）、および船井ベストペーパー（3 編）、FIT 論文賞（7 編）、ヤングリサーチャー賞（9 名）を表彰した。

FIT2025 は、北海道科学大学（札幌市）で 2025 年 9 月 3 日～5 日にハイブリッド形式にて開催予定である。引き続き、各種企画の一層の充実など参加者に対するメリットの訴求を図る予定である。

##### (4-2) 2025 年総合大会

2024 年 3 月 24 日～28 日に対面で開催された総合大会に合わせ、ISS は 1 件の依頼シンポジウムセッション、1 件の公募シンポジウムセッションを実施した。さらに昨年は ISS として企画しが今回からは総合大会の企画ジュニア&学生ポスターセッションを主導的に実施した。2025 年度より若手活性化 WG 委員会主体となったジュニア&学生ポスターセッションの申し込み総数は 234 件、高専生（専攻科を含む）の発表が 36 件、高校生の発表が 28 件、専門学校生 1 名、小学生の発表も 2 件含まれていた。選奨セッションには 117 件（うち小学生～大学 3 年相当のジュニア会員世代 66 件）の発表があり、表彰式では優秀ポスター賞（6 件）、特別賞（1 スポンサーにつき 6 件、3 スポンサー合計 18 件）、奨励賞（4 件）を表彰した。

#### (5) 国際化施策

本ソサイエティの活動の国際化に向けた取り組みとして、2024 年度は、2023 年 7 月に IEICE-ISS 主催で開催した 18th International Conference on Machine Vision Application (MVA 2023) の次の MVA2025 の開催に向けた準備を進めた。MVA2023 と同様に IEICE-ISS 主催、PRMU 研専が母体となって開催に向けた準備を 2024 年度には進めた。

一方、2024年度には、Asia-Pacific Signal and Information Processing Association (APSIPA)とISSのSister Society Agreementを更新した。APSIPAは、2009年に設立、会員数400~500名、主要な活動の一つとして会議(APSIPA ASC)を毎年開催(参考：<https://www.apsipa.org>)している。

また、ISSが若手研究者育成と国際競争力強化のための施策として運用を開始したメンター制度とリンクする形で、ISS国際会議派遣制度として規定を整備した。そして、2024年10月に開催されたECCV2024に3名の若手研究者を派遣し、その成果については2025年3月に開催されたPRMU研究会にて報告があった。

その他

#### (6-1) ソサイエティ誌

本年度もソサイエティ誌は、5回/年(通常号4回と特別号)の発行を継続し、研究会活動を紹介するためのインタビュー記事、研究会の会議報告等を掲載した。さらに、ソサイエティ活動の活性化を目的として、研究会、国際会議、コンテスト等の幅広い活動内容の情報発信を積極的に研究会に呼びかけることで、多彩な記事が掲載され、afterコロナ時代におけるソサイエティ会員の情報共有、円滑な連携を支援した。

#### (6-2) 選奨

ISSでは、ソサイエティの独自性向上と活性化のための施策として、サーベイ論文、先見論文、連作論文、システム開発論文を選定対象とするソサイエティ論文賞を設定している。ソサイエティ活動について顕著な貢献があった会員を選奨する活動功労賞も設定し、2009年度からは、従来の活動功労賞を「活動功労賞」と「査読功労賞」に発展的に分割し、貢献のあった会員を選奨している。2024年度は2024年度活動功労賞(4名)ならびに査読功労賞(10名)の授与を行った。また、2025年総合大会ISS特別企画ジュニア&学生ポスターセッションにおいて、優秀賞(名)、特別賞(名)を決定し、表彰式を行った。

#### (6-3) 広報

今年度は、ソサイエティ誌や総合大会、受賞者等について随時ウェブサイトへの掲載を行いつつ、ML配信の審議を1件実施した。また、昨年度開始した戦略的講演の実施に関する審議と情報共有の機能、及びメーリングリストのメンテナンスを実施し、2023年度に更改したWebサイトについても各研専幹事からの要望や指摘を踏まえて事務局と連携して順次改善を図った。さらに、ISS入会ページにおいても研究専門委員会のページや電子情報通信学会ホームページへのリンクを更新し、ISSの最新活動内容を提供できるようにした。

## 1. 5 NOLTA ソサイエティ

### (1) ソサイエティ運営

今年度は、研究会、大会、国際会議等は完全対面形式を原則とする開催に移行した。また、国際会議等の準備状況や方針の確認を各回の委員会にて定期的に行った。その他、協賛や技術共催など、他学会への協力を積極的に推進するとともに、KICSとはMoUの調印式も行った。NOLTA ソサイエティ大会の会計の取り扱いについて見直しを行った。また、活性化事業予算を活用し、NOLTA ウェブサイトを刷新したり、NOLTA Journal のフライヤーを作成したりするなど、NOLTA の活動を広める取り組みを行った。

### (2) 研究活動とその活性化

#### (2-1) 研究専門委員会の活動

本ソサイエティには非線形問題研究専門委員会(NLP)と複雑コミュニケーションサイエンス研究専門委員会(CCS)の2つの研究専門委員会がある。今年度の研究会は、いずれの研究会も完全対面で開催された。NLPは年間6回開催され講演数は121件であった。CCSは年間4回開催され講演数は54件であった。NLPとCCSそれぞれにおいて前年度の研究会発表論文の中から優秀な発表に対する奨励賞受賞者を選定し、NOLTA ソサイエティ大会において表彰した。

#### (2-2) 非線形理論とその応用に関する国際シンポジウム

## (International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications: NOLTA)

### ・ NOLTA2024

NOLTA ソサイエティの旗艦国際会議である NOLTA は 2024 年 12 月 3 日～6 日にベトナム・ハロンベイにおいて完全対面で開催された。参加者数は 253 名、発表件数は 201 件、セッション数は合計 40 セッションであった。

### ・ NOLTA2025

2025 年 12 月 2 日～5 日に沖縄での開催を目指し、準備を進めている。現時点では完全対面で開催する予定である。

### ・ NOLTA2026

2026 年中の開催を目指し、準備を開始した。

## (2-3) Japan-Korea Joint Workshop on Complex Communication Science (JKCCS / KJCCS)

### ・ KJCCS2024

2024 年 1 月 29 日～31 日に別府にて開催された。参加者数は 131 名、発表件数は 87 件、セッション数はポスターセッションを含めて合計 10 セッションであった。

### ・ CCMS 2025 (旧 JKCCS 2025)

韓国マルチメディア学会 (KMMS) がホストとして開催する MITA 2025 に併設される Workshop として、新たに CCMS 2025 (International Workshop on Complex Communication and Multimedia Sciences) を立ち上げて、2025 年 7 月に済州島 (韓国) で開催する予定である。

### ・ CCMS 2026

NOLTA ソサイエティ CCS 研究会がホストとして、同様の Workshop を企画する予定である。実施体制は未定である。

## (2-4) 総合大会・ソサイエティ大会における活動

2024 年ソサイエティ大会 (日本工業大学) の一般セッション講演数は NLP 33 件、CCS9 件の合計 42 件であった。また、ソサイエティ大会では ESS と合同でソサイエティ表彰贈呈式を開催した。2025 年総合大会 (東京都市大学) では 1 件の依頼シンポジウムセッションを開催した。一般セッション講演数は NLP20 件、CCS13 件の合計 33 件であった。

## (2-5) NOLTA ソサイエティ大会

ソサイエティ全体の活動を総括して、NOLTA ソサイエティがカバーする学問分野の更なる発展・充実を図るため、NOLTA ソサイエティ独自のソサイエティ大会を開催している。今年度は、2024 年 6 月 8 日に北九州市小倉の西日本総合展示場 AIM 3F にて完全対面の形式で開催された。一般講演数は 47 件であり、この他、1 件の論文賞受賞記念講演、4 件の研究会奨励賞受賞者講演などが行われた。

## (3) 編集活動

### (3-1) 論文誌の編集活動

英文電子ジャーナル「Nonlinear Theory and Its Applications, IEICE (略称 NOLTA)」(オープンアクセス(OA)ジャーナル) を 4 回発行し、2024 年度 (Vol.15, No.2～Vol.16, No.1) は 68 編の論文、5 編の巻頭言、(総ページ数 973) を掲載した。それらの発行の中で小特集企画 5 回を実施し、NOLTA の内容の充実を図った。また、NOLTA は、Clarivate 社の Journal Impact Factor が 2024 年 6 月に更新され、同年 8 月には Directory of Open Access Journals(DOAJ) に掲載が決定した (<https://doaj.org/toc/2185-4106>)。

## 1. 6 ヒューマンコミュニケーショングループ

ヒューマンコミュニケーショングループ (HCG) は、人間中心の新しいヒューマン・コミュニケーションエンジニアリングに関する学際的研究の推進を目的として 1995 年度に発足し、様々な研究領域を取り込みながら学際的研究を推進している。工学研究者だけでなく、人文科学、社会科学系の研究者も多く参加しており、様々な観点から自由で開かれた議論を行う場を提供している。長年の活動により、関連分野の発表の場として認識されており、他分野の研究者にとっての電子情報通信学会の入口的役割を果たしている。

2024 年度は、運営委員会をオンラインで開催したものの、各研究会や HCG シンポジウムでは対面のみでの開催も増え、改めて対面開催の良さを活かした企画・実施がなされた。論文誌での特集号の企画

は従来通り継続され、学際研究の発表・議論の場を提供した。今年度は、昨年度に引き続き2回目となるが、HCGの紹介と他ソサイエティとの連携の場として、3月に開催された総合大会において企画セッションを実施した。

2024年度の主な活動概要を示す。

#### (1) 研究会活動

2024年度は、4つの研究専門委員会、および3つの特別研究専門委員会、1つの第三種研究会運営委員会による研究会活動が行われた。

#### (2) HCG シンポジウム

2024年12月11日から13日まで石川県金沢市金沢歌劇座にて、HCGシンポジウム2024を開催した。このシンポジウムはHCGの全ての研究専門委員会、特別研究専門委員会、運営委員会が合同で運営され、プログラムも研専ごとではなく研究内容によって構成し、研専の枠を越えた議論を行う場が提供されている。今年度の実施形態は、効果的な実施を検討し、対面のみとした。

発表件数は131件（招待講演：2件、チュートリアル講演：1件、特集テーマセッション：4件（5セッション）、口頭発表とインタラクティブ発表：92件、インタラクティブ発表のみ：36件）であり、2023年度と同程度の規模であった。参加者数は239名であった。また、前回に続き、インタラクティブ発表用の全てのポスターを会期中掲示できるようにした。これに対して、参加者からは、いつでも閲覧できたので良かったとの好評価となった。

次回、2025年度のHCGシンポジウムは、12月10日～12日の3日間、福岡県北九州市にて、開催予定である。

#### (3) 総合大会企画セッション

電子情報通信学会内でのHCGの知名度を向上させるべく、昨年度に引き続き試みとして総合大会において「2025年HCGの旅」を企画・実施した。そのセッションでは、HCGの成り立ちから現在の構成を紹介した後、4つの研究専門委員会（ヒューマンコミュニケーション基礎研究会（HCS）、ヒューマン情報処理研究会（HIP）、メディアエクスペリエンス・バーチャル環境基礎研究会（MVE）、福祉情報工学研究会（WIT））の特徴と代表的な研究例を紹介し、HCGへの参加を促すと共に、他ソサイエティや他学会との共催可能性を強くPRした。

#### (4) 研究会運営の改革

財務将来構想ワーキンググループ（WG）の提言に基づき、HCGシンポジウムを主たる収益事業として位置づけて、魅力ある内容にしつつ収益をあげて、グループの収入源とすることを主たる施策として実施している。魅力的な講演を揃え、参加人数を増やすことを試みた。併せて、事前に開催費用の検討を行うことなどにより、収益獲得を実現した。

また、研究会の収益改善に向けて、参加費の修正を行った。

#### (5) 編集活動

HCGは独自の論文誌を有していないが、2004年から隔年で、2013年からは毎年、和文論文誌のA、D、あるいは英文論文誌のいずれかで「ヒューマンコミュニケーション」特集号を発行してきた。2016年度からは常設の編集委員会を設置して活動している。次回の特集号として、和文論文誌A（2026年4月発行予定）と英文論文誌D（2026年4月発行予定）を準備している（投稿締切は2025年4月22日）。

#### (6) 表彰活動

2024年度ヒューマンコミュニケーション賞（HC賞）の選定を行い、6件を選考し、HCGシンポジウム2024の会場において表彰式を行った。本賞は第一種研究会の発表から25件につき1件、以降50件ごとに1件を基準とし、各研究会で組織したHC賞審査委員会において選考している。

また、HCGシンポジウム2024の発表の中から最優秀インタラクティブ発表賞5件、優秀インタラクティブ発表賞5件、学生優秀インタラクティブ発表賞5件、特集テーマセッション賞5件を選考し、表彰した。

## 2. ソサイエティ大会に関する事項(定款 第4条 ロ号)

### 2. 1 ソサイエティ大会

下記の期日・会場において基礎・境界、NOLTA、通信、エレクトロニクスの4ソサイエティが合同して開催した。

期 日 2024年9月10日(火)～13日(金)  
 会 場 日本工業大学 埼玉キャンパス  
 参加者 2,328名  
 懇親会 大学内 ダイニングホール内メインダイニング

#### (a) 企画講演セッション数

企画種別	大会委員会	ソサイエティ				合計	実数
		基礎・境界	NOLTA	通信	エレクトロニクス		
大会委員会企画	4	—	—	—	—	4	4
ソサイエティ特別企画	—	※1	※1	2	1	5	4
パネルセッション	—	0	—	2	—	2	2
チュートリアルセッション	—	2	—	2	—	4	4
依頼シンポジウムセッション	—	3	—	††9	‡6	18	16
合計	4	※6	※1	††15	‡7	33	30

※基礎・境界とNOLTAの共催企画1件を含む。

†通信とヒューマンコミュニケーショングループの共催企画1件を含む。

‡通信とエレクトロニクスソサイエティの共催企画1件を含む。

#### (b) 公募講演件数

	ソサイエティ				合計	実数
	基礎・境界	NOLTA	通信	エレクトロニクス		
一般講演	145	42	615	213	1015	1015
シンポジウム講演	2	—	24	0	26	26
ポスターセッション	—	—	12	—	12	12
合計	147	42	65	213	1053	1053

### 2. 2 FIT2024(第23回情報科学技術フォーラム)

下記の期日・会場において情報・システムソサイエティ、ヒューマンコミュニケーショングループ及び情報処理学会が合同して開催した。

期 日 2024年9月4日(水)～6日(金)  
 会 場 広島工業大学 五日市キャンパス (ハイブリッド開催)  
 参加者 2,331名 (現地来場者 1,053名)  
 懇親会 82名程度 (大学内で開催)

イベント企画	研究会提案企画	5件
	委員会提案企画	5件
	現地提案企画	1件
	特別企画	1件
	トップコンファレンスセッション	15件

	スポンサー系セッション	4件
	講演件数	579講演

### 3. 国際会議に関する事項(定款 第4条 ロ号、へ号)

次のとおり開催した。

会 議 名	開催年月日	参加者数	論文数	場 所	
2024年環境電磁工学国際シンポジウム (EMC Japan/APEMC Okinawa)	2024.5.20～ 5.24	521名	263	沖縄	CS
The 39th International Technical Conference on Circuits/Systems, Computers, and Communications (ITC-CSCC 2024)	2024.7.2～ 7.5	407名	277	Okinawa, Japan	ESS
2024 Asia-Pacific Workshop on Advanced Semiconductor Devices (AWAD2024)	2024.7.8～ 7.9	170	93	Gangneung Korea	ES
International Conference on Electrossmagnetics in Advanced Applications and IEEE-APS Topical Conference on Antennas and Propagation in Wireless Communications (ICEAA-IEEE APWC 2024)	2024.9.2～ 9.6	250	200	Lisboa, Portugal	ES
The 19th International Workshop on Security (IWSEC 2024)	2024.9.17～ 9.19	127名	17	Kyoto, Japan	ESS
2024 International Topical Meeting on Microwave Photonics (MWP2024)	2024.9.17～ 9.20	150	50	Pisa, Italy	ES
29th Micro optics Conference (MOC2024)	2024.9.29～ 10.2	220	150	Kaohsiung, Taiwan, Taiwan	ES
The 2024 International Symposium on Information Theory and Its Applications (ISITA 2024)	2024.11.10 ～11.13	133名	102	Taiwan	ESS
Asia-Pacific Microwave Conference (APMC 2024)	2024.11.17～ 11.20	1000	750	Bali, Indonesia	ES
2024 International Conference on Emerging Technologies for Communications (ICETC 2024)	2024.11.25～ 11.27	207名	148	北九州	CS
The 2024 International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications (NOLTA2024)	2024.12.3～ 12.6	253	201	Ha long Bay, Vietnam	NLS
The 2024 International Workshop on Smart Info-Media Systems in Asia (SISA2024)	2024.12.5～ 12.7	38名	20	Osaka, Japan	ESS
The 30th Asia and South Pacific Design Automation Conference (ASP-DAC2025)	2025.1.20～ 1.23	468名	168	Tokyo, Japan	ESS

### 4. 出版に関する事項(定款 第4条 イ号)

#### 4. 1 和文論文誌の発行状況

電子版を本会サイトにて公開した。掲載総ページ数は1,584ページである。

分 冊	論 文	レター	その他	計	特集回数
	件 数 ページ数	件 数 ページ数	— ページ数	件 数 ページ数	
					回

	12	8		20	
JA	128	36	4	168	2
	43	19		62	
JB	470	70	7	547	4
	40	16		56	
JC	328	52	5	385	3
	42	9		51	
JD	440	36	8	484	4
	137	52		189	
計	1,366	194	24	1,584	13

※その他：巻頭言、正誤

#### 4. 2 英文論文誌の発行状況

電子版を本会サイト及びJ-STAGEにおいて、EBについては、IEEE Xploreでも公開した。掲載総ページ数は4,722ページである。

分冊	論文	レター	その他	計	特集回数
	件数 ページ数	件数 ページ数	ページ数	件数 ページ数	回
EA	134	67		201	8
	1,338	298	10	1,646	
EB	92	0		92	1
	993	0	2	995	
EC	65	19		84	10
	555	77	13	645	
ED	118	50		168	9
	1,208	215	13	1,436	
計	409	136		545	28
	4,094	590	38	4,722	

※その他：巻頭言、正誤

#### 4. 3 電子ジャーナルの発行状況

##### (1)NOLTA ソサイエティ

NOLTA ソサイエティでは、ペーパーレス英文論文誌「Nonlinear Theory and Its Applications, IEICE (略称 NOLTA)」(年4回発行)に68件、973ページを掲載した。

##### (2)通信ソサイエティ

通信ソサイエティでは、ペーパーレス英文論文誌「IEICE Communications Express(略称 ComEX)」(月1回発行)に130件、538ページを掲載した。

##### (3)エレクトロニクスソサイエティ

エレクトロニクスソサイエティでは、ペーパーレス研究速報英文論文誌「IEICE Electronics Express(略称 ELEX)」(月2回発行)に246件、1,424ページを掲載した。

#### 4. 4 ニュースレター、ソサイエティ誌の発行状況

各ソサイエティ及びグループでニュースレター、ソサイエティ誌を下記のとおり発行した。

- (1) 基礎・境界ソサイエティ/NOLTA ソサイエティ Fundamentals Review 4回 307ページ  
(2) 通信ソサイエティ マガジン誌(通信ソサイエティマガジン) 4回 386ページ

(3) エレクトロニクスソサイエティ	ニューズレター	4回	74ページ
(4) 情報・システムソサイエティ	ニューズレター	5回	80ページ
(5) ヒューマンコミュニケーショングループ	ニューズレター (Web)	4回	

## 5. 選奨に関する事項(定款 第4条 ホ号、へ号)

所定の手続きによって選考が進められ、次のとおり各受賞者を決定した。

### 5. 1 基礎・境界ソサイエティ/NOLTA ソサイエティ

#### (1)基礎・境界ソサイエティ

##### (1-1)功労賞

業 績	貢 献 者
2024年暗号と情報セキュリティシンポジウム実行委員長としての貢献	高橋 健太

以上1名

##### (1-2)貢献賞

##### (1-2-1) ソサイエティ運営

業 績	貢 献 者
基礎・境界ソサイエティ「庶務幹事」としての貢献	西浦 敬信
基礎・境界ソサイエティ「会計幹事」としての貢献	古賀 崇了
基礎・境界ソサイエティ「事業担当幹事」としての貢献	新田 高庸
基礎・境界ソサイエティ「大会担当幹事」としての貢献	高野 知佐
基礎・境界ソサイエティ「電子広報担当幹事」としての貢献	荒井 伸太郎
基礎・境界ソサイエティ「論文誌編集幹事」としての貢献	渡邊 洋平
基礎・境界ソサイエティ「ソサイエティ誌担当幹事」としての貢献	小林 孝一

以上7名

##### (1-2-2) 編集

業 績	貢 献 者
論文誌編集委員としての貢献	Yang Yang
論文誌編集委員としての貢献	上原 聡
論文誌編集委員としての貢献	落合 翼
論文誌編集委員としての貢献	白木 善史
論文誌編集委員としての貢献	中條 涉
論文誌編集委員としての貢献	宮崎 亮一
論文誌編集委員としての貢献	余 恪平
論文誌編集委員としての貢献	吉田 隆弘
論文誌編集委員としての貢献	米山 一樹
FR誌編集委員としての貢献	大和田 徹
FR誌編集委員としての貢献	松下 春奈

以上11名

##### (1-2-3) サブソサイエティ運営、研究専門委員会運営

業 績	貢 献 者
システムと信号処理サブソサイエティ及び VLSI 設計技術研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	今井 雅

以上1名

##### (1-2-4) サブソサイエティ運営

業 績	貢 献 者
情報理論とその応用サブソサイエティの運営及び活動に対する貢献	吉田 隆弘

以上 1 名

(1-2-5) 研究専門委員会運営

業 績	貢 献 者
ワイドバンドシステム研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	荒井 剛
安全・安心な生活と ICT 研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	宇津 圭祐
高信頼制御通信研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	加川 敏規
信号処理研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	京地 清介
回路とシステム研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	鈴木 寛人
バイオメトリクス研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	早坂 昭裕
技術と社会・倫理研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	藤井 秀之
情報セキュリティ研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	松田 隆宏
情報理論研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	松田 哲直
ハードウェアセキュリティ研究専門委員会の運営および活動に対する貢献	山本 弘毅
超音波研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	吉澤 晋
スマートインフォメディアシステム研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	吉田 壮
応用音響研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	若山 圭吾

以上 13 名

(1-2-6) 会議運営

業 績	貢 献 者
国際会議 IMQA2024 の運営に対する貢献	魚森 謙也
第 46 回情報理論とその応用シンポジウムの運営に対する貢献	澁谷 智治
国際会議 SISA2023 の運営に対する貢献	仲地 孝之
国際会議 IWSEC2023 の運営に対する貢献	花岡 悟一郎
第 38 回信号処理シンポジウムの運営に対する貢献	林 和則
バイオメトリクスと認識・認証シンポジウム 2023 の運営に対する貢献	村松 大吾

以上 6 名

(1-2-7) その他の事業

業 績	貢 献 者
2024 年暗号と情報セキュリティ小特集号編集幹事としての貢献	花谷 嘉一

以上 1 名

(2) NOLTA ソサイエティ

(2-1) Service Award (貢献賞)

業 績	貢 献 者
Devoted Contribution to Operation of NOLTA Society as A Director, General Affairs	中野 秀洋
Devoted Contribution to Operation of NOLTA Society as A Director, Publicity	松浦 隆文
Devoted Contribution to Editorial Committee of Nonlinear Theory and Its Applications, IEICE, as An Editor	安達 雅春
Devoted Contribution to Operation of 2023 International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications (NOLTA 2023) as A General Co-Chair	Arturo Buscarino
Devoted Contribution to Technical Committee on Nonlinear Problems as A Secretary	伊藤 大輔
Devoted Contribution to Technical Committee on Complex Communication Sciences as A Secretary	宮田 純子

以上 6 名

(3) 基礎・境界ソサイエティ/NOLTA ソサイエティ

Fundamentals Review ベストオーサー賞

論 説	著 者
-----	-----

少量のデータに対する機械学習	赤穂 昭太郎
----------------	--------

以上 1 編

## 5. 2 通信ソサイエティ

### (1) ソサイエティ論文賞

論 文 名	著 者 名
<b>【優秀論文賞】</b> 複数台の光ファイバ給電デバイスの給電及び機能実行のための割当時間算出方法	野添紗希 (NTT) 渡辺汎 (NTT) 大串幾太郎 (NTT)
分散アンテナシステムへの電力供給と制御に関する研究	唐琼顔 (東北大) 山田博仁 (東北大)
大学構内における Wi-Fi の受信信号強度とスマートフォンを用いた屋内位置推定システムの開発	田中空斗 (豊橋技科大) 足立裕基 (豊橋技科大) 小松和暉 (豊橋技科大) 宮路祐一 (豊橋技科大) 上原秀幸 (豊橋技科大)
<b>【チュートリアル論文賞】</b> 後方散乱通信の原理と技術課題	三次仁 (慶大)
<b>【Best Paper Award】</b> A Novel Remote-tracking Heart Rate Measurement Method Based on Stepping Motor and mm-Wave FMCW Radar	Yaokun Hu (Nihon Univ.) Xuanyu Peng (Nihon Univ.) Takeshi Toda (Nihon Univ.)
Cascaded Deep Neural Network for Off-Grid Direction-of-Arrival Estimation	Huafei Wang (Hainan Univ.) Xianpeng Wang (Hainan Univ.) Xiang Lan (Hainan Univ.) Ting Su (Hainan Univ.)
<b>【Best Tutorial Paper Award】</b> Global navigation satellite system precise positioning technology	Nobuaki Kubo (Tokyo Univ. of Marine Sci. and Tech.)
D2EcoSys: Decentralized Digital Twin EcoSystem Empower Co-Creation City-level Digital Twins	Kenji Kanai (The Univ. of Tokyo) Hidehiro Kanemitsu (Tokyo Univ. of Tech.) Taku Yamazaki (Shibaura Inst. of Tech.) Shintaro Mori (Fukuoka Univ.) Aram Mine (GaiaX Co., Ltd.) Sumiko Miyata (Shibaura Inst. of Tech.) Hironobu Imamura (th HAFT Inc.) Hidenori Nakazato (Waseda Univ.)
Multi-band Optical Networking: Recent Advances Toward IOWN All-Photonics Network	Masahiro Nakagawa (NTT) Haruka Minami (NTT) Takafumi Fukatani (NTT) Takeshi Seki (NTT) Rie Hayashi (NTT) Takeshi Kuwahara (NTT)

【ComEX Best Letter Award】 Unmanned Aerial Vehicle-based Virtual Array Channel Sounding System in 4.8 GHz Band	Kentaro Saito (Tottori Univ.) Sora Kojima (Tokyo Denki Univ.)
【マガジン論文賞】 メタバースとWeb3, NFT (非代替性トークン), DAO (分散型自律組織) のリアリティ	斉藤賢爾 (早大) 内田晃秀 (筑波銀行)

以上 11 編

(2) マガジン賞

記 事 名	著 者 名
アンテナ・伝搬研究者の角度から見るメタサーフェスとその向かう先	村田健太郎 (岩手大) 村上靖宜 (電通大) 久世竜司 (熊本大)

以上 1 編

5. 3 エレクトロニクスソサイエティ

(1) ソサイエティ賞

分 野	業 績	貢 献 者
第 1 分野	複合物理計算とウェアラブルデバイス技術の融合による熱中症対策に関する先駆的研究	都甲 浩芳 (NTT デバイスイノベーションセンタ)、高河原 和彦 (NTT デバイスイノベーションセンタ)、小寺 紗千子 (名古屋工業大学)
第 2 分野	光ファイバ無線及びその応用に関する先駆的研究	久利 敏明 (情報通信研究機構)、Pham Tien Dat (情報通信研究機構) 菅野 敦史 (名古屋工業大学)
第 3 分野	超伝導集積回路とその超高効率化に関する先駆者研究	吉川 信行 (横浜国立大学)

以上 3 件

(2) レター論文賞

論 文 名	著 者 名
該当なし	該当なし

以上 1 件

(3) ELEX Best Paper Award

論 文 名	著 者 名
A 41-GHz 19.4-dBm Psat CMOS Doherty power amplifier for 5G NR applications	Zheng Li (Tokyo Institute of Technology) Zixin Chen (Tokyo Institute of Technology) Qiaoyu Wang (Tokyo Institute of Technology) Junqing Liu (Tokyo Institute of Technology) Jian Pang (Tokyo Institute of Technology) Atsushi Shirane (Tokyo Institute of Technology) Kenichi Okada (Tokyo Institute of Technology)
Low-noise balanced mixer for 300-GHz band based on Fermi-level managed barrier diode on SiC platform	Hiroshi Ito (The University of Tokyo) Yuma Kawamoto (Osaka University) Takahiro Ohara (Osaka University) Tadao Nagatsuma (Osaka University) Tadao Ishibashi (Wavepackets LLC)

以上 2 件

(4) 招待論文賞

論 文 名	著 者 名

Design and Integration of Beyond-10MHz High Switching Frequency DC-DC Converter	Kousuke MIYAJI (Shinshu University)
---	-------------------------------------

以上 1 件

(5) エレクトロニクスソサイエティ学生奨励賞

2024 年総合大会 (2024 年 3 月)

分 野	講 演 者
電磁波理論およびマイクロ波分野	大島 夕侑 (京都大学) 内田 莉緒 様 (中央大学)
光半導体及びフォトニクス分野	中澤 遼太郎 (横浜国立大学) 銭 程遠 (九州大学)
回路およびエレクトロニクス分野	増澤 俊輝 (静岡大学) 前田 真晴人 (東京工業大学)

以上 6 名

2024 年ソサイエティ大会 (2024 年 9 月)

分 野	講 演 者
電磁波理論およびマイクロ波分野	伊藤 辰弥 (芝浦工業大学) 児山 諒 (東京都立大学)
光半導体及びフォトニクス分野	貝出 凌汰 (九州大学) 川上 真裕 (東京工業大学)
回路およびエレクトロニクス分野	岡崎 幸也 (静岡大学) 工藤 晴世 (信州大学)

以上 6 名

5. 4 情報・システムソサイエティ

(1)ソサイエティ論文賞

論 文 名	著 者 名
該当なし	

(2)功労賞

(2-1)活動功労賞

業 績	貢 献 者
英文論文誌編集委員としての貢献	深山 正幸 (金沢大)
英文論文誌編集委員としての貢献	片山 喜章 (名工大)
和文論文誌編集委員としての貢献	齋藤 大輔 (東大)
和文論文誌編集委員としての貢献	米川 輝 (NEDO)
ソサイエティ誌編集幹事・編集委員としての貢献	大沼 亮 (津田塾大)
画像工学研究専門委員会活動への幹事補佐・幹事としての貢献	海野 恭平 (KDDI 総研)
マルチメディア情報ハイディング研究専門委員会副委員長としての貢献	藪田 光太郎 (長崎大)
コンピュータシステム研究専門委員会幹事・幹事補佐, 英文論文誌 D 特集号編集長・編集幹事としての貢献	高前田 伸也 (東大)

以上 8 名

(2-2)査読功労賞

業 績	貢 献 者
論文誌査読委員としての貢献	坂上 文彦 (名工大)
論文誌査読委員としての貢献	白井 清昭 (北陸先端大)
論文誌査読委員としての貢献	高橋 桂太 (名大)

論文誌査読委員としての貢献	高前田 伸也 (東大)
論文誌査読委員としての貢献	中田 明夫 (広島市大)
論文誌査読委員としての貢献	永田 昌明 (NTT)
論文誌査読委員としての貢献	船富 卓哉 (奈良先端大)
論文誌査読委員としての貢献	宮寺 庸造 (東京学芸大)
論文誌査読委員としての貢献	村松 正吾 (新潟大)
論文誌査読委員としての貢献	山崎 俊彦 (東大)

以上 10 名

## 5. 5 FITの各賞

(情報・システムサイエティ及びヒューマンコミュニケーショングループと情報処理学会との合同)

### (1)船井業績賞

業 績	受 賞 者
Responsible Adaptation of Large Generative AI Models for Domain Specific Learning	Ling Li (Georgia Institute of Technology)

以上 1 件

### (2)船井ベストペーパー賞

論 文 名	受 賞 者
一次関数に対する合成順と行列の積順	久保 奨 (公立鳥取環境大) 牧野和久 (京大)・坂本 壮太 (Acompany)
明視野顕微鏡による観察画像を用いた無染色標本からの疑似 Masson's trichrome 染色	吉岡 佳音・篠田 一馬 (宇都宮大)
カーネルデータ監視による特権昇格攻撃検出手法の提案と評価	葛野 弘樹 (神戸大)・山内利宏 (岡山大)

以上 3 編

### (3)FIT 論文賞

論 文 名	受 賞 者
マルチメトリック空間における効率的な近似最近傍探索	植村 玲央・天方 大地・原 隆浩 (阪大)
二人零和マルコフゲームにおける状態抽象化法に関する研究	石橋 宙希・岩崎 敦 (電通大)・阿部 拳之 (サイバーエージェント)
値域フーリエ級数展開による冗長ウェーブレット変換	林 晃平・本田 宗一朗・亀井 宏和・福嶋 慶繁 (名工大)・前田 慶博 (芝浦工大)
薬剤耐性のパンデミックにつながる社会的ジレンマの観測と国際比較	伊東 啓・吉村 仁・山本 太郎 (長崎大)・和田 崇之 (阪公大)・一ノ瀬 元喜・守田 智 (静岡大)・谷本 潤 (九大)
3次元点群データによる仮想空間表現のユーザ体感品質分析に関する検討	榎 優一・阿部 直人・望月 崇由 (NTT)
LED サーカディアン照明を用いた VLP (Visible Light Positioning) システム用光 ID の評価	坂根 頌梧・大柴 小枝子 (京都工繊大)
業務モデルの基本フローを意識した罹災証明書交付プロトタイプシステムの開発と実装?令和 6 年能登半島地震における氷見市を事例として	井ノ口 宗成 (富山大)

(4)FIT ヤングリサーチャー賞

論文名	受賞者
高位合成を用いて記述した FPGA 上の倍精度浮動小数点演算器の論理合成最適化と性能評価	周東 裕也 (広島市立大)
日本語 LLM の Prompt Tuning による著者識別	櫻井 航 (科学警察研)
登山の到着時刻推定タスクにおける深層学習手法の適用と評価	浅古 瑞穂 (電通大)
背景閾値を用いない弱教師あり領域分割のための背景 Activation Map の最適化	藤森 和泉 (徳島大)
映像中の人物の手と物体のインタラクション検出	小西 陸斗 (東北大)
行政 DX のための検索拡張生成システムの開発	川島 壮生 (名工大)
ダークネットに対するネットワークスキャナの判別手法の比較	鹿内 嵩天 (東北工大)
大規模イベントにおける疑似観測データを用いた観測データ量の十分性評価	櫻井 舜 (北大)
プログラミングの実習における学生のプログラムの題意と異なる実装の傾向調査と一考察	杉田 基樹 (明治大)

以上9名

5. 6 ヒューマンコミュニケーショングループ

(1)ヒューマンコミュニケーション賞

研究会名	業績	受賞者
HCS	1歳時点での語彙に着目した自閉スペクトラム特徴の予測～機械学習を用いた検討～(HCS2024-46)	蔵内雄貴・樋口大樹・篠原亜佐美・小林哲生 (NTT)・西村倫子・岩渕俊樹・土屋賢治 (浜松医科大)
HCS	ロボットが見ている～5歳児はロボットとの交流後に自身の評判を気にする～(HCS2024-1)	奥村優子・服部正嗣・藤田早苗・小林哲生 (NTT)
HIP	質感の要素知覚メカニズムの独立性の検討(HIP2023-86)	吉田圭吾・清川宏暁・栗木一郎 (埼玉大)
MVE	バーチャルリアリティ技術を活用したドラマセラピーに関する研究～セッション内容の検討と分析～(MVE2023-105)	松田頼子・平尾悠太郎・ペルスキア エルナンデス モニカ・内山英昭・清川 清 (奈良先端大)
MVE	ゆったりとした衣服を着用した人物の姿勢推定～HFRカメラと複数 LED を用いた学習データ作成～(MVE2023-32)	山口貴善・三上 弾 (工学院大)・松村聖司・西條直樹・柏野牧夫 (NTT)
WIT	環境音認識によりインタラクティブにオノマトペを表示する AR 擬音語学習システム(WIT2023-40)	有隅惟人・平尾悠太郎・ペルスキアエルナンデス モニカ (奈良先端大)・磯山直也 (大妻女子大)・内山英昭・清川 清 (奈良先端大)

以上6件

(2)HCG シンポジウム賞

LLM を用いた研究論文の対話形式ポッドキャストへの変換システム PaperWave の開発【最優秀インタラクティブ発表賞】	矢作優知・中條麟太郎 (東大)・原田 悠 (EduceTechnologies)・韓 燦 教・杉山昂平・苗村健 (東大)
話者と言語による音声距離感の認識比較：物理的“距離感”は普遍的か？【最優秀インタラクティブ発表賞】	村上 遥 (玉川大)
会話能力が低下した認知症当事者の発話断片にもとづく人生物語分析【最優秀インタラクティブ発表賞】	徳永弘子・井原雅行 (理研)・中島知巳 (理研/やまなみ介護生)

	活)・後藤裕基(理研/医療法人明輝会)・梅崎優貴(理研/社会医療法人親仁会)・港 隆史・中村 泰(理研)・猿渡進平(理研/白川病院)・江川陽子(理研/大牟田市立病院)・久野真矢(理研/県立広島大)
聞き上手な生成 AI は学習者の興味も生成する【最優秀インタラクティブ発表賞】	高嶋魁人・大竹裕香・山田祐樹(九大)
ダンス構成を条件指定可能な音楽に合わせたダンス生成技術【最優秀インタラクティブ発表賞】	石井 亮・永徳真一郎・伏尾佳悟・松尾翔平(NTT)
ブルブルン...「おっ、前に動いてる!」:光学的流動の触覚的表現【優秀インタラクティブ発表賞】	下川隼輝, 戸塚海太・武川直樹・森田慎一郎・小林春美・東孝文・中村明生(東京電機大)
バイオフィードバックを用いた瞑想支援システム【優秀インタラクティブ発表賞】	松本朋己・常盤達司(広島市大)
14ヶ月における模倣能力が8歳時点での適応を予測する～浜松母と子の出生コホートによる縦断的検討～【優秀インタラクティブ発表賞】	近藤みゆき・篠原亜佐美・樋口大樹・小林哲生(NTT)・西村倫子・岩渕俊樹・土屋賢治(浜松医科大)
対話者の視線行動を対象とした相互作用機能スペクトラムの分析【優秀インタラクティブ発表賞】	田代絢子・田嶋桃佳(横浜国大)・熊野史朗(NTT)・大塚和弘(横浜国大)
聴衆の行動指標によるプレゼンテーション評価手法の開発【優秀インタラクティブ発表賞】	今村豪志・中澤篤志・平塚宏明(岡山大)
個人的体験を組み込んだLLMによる人間らしい集団会話ロボット【学生優秀インタラクティブ発表賞】	橋谷柊哉・中澤篤志・甲 聡太(岡山大)
視線情報に基づくユーザの嗜好と関心領域の推定のための深層学習モデルの検討【学生優秀インタラクティブ発表賞】	常田優人・原 章・梶山朋子(広島市大)
ディストラクション効果を用いた吃音者向け発話支援装置の開発【学生優秀インタラクティブ発表賞】	山本巧真・田中文英(筑波大)
メンタルヘルスケアを目的としたオープンダイアログ形式のチャットボットの提案【学生優秀インタラクティブ発表賞】	船越舞斗・畑田裕二・ハウタサーリアリ・苗村 健(東大)
リズム運動の揺らぎに関わる脳ネットワーク・個人特性の解明【学生優秀インタラクティブ発表賞】	片桐 拓・川崎真弘(筑波大)

以上 15 件

## 6. 研究会等に関する事項(定款 第4条 ロ号、ハ号)

### 6. 1 基礎・境界ソサイエティ/NOLTA ソサイエティ

研究専門委員会が下記研究会を開催した。

第一種研究会 : 103 回 また、第二種研究会を開催した。

第一種研究会活動状況

研究会名	専門委員長名	研究会開催数	発表件数
回路とシステム	篠宮 紀彦	5	128
情報理論	野上 保之	4	120
信頼性	門田 靖	8	46
超音波	工藤 すばる	9	84
応用音響	小野 順貴	6	158
非線形問題	丹治 裕一	6	140
VLSI 設計技術	桜井 祐市	4	134
情報セキュリティ	四方 順司	4	193

信号処理	市毛 弘一	5	1 1 7
ワイドバンドシステム	落合 秀樹	4	1 1 3
システム数理と応用	山口 真悟	4	4 8
思考と言語	坪田 康	5	1 2 3
技術と社会・倫理	辰己 丈夫	5	1 0 5
ITS	高取 祐介	5	6 1
スマートインフォメディアシステム	笹岡 直人	4	9 0
イメージ・メディア・クオリティ	工藤 博章	5	1 2 2
高信頼制御通信	石井 光治	4	1 0 5
バイオメトリクス	高野 博史	4	6 1
複雑コミュニケーションシエンス	中野 秀洋	4	1 1 1
安全・安心な生活と ICT	大塚 晃	4	1 5 4
ハードウェアセキュリティ	林 優一	4	7 1
合計		1 0 3	2, 2 8 4

## 6. 2 通信ソサイエティ

研究専門委員会が下記研究会を開催した。

第一種研究会：136回 また、第二種研究会、第三種研究会を開催した。

第一種研究会活動状況

研究会名	専門委員長名	研究会開催数	発表件数
アンテナ・伝播	榊原 久二男	1 1	2 4 2
宇宙・航行エレクトロニクス	若山 俊夫	5	7 1
衛星通信	亀井 雅	5	7 9
環境電磁工学	田島 公博	9	1 1 4
ネットワークシステム	三好 匠	1 0	2 7 9
情報ネットワーク	村瀬 勉	6	1 4 0
コミュニケーションシステム	小崎 成治	7	8 3
電子通信エネルギー技術	関屋 大雄	5	2 9
光通信システム	小林 孝行	8	7 2
無線通信システム	眞田 幸俊	1 0	3 0 0
コミュニケーションクオリティ	平栗 健史	6	1 1 5
フォトニックネットワーク	塩本 公平	6	9 0
光ファイバ応用技術	椎野 雅人	8	1 2 4
情報通信マネジメント	大石 晴夫	5	5 9
インターネットアーキテクチャ	秋山 豊和	8	1 0 3
スマート無線	田久 修	5	1 3 2
短距離無線通信	水谷 圭一	5	7 5
ヘルスケア・医療情報通信技術	杉本 千佳	5	7 2
無線電力伝送	伊東 健治	7	6 6
センサネットワークとモバイルインテリジェンス	門田 和也	5	9 3
合計		1 3 6	2, 3 3 8

## 6. 3 エレクトロニクスソサイエティ

研究専門委員会が下記研究会を開催した。

第一種研究会：83回 また、第二種研究会を開催した。

第一種研究会活動状況

研究会名	専門委員長名	研究会開催数	発表件数
機構デバイス	福田 直紀	4	4 5
磁気記録・情報ストレージ	仲村 泰明	4	3 7

超伝導エレクトロニクス	三木 茂人	3	15
電子ディスプレイ	神原 誠之	4	8
電子デバイス	葛西 誠也	7	81
電子部品・材料	中澤 日出樹	7	93
電磁界理論	川口 秀樹	4	109
シリコン材料・デバイス	宇佐美 達矢	8	77
マイクロ波	大久保 賢祐	10	197
集積回路	池田 誠	5	131
有機エレクトロニクス	伊東 栄次	8	57
光エレクトロニクス	柳生 栄治	6	132
レーザ・量子エレクトロニクス	山口 敦史	5	69
エレクトロニクスシミュレーション	君島 正幸	4	122
マイクロ波テラヘルツ光電子技術	加藤 和利	4	97
合計		83	1,270

#### 6.4 情報・システムソサイエティ

研究専門委員会が下記研究会を開催した。

第一種研究会：110回 また、第二種研究会を開催した。

第一種研究会活動状況

研究会名	専門委員長名	研究会開催数	発表件数
ME とハイサイバネティクス	植野 彰規	7	47
ライフインテリジェンスとオフィス情報システム	茂木 学	6	91
画像工学	坂東 幸浩	5	168
言語理解とコミュニケーション	小早川 健	3	30
コンピュータシステム	中島 耕太	4	61
コンピューテーション	牧野 和久	5	33
人工知能と知識処理	藤田 桂英	3	22
ソフトウェアサイエンス	肥後 芳樹	4	80
データ工学	豊田 正史	3	16
パターン認識・メディア理解	柏野 邦夫	4	63
デバイスナブルコンピューティング	細川 利典	7	192
ニューロコンピューティング	井澤 淳	4	89
知能ソフトウェア工学	田辺 良則	5	55
音声	篠崎 隆宏	4	99
教育工学	小尻 智子	9	97
医用画像	原口 亮	4	82
ソフトウェアインタラクションモデリング	林 章浩	4	27
リコフィギャブルシステム	山口 佳樹	5	132
情報通信システムセキュリティ	井上 大介	4	123
情報論の学習理論と機械学習	神嶋 敏弘	3	67
マルチメディア情報ハイディング・エンリッチメント	新見 道治	6	136
クラウドネットワークロボット	西川 由理	3	36
サービスコンピューティング	中口 孝雄	4	50
合意と共創	伊藤 孝行	4	20
合計		110	1,816

#### 6.5 ヒューマンコミュニケーショングループ

研究専門委員会が下記研究会を開催した。

第一種研究会：21回 また、第二種研究会及び第三種研究会を開催した。

第一種研究会活動状況

研究会名	専門委員長名	研究会開催数	発表件数
ヒューマンコミュニケーション基礎	林 勇吾	5	126
ヒューマン情報処理	清河 幸子	6	91
メディアエクスペリエンス・バーチャル環境基礎	新井田 統	5	107
福祉情報工学	塩野目 剛亮	5	40
合計		21	364

## 7. ソサイエティ及びグループ会員に関する事項(定款 第3章)

各ソサイエティ及びグループにおける会員数は次のとおりである。

[ ]内はフェロー会員数 (ESSにNLSも含む)

	ESS	CS	ES	ISS	NLS	HCG	合計
2023年度末 登録数	4,261	8,333	4,338	8,271	363	720	26,386
	<b>【165】</b>	<b>【322】</b>	<b>【185】</b>	<b>【279】</b>	-	-	<b>【951】</b>
2024年度末 登録数	4,181	8,295	4,291	8,129	389	809	26,511
	<b>【154】</b>	<b>【334】</b>	<b>【180】</b>	<b>【284】</b>	-	-	<b>【952】</b>
前年度との差	-80	-38	-47	-142	26	89	125
	<b>【-9】</b>	<b>【12】</b>	<b>【-5】</b>	<b>【5】</b>	-	-	<b>【1】</b>

注) ESS：基礎・境界ソサイエティ  
 CS：通信ソサイエティ  
 ES：エレクトロニクスソサイエティ  
 ISS：情報・システムソサイエティ  
 NLS：NOLTAソサイエティ  
 HCG：ヒューマンコミュニケーショングループ

### Ⅲ. 支部事業

#### 1. 北海道支部

2024 年度は、支部連合大会、各講演会等の毎年実施してきて効果的な事業、学生会発表研究会の開催など当支部独自の事業を継続して行い、最大限の会員サービスに努めた。

##### 1-1 事業概要

2024 年度の諸事業は年度当初の計画に沿って以下のとおり実施した。

###### 1-1-1 一般事業（定款 第 4 条 ロ号）

- ア. 講演会：1 件開催した。（北見工業大学）
- イ. 支部連合大会：電気・情報関係学会で組織された連合大会を 1 回開催した（一般講演数 158 件、参加者数 302 名）。北海道大学
- ウ. 専門講習会：5 名の講師を招へいし、「データサイエンス活用セミナー」として講習会を開催した（参加者数 52 名）。
- エ. 総務省北海道総合通信局と電子情報通信学会北海道支部との意見交換会（参加者数：32 名）

###### 1-1-2 教育事業（定款 第 4 条 ホ号）

- ・応用物理学会が企画した主に小中高生を対象としたイベント（「リフレッシュ理科教室」サイエンス・オリエンテーリング in 札幌 2024）を共同主催した（参加者数：117 名）。
- ・リフレッシュ理科教室(北科大会場)、ロボットトライアスロン 2024 を後援した。

###### 1-1-3 学生会事業（定款 第 4 条 ロ号、へ号）

- ア. 学生会主催講演会：3 件開催した。（北見工業大学 室蘭工業大学 公立はこだて未来大学）
- イ. 学生会研究発表会：インターネット上で論文発表を行うインターネットシンポジウムを 1 回開催した（発表件数 35 件）。
- ウ. 室蘭工業大学学生ランチ活動として、講演会を開催。支部連合大会にて IEEE 北海道大学・室蘭工業大学 Student Branch とともに学生交流会を企画した。

##### 1-2 選奨（定款 第 4 条 ホ号）

###### 1-2-1 2024 年度北海道支部学生奨励賞

北海道支部における学生奨励賞の選奨細則に基づき以下の 13 名を選定(推薦 7 名、公募 6 名)し、2025 年 3 月に賞状と副賞を贈呈した（順不同、敬称略）。

氏名	所属
中山 翔太	北海道大学 大学院情報科学院 システム情報科学コース
岡村 洋希	北海道大学 大学院情報科学院 メディアネットワークコース
明野 樹紀	北海道大学 大学院情報科学院 情報エレクトロニクスコース
清野 竜生	北海道大学 大学院情報科学院 メディアネットワークコース
菊池 夏	北海道大学 大学院情報科学院 メディアネットワークコース
藤後 太郎	北海道大学 大学院情報科学院 メディアネットワークコース
辰巳 祥平	北海道大学 大学院情報科学院 情報エレクトロニクスコース
岡本 一志	北海道科学大学 大学院工学研究科 情報工学専攻
中島 大地	北見工業大学 大学院工学研究科 工学専攻 機械電気工学プログラム
大野 雅浩	北見工業大学 大学院工学研究科 工学専攻 情報通信工学プログラム
平井 完弥	室蘭工業大学 大学院工学研究科 生産システム工学系専攻
平尾 勇晴	室蘭工業大学 大学院工学研究科 情報電子工学系専攻
李 聖博	室蘭工業大学 大学院工学研究科 情報電子工学系専攻

###### 1-2-2 2024 年度北海道支部学生会インターネットシンポジウム優秀発表賞

インターネットシンポジウム優秀発表賞細則に基づき以下の 3 名を選定し、2025 年 3 月に賞状と副賞を贈呈した（順不同、敬称略）。

氏名	所属	講演題目
北原 琉乃	北海道大学	In vitro 小型圧電性超音波トランスデューサーが誘発する局所神経活動の特徴解析 - 聴覚皮質における神経活動変調の機序解明を目指して -
小池 岳人	室蘭工業大学	線形媒質で構成される光論理ゲートのトポロジー最適設計に関する研究
榊 遥花	北海道大学	VGG16 を用いたスケートボード走行音検知システムへのマルチコンディション学習適用による雑音ロバスト性向上

\* 北海道支部学生ランチ顧問表彰（発表賞）

氏名	所属	氏名	所属
飯田 雄一	北見工業大学	後藤 輝良	旭川工業高等専門学校
齋藤 涼太	室蘭工業大学	西川 晴紀	北見工業大学
船木 聖仁	旭川工業高等専門学校	安丸 紗里杏	北海道教育大学函館校

1-2-3 2024 年度学生ランチ活動貢献賞

北海道支部における学生ランチ活動貢献賞細則に基づき以下の 1 名を選定し、2024 年 3 月に賞状と副賞を贈呈した（順不同、敬称略）。

氏名	所属
松崎 泰輝	室蘭工業大学 大学院工学研究科 情報電子工学系専攻

1-2-4 2024 年度電気・情報関係学会北海道支部連合大会若手優秀論文発表賞

2024 年度電気・情報関係学会北海道支部連合大会における若手発表を対象として、若手優秀論文発表賞選考委員会において選考を行い、以下の 10 名を受賞者として選定、賞状と副賞を贈呈した（順不同、敬称略）。

氏名	所属	氏名	所属
砂井 啓希	北海道大学	井戸 智斗志	公立ほこだて未来大学
古御堂 隼人	北海道大学	脇 修平	北海道大学
泉澤 奏良	北海道大学	中山 翔太	北海道大学
早川 楓	北海道大学	中島 佑	北海道大学
太齊 蓮	北海道大学	上杉 健大	北海道大学

2. 東北支部

2024 年度は、事業計画に基づき以下の各事業を実施した。また、支部運営委員による事業活性化ワーキンググループを設置して、ジュニア向け事業・地域活性化施策・広報の充実等を重点テーマとして一層の事業充実のための検討を継続して行っている。

2-1 事業概要

2-1-1 一般事業（定款 第 4 条 ロ号）

- ア. 講演会を 16 件（ハイブリッド 1 件、対面 15 件）実施した。
- イ. 学生と地域企業によるパネルディスカッションを 2 件（ハイブリッド 2 件）実施した。
- ウ. 電気関係学会東北支部連合大会を 1 件実施した。
- エ. 協賛・後援事業を 3 件実施した。

2-1-2 教育事業（定款 第 4 条 ロ号、へ号）

小中校生向け事業を 3 件（共催）実施した。

2-1-3 学生会事業（定款第 4 条ロ号、へ号）

東北大学に学生ランチを設置し活動を行った。

2-2 選奨（定款 第 4 条 ホ号）

2-2-1 学生優秀論文賞について、表彰規程に基づいて次の通り表彰した（五十音順、敬称略）。

氏名	所属	講演題目
金子 雄輝	東北大学	サイドチャンネル情報に基づくマイクロコントローラの経年劣化判別手法とその評価
増山 啓太	秋田県立大学	PEDOT/PSS を用いた THz 波液晶ビームステアリングデバイス

2-2-2 学生優秀発表表彰について、表彰規程に基づいて次の通り表彰した（五十音順、敬称略）。

氏名	所属	講演題目
新谷 聡基	東北大学	ファントム実験系におけるネットワークアナライザによる正弦変位振幅計測法の安定化に関する検討
大和 紀仁	東北工業大学	浮体式洋上風力発電用円筒コンクリート構造物を用いた海水中電磁波分布特性の解析

2-2-3 優秀学生表彰について、表彰規程に基づいて次の通り表彰した（五十音順、敬称略）。

氏名	所属	氏名	所属
阿部 拓夢	鶴岡工業高等専門学校	白井 海音	東北工業大学
大川 柊音	日本大学	曾根 綾人	秋田大学
大竹 梨湖	山形大学	竹村 都	東北大学
小澤 勇人	岩手大学	仁平 智也	東北文化学園大学

熊野 創太	八戸工業高等専門学校	早藤 史明	会津大学
小番 涼音	秋田県立大学	法靈崎 真琉	岩手県立大学
後藤 理沙	秋田工業高等専門学校	三冨 優槻	仙台高等専門学校
今野 優雅	仙台高等専門学校	茂木 大樹	東北学院大学
斉藤 旭晟	弘前大学	柳沼 孝太	福島工業高等専門学校
佐藤 颯	一関工業高等専門学校	山田 将統	医療創生大学
沢田 優斗	八戸工業大学	山田 龍平	東北大学

2-2-4 感謝状贈呈規定に基づき、東北地区若手研究者研究発表会にて座長を務めた学生に対し次の通り感謝状を贈呈した（五十音順、敬称略）

氏名	所属	氏名	所属
大窪 優希	東北工業大学	鈴木 皓雅	山形大学
加賀 琉生海	東北学院大学	丹野 圭吾	東北学院大学
片山 涼雅	山形大学	二瓶 脩大	東北工業大学
栗原 大地	東北学院大学	舟山 文隆	東北工業大学
栗原 義人	東北学院大学	大和 紀仁	東北工業大学
小萩澤 隆也	東北工業大学		

2-2-5 感謝状贈呈規定に基づき、次の通り功労感謝状を贈呈した（五十音順、敬称略）

氏名	所属	事由
菊池 仁	NTT-ME	支部運営委員会の構成員を長きにわたり務めその職責を十分に果たし支部運営に貢献した功績

### 3. 東京支部

前年度のコロナによる社会活動の規制緩和による東京支部活動再開の流れを継続し、2024年度は会員向けサービスを本格的にコロナ前の状態に戻していくことに注力した。また、オンライン/ハイブリッド開催など、コロナ後の最適なイベント開催方法を模索しながら活動を進めた。本部と連携した企業イニシアティブシンポジウムをはじめとする各種シンポジウムや見学会を実施した。また、本年度あらたな教育事業として女子中高生とその保護者に向けたイベント（2025年5月実施予定）を企画した。これらの活動は、来年度も継続実施の予定である。

#### 3-1 事業概要

2024年度の諸事業は、年度当初の計画に沿ってそれぞれ実施した。

##### 3-1-1 一般事業（定款 第4条 ロ号）

最新の研究開発動向を紹介するシンポジウム企画に加え、企業イニシアティブ活動と連携した第3回企業イニシアティブ活動シンポジウムを開催した。シンポジウムは開催状況に応じてオンライン/ハイブリッドのいずれかを採用し、シンポジウム（3回）、見学会（4回：うち1回は2025年5月開催予定）、地域イベント（1回）を企画/開催し、大変盛況であった。

##### 3-1-2 教育事業（定款 第4条 ロ号、へ号）

東京支部地域内の学校、企業、NPOなどと連携し、共同主催の教育イベントの公募を行い、6件を採択し、6件とも現地開催にて実施した。また、女子中高生とその保護者に向けたイベントを企画し、2025年5月に開催予定である。

##### 3-1-3 学生会事業（定款 第4条 ロ号、へ号）

- ・講演会（1回）、見学会（1回）を開催し参加者の知識の向上に役立ち大変有意義であった。
- ・当支部学生会活動のPRの一環として、学会誌12月号「学生会だより」の記事を執筆した。
- ・学生員の卒業研究論文及び修士論文の紹介、また最近行っている研究の紹介のための研究発表会を3月1日にオンラインにて開催した。本年度の発表件数は103件であった。（うちジュニア会員は16件）。
- ・学生ランチの4校が子供科学実験教室、委員会、交流会等を実施した。

#### 3-2 選奨に関する事項（定款 第4条 ホ号）

##### 3-2-1 2024年度東京支部学生奨励賞

東京支部学生奨励賞・ジュニア奨励賞選奨規程に基づき、下記9名を選定し贈呈した。（五十音順、敬称略）

氏名	所属	氏名	所属
天津 瑠斐	電気通信大学	五井野珠琉	東京電機大学
磯崎 太一	群馬大学	坂本 匠杜	東京工芸大学
枝廣 勇希	群馬大学	澤海 洋人	芝浦工業大学
大久保颯人	芝浦工業大学	東出 桐英	東京農工大学

窪田 和洋	明星大学		
-------	------	--	--

### 3-2-2 2024年度東京支部ジュニア奨励賞

東京支部学生奨励賞・ジュニア奨励賞選奨規程に基づき、下記2名を選定し贈呈した。(五十音順、敬称略)

氏名	所属
高橋 昂汰	群馬工業高等専門学校
武田 和樹	東京都立産業技術高等専門学校

### 3-2-3 2024年度東京支部学生功労賞

東京支部学生功労賞選考方針に基づき、下記3名を選定し贈呈した。(五十音順、敬称略)

役職	氏名	所属
学生会委員	井口 創太	群馬大学
学生会委員	小島 侑大	拓殖大学
学生会委員	佐藤 洋伸	千葉工業大学

## 4. 信越支部

2024度は、信越地区の会員への貢献、地域に対する社会的責務としての活動の点で、コロナ禍以来数年ぶりとなる対面での支部大会、講演会等のイベントを企画、実施、支援した。長野県、新潟県内における学会活動の活性化や学生会活動の更なる強化を促進するため、昨年創設した信越支部優秀論文発表賞を継続し学生選奨における新たな基盤を確立した。

### 4-1 事業概要

2024度の諸事業は年度当初の計画を変更し、下記のようにそれぞれ実施を行った。

#### 4-1-1 一般事業（定款 第4条 ロ号）

- ・支部大会（1回、発表件数139件）を新潟大学にて対面で開催した。信越支部からの参加者を中心に、電子情報通信に関する情報交換及び議論の場として役立った。
- ・講演会は2回開催。（新潟地区0回、長岡地区0回、長野地区2回）電子情報通信に関する先端的な知識の向上に役立った。

#### 4-1-2 学生会事業（定款 第4条 ロ号、へ号）

- ・研究交流会：本支部の主催するもの3回（新潟大・信州大学・公立諏訪東京理科大学）を行った。学生会員の交流促進、学生自身の電子情報通信技術に対する意識の向上に役立った。

### 4-2 選奨に関する事項（定款 第4条 ホ号）

信越支部内における研究活動を評価し表彰した。

#### 4-2-1 2024年度信越支部学生奨励賞

選奨規程に基づき下記の10名を選定し贈呈した。（順不同、敬称略）

氏名	所属	講演・研究題目
伊藤 遼	新潟大学	画像解像度削減が洋ナシ外観汚損検出精度へ及ぼす影響
富樫 優太	長岡技術科学大学	足先伸縮型左右揺動ロボットの数理モデルの提案
信賀 一晟	長岡技術科学大学	車いすユーザーを対象とした輪投げ台の評価
山田 隼大	信州大学	YOLOv8を用いた白内障手術における瞳孔トラッキングの検討
秋葉 祐二	信州大学	可視光 PORC-OFDM システムにおける PAPR 特性及び距離特性の評価
佐藤 律希	信州大学	PORC-OFDM システムにおけるスループット特性の理論解析
羽鳥 駿久	新潟工科大学	磁界方式人体通信による心電活動の計測と通信時の評価
阿部 由弥	新潟工科大学	公共施設における非常用電源及び電気自動車の活用に関する研究
青山 周平	公立諏訪東京理科大学	急激変動追従型 XGBoost による生産数予測
武井 啓矩	公立諏訪東京理科大学	端末移動を考慮した Wi-SUN システムにおけるマルチホップ経路選択法の検討

#### 4-2-2 2024年度信越支部高専学生奨励賞

選奨規程に基づき下記の4名を選定し贈呈した。（順不同、敬称略）

氏名	所属	講演・研究題目
----	----	---------

小林 陸駿	長岡工業高等専門学校	監視業務補助を目的とした 異常事態検出システムの検討
入倉 愛梨	長岡工業高等専門学校	高演色白色 LED 用リン酸塩 Sr-Ca 系赤色蛍光体の原子濃度制御に関する研究
牧内 武	長野工業高等専門学校	聴覚障害者のための深層学習を用いた警告音通知システムの開発
赤塚 優輝	長野工業高等専門学校	ミアンダ構造を有する信号線路で生じるクロストークの時間 一周波数領域評価

#### 4-2-3 2024 年度信越支部優秀論文発表賞

選奨規程に基づき下記の 6 名を選定し贈呈した。(順不同、敬称略)

氏名	所属	講演・研究題目
大西 翔太	信州大学	多目的進化アルゴリズムによる労働人員配置における動的最適化の検討
小笠原 光杜	信州大学	立方体オブジェクトを用いた 3D グラフ操作システム
安藤 海翔	信州大学	知識グラフを用いた推薦の有効性の検証
黒飛 翔	信州大学	色覚アクセシビリティ向上を目的とする Android アプリケーションの開発
小林 智希	新潟大学	PolSAR データの観測バンドによる市街地の角度推定誤差について
渡邊 雄大	信州大学	8QAM/OFDM におけるビット誤り率の理論解析

#### 4-2-4 2024 年度信越支部ベストプラクティス賞

選奨規程に基づき下記の研究室を選定し贈呈した。

順位	所属
1 位	新潟大学工学部知能情報システムプログラム 波動情報研究室 (山田研究室)
2 位	新潟大学工学部知能情報システムプログラム スマートライフ研究室 (山崎研究室)
2 位	信州大学 工学部 電子情報システム工学科 田久研究室

### 5. 東海支部

2024 年度は、昨年に引き続き定例会議はオンラインを利用しての意見交換をしつつ、講演会等はコロナ禍前のように現地開催を積極的に進めた。

#### 5-1 事業概要

2024 年度の諸事業は年度当初の計画に沿ってそれぞれ実施した。

##### 5-1-1 一般事業 (定款 第 4 条 ロ号)

講演会 (2 回 参加者合計 73 名) を現地開催 2 回、専門講習会 (1 回 参加数 15 名) を現地開催した。また、今年度も、電気電子情報工学分野への女性進学を後押しする趣旨の女子学生向けイベント (参加者 46 名) をオンライン開催した。コロナ禍で中止が続いていた一般見学会を 5 年ぶりに開催した。(参加者 10 名)

##### 5-1-2 学生会事業 (定款 第 4 条 ロ号)

講演会 (3 回、参加者数 307 名)、学生研究発表会 (2 回、参加者合計 244 名) は、学生の知識向上、学会活動の宣伝、他校学生間交流に役立ち有意義であった。卒業研究発表会は 2024 年度も現地開催し、発表件数は 73 名、参加者は 109 名であった。

##### 5-1-3 その他 (定款 第 4 条 ロ号)

電気・電子・情報関係学会東海支部連合大会 (参加者 465 名) を 8 学会で開催し、主担当学会として大会運営を実施した。

#### 5-2 選奨に関する事項 (定款 第 4 条 ホ号)

##### 5-2-1 2023 年度 東海支部学生研究奨励賞

学生研究奨励賞選奨規程に基づき下記の 23 名を選定し、2024 年 6 月に表彰した。  
(氏名五十音順)

氏名	所属 (2024 年 3 月現在)	研究テーマ
■高専/学部		
伊佐地 桔平	名城大学 理工学部 情報工学科	胸部 X 線画像を用いた読影レポートの自動生成
西村 祐真	名城大学 理工学部 電気電子工学科	照明環境下の LED バックホールの物体検出による高精度光軸合わせ
湯浅 颯士	名古屋大学 工学部 電気電子情報工学科	多バンド伝送・多階層化を導入した 次世代光ネットワークアーキテクチャの研究開発
■修士		
按田 将吾	名古屋工業大学大学院 工学研究科 工学専攻	製品レビューの詳細な分析に向けた低頻度観点の検出に関する研究
磯崎 新	名古屋大学大学院	雑音を活用する 1-bit ADC 受信機の開発

	工学研究科 情報・通信工学専攻	
岩本 彩月	名古屋工業大学大学院 工学研究科 工学専攻	サブテラヘルツ帯高周波異種伝送線路間変換回路の研究
金高 倭士	名古屋工業大学大学院 工学研究科 工学専攻	Sliding-DCT を用いた畳み込みフィルタの DSL
河辺 志温	名古屋大学大学院 工学研究科 情報・通信工学専攻	ドローンを用いたマルチホップ無線 LAN 中継通信システム
川本 真大	愛知県立大学大学院 情報科学研究科 システム科学専攻	体表部の大型な骨格筋認識における骨情報推定とその効果の検証
NGUYEN HOANG NAM	豊橋技術科学大学大学院 工学研究科 情報・知能工学専攻	顔色が潜在的な表情に与える影響
熊谷 瞭	名城大学大学院 理工学研究科 情報工学専攻	深層学習モデルに対する敵対的サンプルの生成手法とその評価
熊本 多良	名城大学大学院 理工学研究科 情報工学専攻	雑音推定に基づく最尤復号法における候補生成の効率化に関する研究
佐竹 風人	名古屋大学大学院 工学研究科 情報・通信工学専攻	超高速光信号の送受信方式に関する研究
竹内 理紗	名古屋大学大学院 情報学研究科 情報システム学専攻	アドホックネットワークを構成する複数の自律走行搬送ロボット (AMR) の経路制御
富田 友太	三重大学大学院 工学研究科 電気電子工学専攻	低分解能な ADC を用いた受信機における確率共鳴の利用 に関する研究
牧野 達海	中京大学大学院 工学研究科 電気電子工学専攻	粒子群最適化を用いたホモクリニック点計算法
三浦 龍一	名城大学大学院 理工学研究科 電気電子工学専攻	吸着器の把持点推定誤差吸収とハンド選択による把持対象範囲の拡大
三木 悠矢	名城大学大学院 理工学研究科 電気電子工学専攻	デジタルサイネージ・イメージセンサ可視光通信における 物体検出 DNN を応用した信号検出・復調方式
山浦 健介	名古屋工業大学大学院 工学研究科 工学専攻	Polar 符号による光衛星通信の高性能化と量子鍵配送への適用
山本 悠貴	中部大学大学院 工学研究科 ロボット理工学専攻	走行環境内に出現する視覚認知対象への事象関連電位 P300 応答と注 意喚起能力の関係
吉村 有花理	名古屋工業大学大学院 工学研究科 工学専攻 情報工学系プ ログラム	車載ネットワークの高品質化に関する研究
■博士		
片岡 研人	名古屋工業大学大学院 工学研究科 工学専攻	UWB 無線システムのマルチパス環境における PN 相関法と圧縮センシ ングを併用した信号源からの電波の TOF 及び DOA 推定
Choi Sihoon	名古屋大学大学院 工学研究科 電気工学専攻	コンバーターの EMI 低減の研究,低ノイズパワーモジュール設計

### 5-2-2 2024 年度 卒業研究発表会

2 月 28 日、現地(名城大学)にて卒業研究発表会が開催され、下記 7 名を表彰することとした。  
(所属五十音順)

最優秀卒業研究発表賞 (2 件)		
講演者名	所属	講演題目
甲斐 大樹	静岡大学	二次元コードのカラー化及び動画化によるオフライン大容量通信の提案とその評価
關塚 大成	名古屋大学	機械学習による適応信号処理技術 ～データセンタ光ネットワークの高速化に向けて～
優秀卒業研究発表賞 (5 件)		
講演者名	所属	講演題目
曾我 亮太	名古屋大学	イベントカメラを用いた車両用可視光通信システムの受信性能評価
和田 三奈	名古屋大学	山林インターネット実現のためのアドホックネットワーク構成と実機評価
西脇 世来	名城大学	2 種類の色フィルタを用いた画像による海底ごみ検出
中川 竣介	鳥羽商船高等専門学校	深層学習を用いたイノシシ検出精度向上 ～親子分類の有効性～
馬居 優華	愛知工業大学	指文字学習支援アプリケーションにおける間違い指摘フィードバック手法の検討

### 5-2-3 2024 年度 学業成績優秀賞

学業成績優秀賞の規程に基づき下記 31 名を表彰した。(所属五十音順)

受賞者名	受賞者所属
岩月 瑠架	愛知県立大学 情報科学部 情報科学科
新田 晃大	愛知工科大学 工学部 情報メディア学科
天野 嶺	愛知工業大学 工学部 電気学科
須田 倫代	愛知工業大学 情報科学部 情報科学科
満仲 香苗	岐阜大学 工学部 電気電子・情報工学科 情報コース

安田 雅永	岐阜大学 工学部 電気電子・情報工学科 電気電子コース
森次 礼智	近畿大学工業高等専門学校 生産システム工学専攻 (情報工学)
馬場 洋輔	近畿大学工業高等専門学校 生産システム工学専攻 (電気電子工学)
森 健太郎	近畿大学工業高等専門学校 総合システム工学科 電気電子コース
岩田 航星	近畿大学工業高等専門学校 総合システム工学科 制御情報コース
伊澤 遥陽	静岡大学 工学部 電気電子工学科 エネルギー・電子制御コース
細川 拓哉	静岡大学 工学部 電気電子工学科 情報エレクトロニクスコース
田中 大地	鈴鹿工業高等専門学校 電子情報工学科
高木 透	豊田工業高等専門学校 情報工学科
横山 要	豊田工業大学 工学部 先端工学基礎学科
岡本 弥咲子	豊橋技術科学大学 工学部 電気・電子情報工学課程
三角 維吹	豊橋技術科学大学 情報・知能工学課程
小林 悠馬	名古屋工業大学 工学部 電気・機械工学科
田口 敬大	名古屋工業大学 工学部 電気・機械工学科
宮田 大輝	名古屋工業大学 工学部 電気・機械工学科
伊藤 由騎	名古屋工業大学 工学部 情報工学科 知能情報分野
佐々木 康太	名古屋工業大学 工学部 情報工学科 ネットワーク分野
高木 真人	名古屋工業大学 工学部 情報工学科 メディア情報分野
小松 駿太	名古屋大学工学部 電気電子情報工学科
下井 舜也	名古屋大学工学部 電気電子情報工学科
土田 智哉	名古屋大学工学部 電気電子情報工学科
坊田 真一	三重大学 工学部 総合工学科情報工学コース
政本 光輝	三重大学 工学部 総合工学科電気電子工学コース
白石 光里	名城大学 理工学部 情報工学科
星野 太陽	名城大学 理工学部 電気電子工学科
伊藤 未羽	名城大学 理工学部 メカトロニクス工学科

## 6. 北陸支部

北陸地区の会員に対する情報提供、会員相互の情報交流を目指し、講演会・研究発表会・見学会等を開催した。また、支部選奨規程に基づき、学生に対する表彰を行った。

### 6-1 事業概要

2024年度の諸事業は年度当初の計画に沿ってそれぞれ実施した。

#### 6-1-1 一般事業 (定款 第4条 ロ号)

- ・講演会 (2回)

その他、シンポジウム、講演会等の共催、協賛、後援を3件行った。

- ・電気・情報関係学会北陸支部連合大会 (1回)

金沢工業大学が開催を担当し、オンライン形式で9月14日(土)に実施した。一般講演の発表件数は174件であった。

また、大会内で本支部が担当する招待講演(1回)を実施した。

#### 6-1-2 学生会事業 (定款 第4条 ロ号、ハ号)

- ・学生向け講演会 (0回)

現時点で実施をしていない。

### 6-2 選奨に関する事項 (定款 第4条 ホ号)

#### 6-2-1 2024年度学生優秀論文発表賞

電気・情報関係学会北陸支部連合大会における学生の発表を対象として、支部学生優秀論文発表賞規程に基づき審査を行い、下記の20名を受賞者として選定した。2025年2月に賞状と賞金を贈呈した。

(順不同、敬称略)

受賞者名	所属	発表論文タイトル
増井 ふうた	金沢工業大学	ゲーム形式のプログラミング学習における Unity 技術
先田 涼真	富山県立大学	モード多重伝送を実現する集積回路の構成に関する検討
長崎 慎也	富山県立大学	位相調整回路における線形性と Duty 比の改善に関する検討
花当 祐郁	富山県立大学	e スポーツを用いた介護予防システムにおける関心対象の分析

宮崎 敢	富山県立大学	靴底湾曲靴を用いたりダイレクテッドウォーキングにおける歩行方向知覚への影響
脇谷 銀次	富山県立大学	フィルタアレイ型マルチスペクトルセンサを使った光スペクトルのスパース推定における光ショット雑音の影響
堀 翔太	富山工業高等専門学校	スマートグラス装着下での利用を想定したハンドパネルインターフェースの性能評価
伊藤 圭護	福井大学	Vision Transformer を用いた手書き日本語文字認識
内田 淳也	福井大学	同一周波数全二重通信における周辺車両の影響
大崎 隼平	福井大学	ChatGPT 剽窃レポート発見支援システム
糝谷 斗和	福井大学	シェイク動作に基づく時間経過による認証実験
小松 佳生	福井大学	音データの完全可逆圧縮記述をあたえるセルオートマトンルール系列のフラクタル次元特性と音源との関係
澤岡 玲治	福井大学	ブロックチェーンメタバースにおけるセキュリティリスクを考慮した最適シャードニング法
高橋 昂大	福井大学	家電操作を自動化するための人物認証手法
棚瀬 弘大	福井大学	投機的手法を用いたインタラクティブシミュレーションシステムの大規模データを用いた並列処理効果の解析
中楯 峻之助	福井大学	屋外環境における連合学習実行時のエッジデバイス性能評価
西尾 駿佑	福井大学	宛名位置同定のための推定座標誤差計測
水谷 崇雅	福井大学	量子ネットワークのフロー制御に向けたタスクサイズに基づく量子テレポーテーション方式
小俣 直史	北陸先端科学技術大学院大学	MobileNetV2 における機械学習モデル保護手法 (LEWIP) の評価
Yang TU	北陸先端科学技術大学院大学	Performance Analysis for NOMA-based Multi-User VLC System

## 6-2-2 2024 年度優秀学生賞

支部優秀学生賞選奨規程に基づき審査を行い、下記の 11 名を受賞者として選定した。2025 年 2 月に賞状と賞金を贈呈した。(順不同、敬称略)

大学名	学科専攻等	学生名
富山大学	工学部 工学科 電気電子工学コース	松下 遼
富山県立大学	情報システム工学科	吉田 大葵
北陸先端科学技術大学院大学	先端科学技術研究科・先端科学技術専攻	小倉 稜也
金沢工業大学	工学部 電気電子工学科	深田 幸紀
金沢大学	理工学域 電子情報通信学類	朴 尚俊
福井大学	大学院 工学研究科 知識社会基礎工学専攻	北野 翔
福井工業大学	工学部・電気電子工学科	SEE MIN ZHE
富山高等専門学校	電気制御システム工学科	能登 啓晶
国際高等専門学校	国際理工学科	本田 詩織
石川工業高等専門学校	電気工学科	久田 恵桃
福井工業高等専門学校	電子情報工学科	内山田 湖太

## 7. 関西支部

関西（大阪府、京都府、奈良県、滋賀県、和歌山県、兵庫県）を拠点としている会員に対するサービスおよび社会的責務として、講演会、見学会、講習会、教育事業等を企画し実施した。

講演会等の開催にあたっては、学会の会員数の維持・増加を目指し、多くの方に参加いただけるテーマを選定した。また、学生会活動を通じ、地域学生にとっての学会の価値向上を図った。

### 7-1 事業概要

#### 7-1-1 一般事業（定款 第 4 条 ロ号）

ア. 講演会：1 回（計画 1 回）、参加者 97 名、テーマ「ヒューマン・マシン・インターフェース (HMI) 技術」をオンラインで実施。

- イ. 見学会：0回（計画1回）、株式会社テイジエルの見学を企画したが、催行最小人数に達しなかったため、開催を見送った。
- ウ. 講習会：4回（計画5回）、参加者58名（4回の合計）であった。少人数制の講習会として、画像処理（7名）、暗号技術とセキュリティ設計（10名）に関する講座をそれぞれ1回の計2回実施した。また、社会人が参加しやすいように18時から開始されるイブニングセミナーを「宇宙開発の最前線～ロケット開発と高度人材育成～」というテーマで2回開催した。第1回は「ロケットに搭載される電子機器の概要と特徴、今後の開発について」（17名）、第2回は「宇宙産業の高度技術者育成プログラムのご紹介」（24名）という小テーマで、それぞれ開催した。

#### 7-1-2 教育事業（定款 第4条 ロ、へ号）

- ア. 講演会：1回（計画1回）、参加者9名、テーマ「ネットワークサーバ構築講座<Linuxでサーバを設定しよう>」で、実習もふくめた講演会を開催。

#### 7-1-3 学生会事業（定款 第4条 ロ号、ホ号、へ号）

- ア. 講演会：1回（計画1回）、参加者31名、株式会社イトーキ、日本電信電話株式会社の各社から若手技術者を招いて、それぞれ、「超スマート社会の実現を目指した「働く」と「学ぶ」の実証」「これから社会に出られる理系学生のみなさんへ」というタイトルの講演をオンラインで実施。
- イ. 研究発表会：1回（計画1回）、参加者100名（うち発表者50名）、2025年3月18日に大阪公立大学にて開催。

### 7-2 選奨に関する事項（定款 第4条 ホ号）

#### 7-2-1. 2024年度 関西支部学生会支部長賞 奨励賞

関西支部学生会支部長賞規定に基づき下記の8名を選定し、2025年3月18日に贈呈した。

氏名	所属	講演題目
橋田 朋希	立命館大学	パラメトリックスピーカを用いた聴覚マスキングに基づく受聴領域形成
孫 胡傑	立命館大学	光レーザマイクロホンの収録音声を用いた深層学習に基づく単一チャンネル音源分離の性能評価
石丸 晴基	大阪市立大学	DNS観測による初期フェーズIoT機器同定
伊藤 陸人	兵庫県立大学	Auto Encoderによる環境変化検知を用いたFinger Print位置推定
ファネス フィルベルト シェラ	大阪工業大学	CFET SRAMにおけるソフトエラー現象のシミュレーション解析
富尾 真奈花	大阪府立大学	光FIRフィルタを用いたナイキストOTDM伝送のファイバ分散依存性
澤田 佑樹	大阪府立大学	CG画像を用いた深層学習と縞投影に基づく光沢物体の三次元計測における不確かさ評価の基礎検討
奥田 美咲	東京大学	Webカメラを用いたテレワーク作業者のPC作業時間計測

#### 7-2-2. 2024年度 関西支部 優秀論文発表賞

関西支部優秀論文発表賞規定に基づき下記の4名を選定し、郵送で贈呈した。（敬称略）

氏名	所属	講演題目
堤俊介	和歌山大学	稠密無線LAN環境において柔軟な周波数利用を実現するためのBSSグループ別送信機会獲得期間設定法
野中拓磨	大阪工業大学	周波数切り替え検知機能付き高速ロックFractional-N PLLの検討
磯村怜央	大阪電気通信大学	心電図・光電脈波の計測に基づく最高・最低血圧の連続推定
松浦爽	明石工業高等専門学校	脊柱CTデータからの粗密画像による海綿骨領域の検出

#### 7-2-3. 2024年度 関西支部学生会支部長賞 功労賞

関西支部学生会支部長賞規定に基づき下記の12名を選定し、2025年3月18日に贈呈した。（敬称略）

本賞は関西支部学生会に属する学生のうち、学生会幹事として、支部の活動活性化に多大な貢献をなした功績により表彰するものである。

特別功労賞：中曾禎啓(大阪公立大学)、小川唯(大阪公立大学)

功労賞：岡田康宏(大阪工業大学)、野中琢磨(大阪公立大学)、古崎弘平(大阪電気通信大学)、奥田真結(大阪電気通信大学)、長久瑞樹(立命館大学)、香月実(近畿大学)、北西竜馬(近畿大学)、竹田雄貴(近畿大学)、小池健文(京都大学)、原拓己(京都大学)

## 8. 中国支部

2024年度事業において、全て計画どおり事業達成。また、選奨においても規定どおり実施。

### 8-1 事業

#### 8-1-1 一般事業（定款 第4条 ロ号）

ア. 講演会：17回実施（主催・共同主催：4回、共催等13回）＜計画：15回（主催3回含む）＞

イ. 見学会：電気学会および中国・四国工学教育協会との共催により2回実施

＜計画：関連団体と提携し、年1回程度開催＞

『2024年度 中国・四国工学教育協会 産業教育部会 見学会』（㈱キャストム）

『令和6年度電気学会中国支部 見学会』（島根原子力発電所）

ウ. 専門講習会：電気学会との共催により1回実施 ＜計画：関連団体と提携し年1回程度開催＞  
『配電用変電所保護リレーシステム技術』

エ. シンポジウム：後援により2回実施 ＜計画：シンポジウムへ積極的に協賛＞

『第26回IEEE広島支部学生シンポジウム (HISS)』（IEEE広島支部）

『広島大学クラウドサービス利用シンポジウム2025』（広島大学情報メディア教育研究センター）

オ. 電気記念日行事：共催団体の一員として2025年3月の記念行事に参加予定

日時：2025年3月25日（月）14：00～15：40

場所：広島市中区小町4-33 中国電力本社ビル 2階大会議場

カ. 電気・情報関連学会中国支部連合大会：2024年10月26日(土)オンラインにて開催

特別講演：題目『H3ロケット試験機1号機打上げ失敗について、電気系を中心とした原因  
究明の取り組み』

講師：川北史郎（JAXA 第一宇宙技術部門 衛星利用運用センター 技術領域主幹）

#### 8-1-2 教育事業（定款 第4条 ロ号、へ号）＜計画：大学等にて小中高生向けイベントを共同主催＞

中国支部学生会にて中国地方の学生を対象にIoT活用に関するアイデア・作品のコンテストを主催

イベント名：『フレッシュITあわ〜ど2024』

今年度テーマ：＜みんなが使える・遊べるIoTコンテンツ＞

開催日・場所：2024年11月17日（日）現地(広島市立大学)

応募総数：64件（アイデア部門：大学生13件／高校生45件、作品部門：8件）

表彰件数：10件（アイデア部門：大学生3件／高校生3件、作品部門：4件）

工夫点：今年度は学術イベント（IEEE HISS(Hiroshima Student Symposium)）との連携により参加者の増加をめざした。（例年、広島市立大学の大学祭と連携）学術イベントとの連携により、関連各所への周知効率化や、関連学生の流入などで参加者増加につながった。（昨年度比+20人程度）

#### 8-1-3 学生会事業（定款 第4条 ロ号、ホ号、へ号）

ア. 学生向け講演会及び見学会

＜計画：オンデマンド配信/年間計画6回程度（オンデマンド配信の場合は年1回）＞

モバイルアプリ講習会の開催および講演会の実施

演題：『～開発者だけじゃない！～モバイルアプリ開発に関わる上でおさえておく10のポイント』

講師：西川貴之、森下裕貴（株式会社コトブキソリューション 第一事業部）

開催日：2024年7月22日（月）13:00～14:30

場所：(会場1)広島大学 東広島キャンパス (会場2)広島市立大学 情報科学部棟 情報会議室 3

※会場2では、会場1での講演会の様子をオンライン配信し、後日オンデマンドで配信。

イ. 学生会自主活動の活性化：学生会と支部との連携を図り、学生会自主活動への支援

<フレッシュITあわ〜ど>実行委員にてイベント開催に向けた開催方法等を検討

【実行委員会開催（オンライン開催）】

第1回：2024年4月23日（火）、第2回：2024年6月11日（火）、第3回：2024年10月22日（火）  
第4回：2024年11月17日（日）

ウ. 学生員による支部・支部学生会ホームページの維持管理

学会活動の普及を目的に、広島市立大学の学生員にてホームページを更新（32回）

8-2 選奨（定款 第4条 ホ号、ヘ号） ※詳細は【別紙2】参照

ア. 連合大会発表論文の中から優秀な発表を行った学生の論文を選定（発表論文件数の10%を四捨五入）し、電子情報通信学会中国支部における連合大会奨励賞として表彰

【連合大会奨励賞表彰式】

開催日：2025年3月7日（金）16：40～17：30

受賞者：19名

	氏名	学校名	題目
1	伊藤 一葉	岡山大学	電波不感地帯での運用を目的とした Private LoRa ネットワーク構築と山林での性能評価
2	及川 歩	徳山工業高等専門学校	LPWA 通信網による地域海上交通のモビリティデータ解析手法の検討
3	大谷 元統	呉工業高等専門学校	80GHz 帯 DTM ラインに用いる誘電体チューブの複素比誘電率測定
4	尾崎 銀河	岡山理科大学	タブレット端末における非接触操作インタフェースの開発に向けた深層学習モデルの作成と評価
5	鬼塚 岳斗	津山工業高等専門学校	モーションセンサを用いた指文字認識に関する研究
6	川内 健太郎	山口大学	ガンマトーンによる聴覚障害を表現するための擬声語に関する基礎的考察
7	岸本 日和	岡山県立大学	28GHz 帯 Push-Push VCO における共振器回路構成の検討
8	神代 春花	山口大学	延焼に与える影響の多様性を考慮した延焼シミュレーションモデルの構築
9	佐原 海哉	広島市立大学	行列積演算を用いた DGMPFI ライブラリの再利用処理におけるオーバーヘッドの評価
10	澤村 和貴	鳥取大学	OpenStreetMap への地名読み仮名の補完
11	新浜 貴翔	呉工業高等専門学校	T 分岐型導波管電力分配・合成器による W バンド増幅器の試作
12	土居 亮太	岡山大学	多段階情報処理システムにおけるマルチクライアントサービスを対象とした VM 移動制御法
13	畑本 真優	県立広島大学	非常時電力供給を目的としたバッテリー交換型電力輸送システムにおけるユーザ負荷軽減手法
14	花本 太一	呉工業高等専門学校	呼吸と運動の同時計測による新奇動物体に対するゼブラフィッシュの情動行動評価
15	原 勇真	福山大学	音源像とスペクトルをマルチモーダル入力とした深層学習によるベッド内の行動推定
16	樋口 恵汰	山口大学	輝度を保存したガンマ変換による色相保存型の彩度強調法
17	藤本 剛瑠	岡山大学	メッセージブローカの冗長化に伴うオーバーヘッドの評価
18	槇場 月翔	呉工業高等専門学校	小規模交差点向け交通量自動分析システムの構築
19	光保 怜	岡山大学	サイドチャンネル攻撃耐性要求を満足する暗号ハードウェア設計の基礎検討

イ. 高校、高専、短大の優秀卒業生表彰を、関連学会と連携して実施

受賞者：中国地区57校89名

※電気・電子・照明・映像情報メディア・情報・電気設備に関する学術振興を図るため、中国5県下の高専・短大・高校の電気・情報関連学科卒業生のうち成績優秀者に対して例年賞状ならびに記念品(盾)を贈呈し激励

対象	表彰学校数	表彰者数	
高 校	広島県	11 校	16 名
	岡山県	13 校	18 名
	島根県	5 校	12 名
	鳥取県	5 校	9 名
	山口県	14 校	16 名

高 専	中国地区	8 校	17 名
短 大	中国地区	1 校	1 名
合 計		57 校	89 名

ウ. 学生功労賞の表彰を学生会活動の発展に貢献した学生に対し実施

【学生功労賞表彰式】

開催日：2025年3月7日（金）16：40 ～ 17：30

受賞者：9名

※『フレッシュITあわ〜ど』開催等により学生会活動の発展に貢献した学生会役員

	氏名	学校名	所属
1	井関 智也	岡山理科大学	大学院 理工学研究科 システム科学専攻
2	沖津 永享	島根大学	総合理工学部 知能情報デザイン学科
3	溝部 壮太郎	山口大学	大学院創成科学研究科 電気電子情報系専攻
4	細川 雄正	岡山大学	大学院 自然科学研究科 電子情報システム工学専攻
5	寺尾 光一郎	岡山県立大学	大学院情報系工学研究科システム工学専攻
6	清水 優太	鳥取大学	大学院 持続性社会創生科学研究科
7	田辺 七海	広島工業大学	大学院 工学研究科 情報システム科学専攻
8	田邊 基起	福山大学	工学研究科 修士課程 情報処理工学専攻
9	米田 清太郎	広島大学	大学院 先進理工系科学研究科 情報科学プログラム

## 9. 四国支部

2024 年度は、四国における電子・情報・通信工学分野での学術・技術振興に寄与できるよう、講演会、講習会、連合大会などの事業を実施し、四国内の研究者、技術者、学生へのサービス充実を目指した。昨年度に引き続き、四国支部地域内の学校、企業、NPO などと連携し、小中高生や専門学校の学生向けの教育イベント(メーカーズチャレンジ)へ協賛した。支部の会員増を図り、今年の新規事業として「学生大交流会」を実施し、108名の学生が参加した。

### 9-1 事業概要

2024 年度の諸事業は年度当初の計画に沿ってそれぞれ実施した。

#### 9-1-1 一般事業（定款 第4条 ロ号）

- ・講演会は2回実施した。
- ・専門講習会はいずれも対面にて2回(香川高専、香川大)実施した。
- ・支部協賛・後援事業はサマースクールと次世代光フォーラムの2回実施した。
- ・2024 年度電気・電子・情報関係学会四国支部連合大会（2024 年 9 月 21 日）は、対面にて実施した。講演論文について、論文を収録した論文集（ダウンロード版、CD-R 版）が 9 月 14 日に発行され、公知された。（申込件数：189 件、発表件数：187 件）

#### 9-1-2 学生会事業（定款 第4条 ロ号、ホ号、へ号）

- ・学生向け講演会は1回実施し、優れた業績を持つ講師を招き、参加者は幅広く技術情報や知識を得た。
- ・学生ランチとして、2校(愛媛大、徳島大)が講演会、見学会、交流会等の活動を実施した。

### 9-2 選奨に関する事項（定款 第4条 ホ号）

#### 9-2-1 令和6年度電気学会・電子情報通信学会・情報処理学会四国支部奨励賞

電気学会・電子情報通信学会・情報処理学会四国支部奨励賞選奨規程に基づき下記の53名を選定し、各機関の卒業式・修了式において贈呈した。（機関別、敬称略）

No.	学校名（和）	氏名（和）
1	愛媛大学工学部	松本 隆杜
2	愛媛大学工学部	吉田 悠大
3	愛媛大学工学部	杉山 誠治
4	愛媛大学工学部	内山 稜太
5	愛媛大学大学院理工学研究科	前畑 真由
6	愛媛大学大学院理工学研究科	貝崎 新一郎
7	愛媛大学大学院理工学研究科	吉見 菜那
8	高知大学理工学部	花岡 直弥
9	高知大学大学院	酒井 匡章
10	徳島大学理工学部	吉田 直輝
11	徳島大学理工学部	三浦 康靖
12	徳島大学理工学部	佐川 太陽
13	徳島大学理工学部	村田 彪馬

14	徳島大学理工学部	酒尾 美星
15	徳島大学大学院創成科学研究科理工学専攻	村山 圭汰
16	徳島大学大学院創成科学研究科理工学専攻	村上 隼瑛
17	徳島大学大学院創成科学研究科理工学専攻	早道 広峻
18	徳島大学大学院創成科学研究科理工学専攻	泉谷 駿亮
19	徳島大学大学院創成科学研究科理工学専攻	寺尾 保範
20	香川大学創造工学部	小林 春一
21	香川大学創造工学部	小松 拓豊
22	香川大学創造工学部	桑原 基一郎
23	香川大学創造工学部	秋山 凌
24	香川大学大学院創発科学研究科	狩屋 歩夢
25	香川大学大学院創発科学研究科	穴吹 大地
26	徳島文理大学理工学部	佐野 剛規
27	徳島文理大学理工学部	廣瀬 真由子
28	徳島文理大学大学院工学研究科	ジャンカー・ジャシュア和男
29	高知工科大学	日永 直仁
30	高知工科大学	川田 きらら
31	高知工科大学	河野 竜也
32	高知工科大学大学院工学研究科基盤工学専攻	該当者なし
33	高知工科大学大学院工学研究科基盤工学専攻	竹内 将人
34	四国大学経営情報学部	仲村 一真
35	阿南工業高等専門学校	清水 歩夢
36	阿南工業高等専門学校	福田 健人
37	阿南工業高等専門学校専攻科	長谷川 菜月
38	高知工業高等専門学校	該当者なし
39	高知工業高等専門学校	藤原 優杏
40	高知工業高等専門学校専攻科	該当者なし
41	新居浜工業高等専門学校	山本 紘揮
42	新居浜工業高等専門学校	渡辺 一翔
43	新居浜工業高等専門学校専攻科	高田 悠佑
44	香川高等専門学校	谷野宮 蒼士
45	香川高等専門学校	桑島 治希
46	香川高等専門学校専攻科	多田 一真
47	香川高等専門学校	岡田 哉汰
48	香川高等専門学校	金丸 晃大
49	香川高等専門学校	西原 一輝
50	香川高等専門学校専攻科	三井 優弥
51	弓削商船高等専門学校	菅野 琴路
52	弓削商船高等専門学校	桃谷 勇汰
53	弓削商船高等専門学校専攻科	村上 ヒカリ

## 10. 九州支部

2024年度は、講演会などオンライン開催および、対面とオンラインのハイブリットでの開催を行うなど新たな活動方法を取りながら、九州支部管内の研究者、技術者、学生へのサービス充実を目指した。

### 10-1 事業概要

2023年度の諸事業は年度当初の計画に沿ってそれぞれ実施した。

#### 10-1-1 一般事業（新定款第4条口号）

- ア. 講演会：特別講演会をオンラインにて1回開催、一般講演会2回を開催した他、協賛・後援の講演会、シンポジウムを11件行った。
- イ. 専門講習会：福岡大学にて講師5名による「半導体人材育成に関するオール九州の取組」をハイブリットにて開催。会場15名、オンライン68名と盛況であった。
- ウ. ワークショップ：アンテナ・伝搬における設計・解析ワークショップ「フェーズドアレーアンテナの理論と実際」を福岡工業大学とオンラインにて開催。学生、企業、大学関係者など現地8名、オンライン66名と盛況であった。
- エ. 電気・情報関係学会九州支部連合大会：鹿児島大学にて2日間に渡り開催された。参加者は一般講演数263件、企業講演8件、招待講演2件、特別講演1件、企画セッション1件、聴講者257名の総数620名を数え大変盛況であった。
- オ. 総合通信局連携企画：九州総合通信局と当支部の連携事業として、連合大会の企画セッションにて1名の講師を招聘し、講演を行った。

10-1-2 教育事業（新定款第4条ロ、へ号）

- ア. 子供の科学教室：九州産業大学にて「お手軽電子工作」を開催。小学生20名が参加し好評であった。また、熊本大学にて「Octaveを用いたプログラミング体験～いろんな音を鳴らしてみよう～」を開催、中学生14名が参加し好評であった。
- イ. ものづくり教室：有明高専と共催にて「第19回エレクトロニクスものづくり体験教室2024」を開催。FMはこらじ作成を行った。小中学生33名が参加し好評であった。

10-1-3 学生会事業（新定款第4条ロ、ホ、へ号）

- ア. 学生会講演会：学生員で組織された学生実行委員会を中心に、鹿児島大学にて開催された。150件の講演と52名の聴講者が、高専生から院生まで幅広い学生が多数参加し、大変盛況であった。
- イ. 学生ランチ交流会：学生会講演会にて、管内11の学生ランチ代表者が参加者に向けて活動報告のポスターセッションを行い、学会活動についての周知を図ると共に、聴講者投票による優秀な活動を行ったランチを選出し、表彰を行った。また、学生ランチ委員会を開催し、各ランチ同士の情報交換および交流を図り大いに有意義であった。
- ウ. 学生ランチ：11ランチが活動し、各自講演会や見学会、交流会などの活動を行った。

10-2 選奨に関する事項（定款第6条ホ号）

10-2-1 2024年度 連合大会講演奨励賞

「電気・情報関係学会九州支部連合大会における講演奨励賞」表彰規程に基づき下記5名を選定し、2025年1月付けにて表彰した。（順不同、敬称略）

授賞者	所 属	演 題
中島 健太	九州大学大学院システム情報科学府電気電子工学専攻	28GHz帯で動作する単方向指向性スロットアンテナの特性向上に関する研究
松崎 悠汰	九州大学大学院システム情報科学府情報理工学専攻	ノイズキャンセル機能を有した拡散モデル
犬童 稜太	熊本大学大学院自然科学教育部情報電気工学専攻	レーダを用いたコンクリート非破壊診断におけるクラックの影響の評価
桑原 悠輔	鹿児島大学大学院理工学研究科工学専攻電気電子工学プログラム	フーリエ変換とニューラルネットワークの統合による文字認識精度の改善
秋吉 真吾	大分大学大学院工学研究科博士前期課程工学専攻 知能情報システム工学コース	FO制御可能な複数話者ボコーダへの話者ベクトルの導入

10-2-2 2024年度 学生会講演奨励賞

学生会表彰規程に基づき下記18名を選定し、2025年1月付けにて表彰した。（順不同、敬称略）

授賞者	所 属	演 題
椎木 孝成	宮崎大学工学部工学科機械知能工学プログラム	エビ型遊泳ロボットの推進力生成と流体解析
森茂 蒼士	宮崎大学大学院工学研究科先端情報コース	組み込み機器上で動作する深層学習を用いた低消費電力顔認証システムの検討
高雄 奏摩	九州工業大学情報工学部知能情報工学科	変更制約付き最長共通部分列問題に対する多項式時間アルゴリズム
福田 圭吾	九州工業大学大学院情報工学府情報創成工学専攻	宇宙統合ネットワークに向けた演算量削減型光無線通信システムに関する一検討
古城 直輝	九州大学大学院総合理工学府総合理工学専攻	電極材料の違いによる表皮効果の電磁界解析
川上 空音	熊本高等専門学校専攻科電子情報システム工学専攻	Basic Consideration of Kansei Effect for fundamental swings of Electric Rocking Chair
吉川 匠	熊本大学大学院自然科学教育部情報電気工学専攻	CDMA通信における相関受信機出力レベルと単一パリティ検査符号を利用した誤り訂正
池上 悠斗	佐賀大学理工学部理工学科電子デバイス工学コース	Arduinoを用いた4値PPM復調器の検討
河口 聖弥	鹿児島大学大学院理工学研究科工学専攻 情報・生体工学プログラム	零相関区間 $2z(2n-1)$ の光 ZCZ 系列に対する小規模マッチドフィルタバンクの検討
塚田 匠海	鹿児島大学大学院理工学研究科工学専攻 情報・生体工学プログラム	触力覚デバイスを用いた過剰学習実験システムの開発
村上 貴英	鹿児島大学大学院理工学研究科工学専攻 情報・生体工学プログラム	VR環境下での道具操作における遅延が身体感覚に与える影響の調査
亀井 大和	大分工業高等専門学校情報工学科	motor imageryに関するデータの識別
森下 詠心	大分工業高等専門学校専攻科電気電子情報工学専攻	動く錯視による重量感の提示

授賞者	所 属	演 題
梶原 綾乃	大分大学大学院工学研究科工学専攻	音源が室内環境下での障害物知覚能力に与える影響
山本 章悟	大分大学大学院工学研究科工学専攻	エコーロケーションによる障害物の方向知覚における手がかりに関する検討
宮崎 滉大	長崎大学大学院工学研究科 総合工学専攻電気電子工学コース	等倍スケールにおけるピン装荷型マイクロストリップアンテナを用いた電波型内視鏡
川人 彩楓	東海大学文理融合学部人間情報工学科	パルス数ニューロン回路に関する研究
尾方 勇介	福岡工業大学大学院工学研究科 情報通信工学専攻	衛星通信の地域別降水確率に基づいた降雨減衰対策の評価 (1)

### 10-2-3 2024年度 成績優秀賞

学生会表彰規程に基づき下記の 57 名を選定し、2025 年 3 月付けにて表彰した。(順不同、敬称略)

学 校	学 部	学 科	表彰者名
九州大学	工学部	電気情報工学科 計算機工学コース	米田 俊祐
		電気情報工学科 電子通信工学コース	松尾 敬太
福岡大学	工学部	電子情報工学科	池田 尚道
福岡工業大学	工学部	電子情報工学科	大橋 秀幸
	情報工学部	情報通信工学科	福田 順正
		情報工学科	丸木 慧士
		情報システム工学科	田中 初樹
		システムマネジメント学科	山北 彩未
九州産業大学	理工学部	情報科学科	金政 拓実
		電気工学科	孫 祐誠
九州工業大学	工学部	機械知能工学科 知能制御工学コース	十河 伶衣
		電気電子工学科 電子システム工学コース	ADRIAN WEE YIAN KIAT
	情報工学部	物理情報工学科 電子物理工学コース	中村 大輝
		情報・通信工学科	加藤 貴也
		知能情報工学科	竹内 大輔
知的システム工学科	久保田 愛梨		
北九州市立大学	国際環境工学部	情報システム工学科	有吉 勇斗
久留米工業大学	工学部	情報ネットワーク工学科	高見 健太
西日本工業大学	工学部	総合システム工学科 電気情報工学系知能制御コース	福倉 翔貴
		総合システム工学科 電気情報工学系情報コース	グエン ドック ギャ
近畿大学	産業理工学部	電気電子工学科	岡田 悠希
		情報学科	白水 美歌
佐賀大学	理工学部	理工学科 情報ネットワーク工学コース	山元 良太
		理工学科 知能情報システム工学コース	伊藤 綾香
		理工学科 電気エネルギー工学コース	上田 瑛生
		理工学科 電子デバイス工学コース	石橋 優哉
長崎大学	工学部	工学科 電気電子工学コース	平田 聖直
	情報データ科学部	インフォメーションサイエンスコース	原田 凌
長崎総合科学大学	工学部	データサイエンスコース	仲森 司
	総合情報学部	工学科 電気電子工学コース	青木 浩志
熊本大学	工学部	総合情報学科 知能情報コース	磯本 理気
		情報電気工学科 電気工学教育プログラム	河野 凌大
		情報電気工学科 電子工学教育プログラム	足立 士温
崇城大学	情報学部	情報電気工学科 情報工学教育プログラム	米谷 風馬
		情報学科 未来情報コース	堀 倫太郎
		情報学科 電子通信コース	福本 峻大
東海大学	基盤工学部	情報学科 知能情報コース	飯星 サラ
		電気電子情報工学科	高 小亮
大分大学	理工学部	創生工学科 電気電子コース	川田 直人
		創生工学科 電気電子コース	西津 太晴
		共創理工学科 知能情報システムコース	森田 夏向
宮崎大学	工学部	工学科 電気電子工学プログラム	森本 拓海
		工学科 情報通信工学プログラム	宇都宮 幸大
鹿児島大学	工学部	先進工学科 電気電子工学プログラム	横村 晨
		先進工学科 情報・生体工学プログラム	安藤 光希
第一工科大学	工学部	情報・AI・データサイエンス学科	上村 美初

学 校	学 部	学 科	表彰者名
琉球大学	工学部	工学科 電子情報通信コース	新垣 晴朗
		工学科 電気システム工学コース	安里 周矩
		工学科 知能情報コース	根路銘 理子

学校名	学科名	表彰者
北九州工業高等専門学校	生産デザイン工学科 知能ロボットシステムコース	淵上 望以
	生産デザイン工学科 情報システムコース	鹿毛 翔平
有明工業高等専門学校	創造工学科 情報システムコース	猿渡 優衣
久留米工業高等専門学校	制御情報工学科	森下 大夢
佐世保工業高等専門学校	電子制御工学科	大石 華衣
熊本高等専門学校	人間情報システム工学科	小林 環太
	情報通信エレクトロニクス工学科	木村 謙伸
	制御情報システム工学科	今村 仁久
大分工業高等専門学校	電気電子工学科	繁松 隼寿
	情報工学科	岸田 航河
都城工業高等専門学校	電気情報工学科	山領 大志
鹿児島工業高等専門学校	情報工学科	有菌 諭志
	電子制御工学科	大堂 翔太郎
	電気電子工学科	古賀 莉佳子
沖縄工業高等専門学校	情報通信システム工学科	新里 察得
	メディア情報工学科	新野 夏南人

#### 10-2-4 2024 年度 学術奨励賞

学生会表彰規程に基づき下記の 25 名を選定し、2024 年 3 月付けにて表彰した。(順不同、敬称略)

	所 属	表彰者
九州大学	大学院システム情報科学府電気電子工学専攻	土居 諒
福岡大学	大学院工学研究科電子情報工学専攻	小柳 結依
福岡工業大学	大学院工学研究科システムマネジメント専攻	下江 博文
九州産業大学	大学院情報科学研究科情報科学専攻	安部 萌
九州工業大学	大学院工学府工学専攻	大谷 優香
	大学院情報工学府情報創成工学専攻	小野 太士
北九州市立大学	大学院国際環境工学研究科情報工学専攻	柄本 敦哉
久留米工業大学	大学院工学研究科電子情報システム工学専攻	衛藤 康典
西日本工業大学	大学院工学研究科生産・環境システム専攻	恒見 健太
近畿大学	大学院産業理工学研究科産業理工学専攻	星野 智美
佐賀大学	大学院理工学研究科理工学専攻 電気電子工学コース	本村 佳凜
長崎大学	大学院工学研究科総合工学専攻	有川 佳宏
長崎総合科学大学	大学院工学研究科電子情報学専攻	稲形 僚也
熊本大学	大学院自然科学教育部博士前期課程 情報電気工学専攻	小野 綾太
崇城大学	大学院工学研究科応用情報学専攻	黄 思韵
大分大学	大学院工学研究科博士前期課程 工学専攻 電気電子工学コース	吉田 匡吾
宮崎大学	大学院工学研究科工学専攻	濱砂 桜太
鹿児島大学	大学院理工学研究科工学専攻 情報・生体工学プログラム	廣瀬 雄大
琉球大学	大学院理工学研究科工学専攻	山城 吉士
有明工業高等専門学校	専攻科生産情報システム工学専攻	森田 悠斗
佐世保工業高等専門学校	専攻科複合工学専攻情報工学系	長岡 輝
熊本高等専門学校	専攻科電子情報システム工学専攻	中川 岬
大分工業高等専門学校	専攻科電気電子情報工学専攻	安藤 拓翔
鹿児島工業高等専門学校	専攻科電気情報システム工学専攻	久永 学実
沖縄工業高等専門学校	専攻科 創造システム工学専攻	平良 昂也

以上

## IV. 2024 年度役員及び代議員の構成

2024 年度役員

29 名

役 職 名	先 任	後 任
会 長	山中 直明	
次期会長	植松 友彦	
副会長（学術強化担当）	田口 亮	高田 潤一
副会長（学会運営・組織強化担当）	中村 元	大橋 弘美
総務理事	大槻 知明	島田 達也
会計理事	平 明德	藤井 威生
編集理事	橋本 俊和	山里 敬也
企画理事	吉敷由起子	浅井 孝浩
調査理事	松尾 綾子	足立 朋子
編集長（理事）	笹瀬 巖	
企画戦略室長（理事）	今井 尚樹	
規格調査会委員長（理事）	浅谷 耕一	
ESS 会長（理事）	和田山 正	
CS 会長（理事）	中尾 彰宏	
ES 会長（理事）	永田 真	
ISS 会長（理事）	斎藤 英雄	
ESS 次期会長（理事）	尾上 孝雄	
CS 次期会長（理事）	眞田 幸俊	
ES 次期会長（理事）	松尾 慎治	
ISS 次期会長（理事）	篠田 浩一	
監 事	中野 義昭	荒川 薫

2024 年度代議員

108 名

相澤 清晴	海野 祐輔	金 ミンソ	平 明德	永田 真	水谷 浩之
青木 直史	大河 正志	今野 佳祐	高橋 篤司	中野 秀洋	三宅 功
浅井光太郎	太田 賢	斎藤 英雄	高橋 徹	中野 義昭	森川 博之
浅谷 耕一	大槻 知明	斎藤 秀俊	高橋 浩	中村 元	山中 直明
阿多 信吾	岡 宗一	佐々木邦彦	高村 誠之	西浦 敬信	山本健太郎
足立 朋子	岡田 将吾	笹瀬 巖	田口 亮	西原 明法	山本 剛之
安部田貞行	尾上 孝雄	佐藤 真一	伊達木 隆	西原 基夫	山本 直克
石井 望	笠原 正治	佐道 泰造	田中 良明	野村 亮	吉田 毅
石川 悦子	梶川 嘉延	佐藤 洋一	田村 昌也	橋本 俊和	吉本潤一郎
石田 亨	柏野 邦夫	眞田 幸俊	太郎丸 真	橋本 昌宜	與那 篤史
伊藤 京子	加藤 毅	佐波 孝彦	辻 ゆかり	葉玉 寿弥	リム 勇仁
伊藤 みほ	鎌部 浩	塩本 公平	都築 伸二	八田 俊之	和田 親宗
稲村 浩	河口 民雄	重田 和弘	鉄本 良	廣瀬 幸	和田山 正
井上 真杉	川島 龍太	篠浦 伸得	寺迫 智昭	藤井 威生	
岩城 護	川添 雄彦	芝 宏礼	寺田 純	藤井 俊彰	
上嶋 明	川西 哲也	白井 僚	鳥山 朋二	藤島 実	
植松 友彦	河東 晴子	白勢 政明	中尾 彰宏	松尾 綾子	
内澤 啓	菊間 信良	関屋 大雄	中川 匡夫	松田 広	
内山 英昭	吉敷由起子	宋 天	中田 崇行	水落 隆司	

## V. 2025 年度役員候補者及び代議員の選挙

2025 年度役員候補者（規則第 5 章）及び代議員（定款第 5 条 3 項及び 6 項）の選挙は、2025 年 2 月 4 日～3 月 4 日に Web による投票で実施した。

-----< 参 考 >-----

2025 年度代議員

106 名

相澤 清晴	太田 賢	吉敷由起子	高橋 徹	西原 基夫	森 洋二郎
青木 直史	大槻 知明	北岡 教英	高橋 宏行	橋本 俊和	森川 博之
浅井光太郎	大橋 弘美	葛岡 成晃	高橋 応明	廣瀬 哲也	森本 佳太
浅井 孝浩	岡 宗一	楠 晃典	高橋 康宏	深沢 徹	山里 敬也
浅谷 耕一	岡田 啓	久世 竜司	高村 誠之	藤井 威生	山下 和也
足立 朋子	奥 健太	蔵田 武志	田口 亮	藤井 俊彰	山末 耕平
荒川 薫	尾上 孝雄	小林 玄	武山 眞弓	藤島 実	山中 直明
池田奈美子	影広 達彦	斎藤 英雄	伊達木 隆	藤元 美俊	山本 剛之
石川 悦子	笠原 正治	佐々木宣介	立野 勝巳	本田 和博	李 鯤
石田 賢治	梶川 嘉延	笹瀬 巖	田中 清	松浦 祐司	渡辺 一帆
伊藤 京子	片山 貴文	佐藤 真一	辻 ゆかり	松尾 慎治	和田山 正
井上 中順	金谷 晴一	眞田 幸俊	富田 章久	松尾 綾子	
井上 真杉	鎌部 浩	佐波 孝彦	中尾 彰宏	松下 剛治	
今井 尚樹	萱野 良樹	篠田 浩一	中島 誠	松田 広	
上嶋 明	川添 雄彦	澁谷 智治	永田 真	松田 勝敬	
上野 雅浩	川西 哲也	島田 達也	中野 義昭	松本健一郎	
植松 友彦	川端 明生	島本 隆	中村 元	水落 隆司	
圓道 知博	河東 晴子	平 明德	仲村 泰明	宮奥 健人	
大石 昇	菊間 信良	高田 潤一	永森 正仁	村松 正吾	